

第

2

章

聯合の時代

概要

日本新聞聯合社は1926（大正15）年5月1日、国際通信社と東方通信社が合併し、日本初の新聞組合組織の通信社として創立された（28年1月に新聞聯合社と改称。以後、聯合と表記）。国際通信専務取締役の岩永裕吉が聯合の専務理事、東方通信主幹の伊達源一郎が理事兼顧問にそれぞれ就いた。岩永とともにナショナル・ニュース・エージェンシー（国家代表通信社）の設立を模索していた古野伊之助は当時、国際のロンドン支局主任（支局長）だったが、聯合発足直後の26年6月に帰国し、東部総支配人（東京）として岩永を補佐した。

合併の背景には、国際と東方の業務が次第に競合するようになり、無駄な出費を防ぐという思惑があった。また「両社に助成金を出していた外務省も、この不合理・不経済な競合を、清算したいと考えるようになった」という（『通信社史』255～6ページ）。

スタート時の組合加盟紙は報知、大阪毎日、東京日日、大阪朝日、東京朝日、国民、中外商業新報、時事新報の8社だったが、その後、組合規則の改正を通じ、全国の地方新聞にも門戸を開いた。

聯合は国際、東方の業務をそのまま引き継いだが、当初は海外ニュースを上記8社に配信する、いわば海外ニュースの代理店に過ぎなかった。そこで出てきたのが、内信（国内ニュース）の配信という考えであった。根底には「自分の国のニュースを収集せずに、ただ外電を輸入しているだけの通信社は、（中略）新聞社が全面的に支持する真の『新聞聯合』にはなれない」（『通信社史』266ページ）という、ある種の焦りがあった。

内信開始をめぐるっては、賛否両論があった。まず当初の加盟8紙は、聯合に海外

ニュース配信を期待していたが、国内ニュースについては聯合に頼る必要はないという事情があった。また、社内的には、東川嘉一・西部総支配人（大阪）が内信開始に強硬に反対し、内信開始に熱意を見せる古野との「東西対決」になった。そこで岩永が東川を説得し内信開始の裁定を下した経緯は、本章の証言でも詳しく描かれている。

27年の内信開始とともに、組織的にも本社にこれを扱うローカル・ニュース部が設けられ、8月には職制改革で内国通信部になった。聯合の内信が真価を発揮したのは、28年11月に京都で開かれた昭和天皇の即位記念式典（御大典）であった。聯合は一大チームを編成して取材に当たり、加盟紙に配信した。本章に収録された座談会や手記などから、当時の取材の模様や裏話などをうかがい知ることができる。さらに翌年の飛行船ツエッペリン伯号飛来の際にも、聯合は大掛かりな取材を繰り広げた。

30年11月、東京駅構内で浜口雄幸首相が狙撃された直後を捉えた写真は、聯合のスクープとなった。その瞬間を振り返ったカメラマンの手記には、事件の様子が克明に記録されている。

聯合とライバル関係にあったのは「日本電報通信社」（現在の「電通」）だ。UP通信のニュースを排他的に配信し、国内ニュースにも力を発揮していた。この時代を「電・聯対立時代」と称することもある。満州事変（31年9月）の第一報で聯合は電通に敗れたが、証言から浮かび上がってくるのは、検閲の存在だ。広告の分野でも聯合は、経験豊富な電通との距離を少しでも縮めようと努力する。その結果が広告聯合社の設立で、関係者の座談会では、これまであまり表に出なかった事実も語られている。

第1節 国内ニュース配信

座談会 国際から聯合へ

1962(昭和37)年11月17日
同盟クラブ会議室で

(出席者)

勢多左武郎

(元日本新聞聯合東部管区)

秋山操

(元日本新聞聯合西部管区)

岩本清

(元日本新聞聯合西部管区)

伊藤勝司

(元日本新聞聯合東部管区)

船木重光

(元日本新聞聯合下関支局主任)

福岡誠一

(元新聞聯合東部管区)

長林密蔵

(元新聞聯合内信局次長兼地方部長)

藤井信次郎

(元新聞聯合内信局)

(編集者注) 勢多、秋山、岩本、伊藤、船木の役職は1926(大正15年)8月の社員名簿、それ以外は1935(昭和10)年12月の社員名

簿による。

❖ ❖ ❖

福岡 『通信社史』のような正史ではなく、裏話とか柔らかな話をお願いしたい。われわれの時代で一番古いのは勢多さんでしょうか。

岩本 そのとき(1926年の日本新聞聯合社発足時)は編集部と言ったんですか。内信²¹はなかったわけですね。

勢多 あの頃は外信²¹だけだった。私が入ったときは編集の親玉が佐藤^{へん}理先生。

福岡 僕らは知らない。

勢多 英国式の人で、60歳を超した方だった。ひげをはやして。

長林 赤いシャツなんか着ておしゃれたたね。

勢多 誤訳すると呼ばれる。電報の誤訳を指摘してね、叱られるわけだ。文章の書き方がいかんとか。僕なんか覚えているのは褒められたことで、叱られたこともある。「ロイド・ジョージが^や揶揄一番」と書いてね。「^や揶揄」^ゆというのとは軽く冷やかすというか、議会で議員に対しあざ笑ったような答弁をしたということで「^や揶揄一番」と。「これはいかん」とか何とか言



前列左から2人目は佐藤顕理、続いて毛利八十太郎、不破磨太

われた。そのようなことを問題にする時代だった。そして「なり」とか、「けり」とか。私が上海にいる時代にそれはやめになった。「何々せり」とか「どこどこに火事ありたり」とかも。「戦火燃ゆる」とか見出しをつけてね。佐藤顕理先生が編集局長、その下にアメリカから帰った毛利八十太郎^{そたろう}という人がいた。昼の編集長が毛利八十太郎で、夜の編集長が古野^{ふるの}（伊之助）さんだった。

長林 八十太郎は古野さんよりずっと年上だろう。

勢多 ずっと違う。あの人の死んだのは78歳ぐらいだから、古野さんより七つかそこいら上ですね。

長林 そんなものでしょうね。がっちりしたおっさんだったな。

福岡 僕は知らない。

勢多 なかなかやかましい人だった。

福岡 不破^{さきまた}（達磨太）さんはいたのか。

勢多 いた。その頃、不破さんはいわゆるマネジャー。みんな和服を着ましてね。はかまをはいていた。

長林 顕理さんもしじゅう和服だったね。

勢多 ええ、僕らもはかまはいていた。

伊藤 信玄袋を持ってたね。

福岡 僕が入ったときは、和服を着ているのは栗屋^{くりや}（関一）さんだけだった。あの人も前からいたのか。

勢多 一番初めかららしい。あの人と塩津。

福岡 塩津誠作。

勢多 あれが一番初めにロイター電を訳したという。栗屋さんもそのころ「セネット」という言葉は元老院と訳すと言っていた。誰かが「元老院という訳じゃいかん。上院になさい」と言っても絶対に承知しない。「セネットというのは決して上院と訳すべき言葉じゃない」「セネットというのは元老院だ。ローマ時代からあるセネットというのは元老院だ」と最後まで元老院を固持していた。

藤井 渡辺さんはずっと後ですか。

勢多 その頃でした。あの方は英文を書いていた。渡辺純一さんは夏の暑い盛りにタイプをたたいて、あまり熱心にやって倒れちゃった。それで毛利と不破が見舞いに行った。そういうことを覚えてる。「実に模範的な社員だ」とか何とか言ってたね。不破先生が褒めてね。

福岡 当時の一つの特徴は総監督というものがいたことだ。イギリス人で（W・E・L）スウィート。英文も書いた。エクステンションをやっていた。背の高い。

長林 大きな人だった。

福岡 (ジョン・ラッセル) ケネディがゼネラルマネジャー(総支配人)。

勢多 ケネディが辞めてからではないか。

秋山 そうではない。ケネディはその次。

勢多 スウィートはいたかな。

福岡 僕が入ったときはとつくにいた。

勢多 その人、しまいにどうなったのか。

福岡 ロンドンの特派員になった。

勢多 ああ、覚えている。あなたに聞いた。あなたがロンドンに行つて

あまり優待されなかったという。幼稚園の先生かなんかになっていた。

福岡 教会のクラークをしていた。

勢多 日曜学校の先生だと言わなかったですか。あなたが行ったとき

お茶をごちそうになったとか。

福岡 そうでしたかね。それは忘れました。

満州事変の第一報で惨敗

勢多 モンティもいたし、軍人もいた。

福岡 それ(軍人)は(マルコム・ダンカン)ケネディだ。

勢多 (ロイターの)キャプテン・ケネディ。夜、分らないことがあると

電話したことを覚えている。キャプテン・ケネディからも電話がくるん

だ。アウト・ゴーイングに。

福岡 アウト・ゴーイングをケネディに頼まれて留守番をしているわけ

ですね。ケネディの話が出たついでに話すとその後、満州事変が起きた。

奉天の柳条溝⁴⁰だったか。とにかく奉天で事件が起こった。中村(震太郎)

大尉というのが殺され、奉天で日支両当局間の交渉が行われていた時

だった。奉天事件は満州事変のきっかけになった。柳条溝の撃ち合いが

始まった。

歴史になったから今では隠すこともないけれども、日本が仕掛けた。ところが日本は向こうからやられたという格好で発表した。柳条溝事件勃発の報道は日本では電通の圧倒的勝利となり、聯合は惨敗した。聯合は佐藤善雄という奉天新聞の社長さんが古野さんの親友で、聯合の(奉天支局長を兼ねていた。若い人も何人かその下にいた。佐藤さんという人は日中親善の非常な熱心家で、日本の陸軍のやり方と正反対の人だった。

聯合の連中は奉天駅前のカフェで、東京本社に帰る同僚の送別会をしていて、たまたま奉天駅を中心に始まった日本軍の慌ただしい動きにおつかった。柳条溝事件を勃発とほとんど同時にキャッチしたが、中国側の事情に通じていた佐藤さんが「事件は匪賊^{ひやく}の仕業だ」と打電したため、電報局で軍に押さえられ、東京の新聞の朝刊最終版にはわずか一本の電報が載っただけ。佐藤さんは後で中国正規軍の仕業ということにしなければ打電できないということを知り、途中から事件の報道を若い者たちに任せて、自分は手を引いた。

第一報は少し遅れたが、電報が入ってきた。昭和6年だったか。そのとき、僕は外信部長をしていたから誰かが宿直していて僕に電話をかけてきた。僕はすぐタクシーを呼んで裸のまま、9月だったけれど洋服を抱え込んで車に乗って飛んできた。その間に「電報は打つな」と言っておいた。当然ケネディに知らせて電報を打つべきなのだが、「僕が行くまでケネディには電話をかけるな」と言っておいた。吉祥寺から25分着いた。それですぐロイターに電報を打った。勝手に。ケネディに知らせないで。日本側がやったということではなく。そういうふうになると困るので、うそはつけないけれども当たらず障らずの電報を至急報で打って、それからおもむろにケネディに電話をかけた。日本では電通に

えらく負けたが、締め切りの関係か何かでロイターは速かったわけだ。それでケネディにとっても感謝された。どうもくすぐったくて。

勢多 いい人でしたね。

福岡 僕が(ロンドン)に行ったときは、(英国)外務省の囑託をしていて、非常に日本通だということで珍重されていた。

勢多 ケネディの奥さんは「ミスター・ケネディ」と言うのを嫌がるんだね。「キャプテン・ケネディだろう」と言うのだ。そう言ってもらいたかったらしい。足をけがしたのは第1次大戦か何かでやられたんでしょう。それが大変自慢だった。

長林 小さい男だったな。

藤井 やせた人だったね。

福岡 ケネディはその後、OBE(大英帝国第4級勲位)という勲章をもらった。日英親善の功績だろうね。そういうことは、イギリスはなかなか行き届いている。もらった時はひどく喜んでた。スウィートなんかよりはるかに立派な人だった。スウィートというのはどうも。威張っていた。英文ニュースだけでなく、全体の総監督なのだ。関東大震災で古野さんが北京から飛んで帰ったら、スウィートが総監督の立場から「お前は北京が任地だから、東京でうろろしていちや駄目だ。早く帰れ」と言った。古野さんは「何をすつとばけたことを言っているんだ」と。古野さんは国際を引っくり返して大改革をやるつもりで戻っているのだからね。

勢多 いつぐらいに戻られたのか、古野さんは。

福岡 大正12年の秋だ。

勢多 古野さんは震災のときにちょうど帰られた。僕はそのとき、大阪にやられた。東京で電信をとれない。大阪に(電信が)来るから大阪に行ってくれと。震災後すぐ、総支配人のケネディが「お前行け」と、手を握っ

て激励してくれたことを覚えている。大阪で泊まっているとこへ古野さんが北京から帰られた。ちょうどそのとき、天皇陛下の詔勅が出た。どういふのか覚えていないが、号外が出て、古野さんが「これは打たなくちやいかん」と言つて、自分で電報をお打ちになったことを、アウト・ゴーイングやられたことを記憶している。

ケネディに引退勧告

福岡 そのとき、古野さんがケネディに引退を勧告してね。ケネディは快く引退した。そして岩永さんを引っ張り出したが、古野さんとスウィートとの関係はなかなかつきまとつてね。岩永さんの方針で外国に人を出さなきゃいかん、日本人が特派員になつて電報を打たなきゃいかんという。第一歩として北京には行つたが、欧米には古野さんがロンドンに行つた。その間古野氏がロンドンに駐在中に日本新聞聯合ができた。しかし聯合は、古野さんが意図していたものと違つていた。内信がなく、古野さんは「そういうものは意味がない」とロンドンから岩永さんに相当率直な手紙を寄こした。それから急いで帰ってきたのだ。だから古野さんのロンドン駐在は非常に短い。聯合はどうしても内信を基礎にしなければならぬということだった。聯合ができたのは大正15年5月。古野さんは昭和2年には東京にいた。

長林 昭和2年の春にいた。

福岡 僕は漢口に3月、派遣された。あのとき、国共合作政府が漢口にできて、国民政府が初めてできた。古野さんから「これは今までの支那通じゃ駄目だ。欧米を見た目で報道しなきゃいかん」ということで、「君ぐらいのものだから行ってこい」と言い渡されて行つたのが昭和2年3月。だから古野さんはちょっとしかロンドンにいなかった。

長林 昭和元年には帰っていましたね。大正天皇がご病氣のときによく宮内省に来了。

福岡 聯合ができて間もなく帰ってこられた。

藤井 古野さんが直接ニュースの仕事をやられたのはロンドン支局長が最後で、それ以後は本社だ。マネージする仕事ばかりだった。

福岡 それですます本社、名実ともに日本人がやらなきゃいかん。それにはイギリス人の総監督なんていうのは駄目だというのだ。スウィートはどうしても処分しなきゃいかん。スウィートは月給千円もらって、岩永さんより高給だと思った。エクステンションだけやって、日本人の外信局長の下に置くというわけにはいかない人だった。それで古野さんと岩永さんが考えた揚げ句、古野さんの後任にしばらくロンドンに飛ばそうというので、2年かそこらの期限を切って向こうでの生活を保証して出した。実際の仕事はほとんどできなかったね。高等師範の先生あがりなのだ。期限が切れるとロンドンで縁が切れた。その時分は国際通信というのは外人のやっているようなものだった。

勢多 スウィートの月給は千円といわれたが、あの頃、800円と聞いたんだ。スウィートが震災で連れてきた老人がいたと思う。アダムスさんだったか。

福岡 あれは500円。あの人は安かった。善良な人だった。実に不幸な人で、横浜でジャパン・ガゼット⁴¹だったか、古くからやっていた。それで年がたって功なり名を遂げて、ガゼットを横浜市に譲渡する契約ができた。調印すれば金をもらってイギリスに帰って楽隠居できる。その調印の前の日かなんかがあの大震災だった。調印せず、ほんとに無一文になった。それで国際に呼んだ。それまで社長をやっていた人が英文のエクステンションをやって、最後まで働いた。

勢多 あれはスウィートが連れてきたのだろう。

福岡 そこまでは知らない。しかし仕事はスウィートよりできた。アダムスはなかなか。月給は少ないし、ほとんど無一文なだけども、自分のことには実に倨約で、それでいてボーイには10円ぐらいすぐ出す。こちらが「そんなにいらぬ」と言って5円にしてみらうのが大変。「俺がいつ死ぬか分からんから、ワイフが後で困らないように1銭でも残してやらなきゃ。無駄遣いは全然できない」と言っていた。それでいてボーイには10円出す。スウィートなら出しはしない。実に珍しい人だった。彼はスコットランド人で、スコットランド人は倨約家だからね。プライベートのことだけでなく、会社のこともそういう調子でね。

長林 面白い人ですね。

勢多 とにかく親切な人でしたな。

福岡 スウィートとは非常に対照的な人でしたな。

理想家と現実主義者の闘い

福岡 古野さんがロンドンから帰ってきて「聯合に内信をつくらなきゃいかん」と言う。そこには岩本さんがいた。

岩本 大阪だからね。秋山さんがよく知っている。僕は駆け出し。

福岡 その話を一つ。僕らはこちら（東京）のことは知っているが、大阪のことは分からないのでお話し願いたい。

長林 古野さんと東川（嘉一）さんは本当のライバルだったんだね。顔を見るのも嫌だというくらい。

船木 東部総支配人と西部総支配人。

福岡 そうだね。名前が。

秋山 その時分は。

長林 理想家と現実主義者の闘いだからなかなか。

勢多 あの頃、秋山さんは大阪にいたんですか。

秋山 大阪です。

福岡 岩本さんもそうだね。

勢多 あの頃、大阪に『高砂丸に泣く』という本を書いた人がいただろう。

秋山 塚本(きりめづ)さん。

福岡 秋山さんがその次ぐらいだ。あのときは、外経は大阪が本部だったんだね。

秋山 東川さんが事実上始めたもんだから、それで向こうが本部になっているわけだ。

福岡 岩本さんは東川さんの秘書？

岩本 まだそこまでいかない。入社試験ではスウィートさんの英文書き取りをやった。3月31日に社に行ったら今日から大阪に行けということ、その晩の夜行で行って4月1日から出社した。大学じゃ政治をやった。大阪に行ったら外国経済のえらい専門のことなんです。全然分からない。それで調査部に行けと言われた。調査部では2人か3人で外国の新聞や雑誌をたくさん集め、記事のインデックスをとって整理していた。

福岡 相当、向こうでやっていたね。

岩本 1年ぐらいやってた。

長林 大将は誰か。

秋山 清水元太郎。

岩本 清水さんと石川勝司さんね。これも東京から行ってそこに放り込まれ、その下で僕は1年やった。

秋山 あの調査は特色あるものだった。しかも私どもが入った時分、大正8年か9年ごろからおそくやっているんだからね。その時分、ロンドンの「エコノミスト」とかアメリカの「ファイナンシャルプロニュー

ス」とか、世界の有名な雑誌をとって、重要な記事をみんな見て、索引を作り、タイプ打って置いてあるわけだ。その時分、電報は非常に短い。簡単だから背景が分からない。だから備考としてつけた。本文は2、3行だけど備考が長い。

福岡 外信なんか備考なしに記事を書いていたんだ。

珍重された経済通信

岩本 これは勉強になりましたね。1年間これをやったけれども、何十種類という一般の経済が主だった。

藤井 解説ですね。

秋山 専門商品の例えばメタルとかゴムとかのいろいろな雑誌をとっていた。

福岡 赤紙^{あかがみ}の解説と言っていたね。

岩本 「赤電」。

秋山 最初は電報につけるのが主だったが、後にそれを解説にした。
福岡 独立させた。

藤井 リーフレットとか何か。

船本 それはずっと後だ。新聞社にリーフレットという名称で。

藤井 個人読者にやったわけでしょう。経済通信⁴は。

岩本 調査部は、どこから問い合わせがあってもすぐ答えられる仕組みだった。

秋山 財界でも銀行でも住友だろうがどこでも国際ほど資料を持ってそれを整理し、いつでも使えるところはないから。

福岡 珍重されたね。

秋山 よそから聞いてきたりした。

福岡 だから経済通信はずいぶん高かった。僕らの時分は1口千円ぐらい。

勢多 月1000円。

秋山 一番高いのは綿花通信。一番件数も多かったけれど、それが200円でしょう。

福岡 普通のは年間で千円じゃなかったかな。

秋山 そうそう1年で千円。綿花は2千円。

福岡 相当の金額だね。

秋山 その時分、月給1000円もとれば大したものだからね。

藤井 日本の景気も良かったんだろう。

岩本 よそはそんな電報は入らない。これが入ってこないと朝の相場が立たないし、非常に重要な材料だったのだろうね。

勢多 あの収入はケネディさんの収入じゃなかったのか。

福岡 それは国際のときだろう。聯合になってからそういうことはない。

岩本 聯合で経済局になって経済局長という名前だったのですね。

長林 兼ねていたわけだね。

船木 岩本さんは東川さんと一緒だった。

岩本 ケネディさんが東川さんに「大阪に行って新聞社を開け」と言った。そのときに名文句がある。「お前、行くときは誰も迎えに出ないけれども、帰るときはうんと人が送ってくるぞ」という話をケネディさんがした。東川さんは1人で行き、笠井というボーイさんを雇って2人で始めた。そこへ岡崎幸次郎さんが入り、それが経済通信の始まりだ。

船木 調査部の話が出たが、大阪の人はみんな専門、専門で勉強したんじゃないですか。

秋山 後にはね。

長林 業種別に。

秋山 綿花は誰が担当する。金物とか、あるいは為替金融は誰というふうに。一応ね。

船木 僕は東川さんから「お前は下関にいるんだから海運をやれ」と言われたことがあった。

岩本 僕も初めに「綿花をやれ」ということで、綿花のめの字も知らないで困った。

船木 稲本君の大連の銀相場は名声を博したね。

岩本 パンフレットを出しましたね。

長林 公の席じゃそんなことはなかっただろうけれど、古野さんは陰では東川さんのことを盛んにこき下ろしていた。東川さんは古野評をしたことはないのか。

岩本 われわれにはそういう話をしない人だった。非常に厳格な人で、くだけたことは言わなかった。

藤井 内信開始の際の空気はどうだった。大阪で反対の空気は出ていなかったのですか。

秋山 大阪では別に。

船木 私は下関にいたのだが、われわれは経済の出身。内信を始めたんで、新聞のできる支局長を置かなくてはいかんということがあった。いずれ更迭されるかもしれない、代わらなくてはいけないだろうと内心、腹を決めていた。山口巖^{いわ}さんが新聞か何かで大阪に来たのではないか。

秋山 そうです。

福岡 新聞記者だったですか。

長林 大阪の人は内信をあまり好きじゃなかっただろう。

秋山 それはそうでしょうね。少なくとも当初は。これで財政的に困ることは分かっているし、それまで大阪は優遇されていたからね。

福岡 ぬくぬくとしていたわけだね。

秋山 もうからん仕事をやって、あとでキューキューされたらかなわないという気持ちはあっただろう。

岩本 経済通信もそんなにもうかっていなかった。経済通信自体が方向転換しなきゃいかんという時期だった。一軒一軒の購読者から金を取るほかに同業団体からまとめて金を取る。そういう運動を東川さんがやっていた。同業協調の必要とか何とかのパンフレットを出して、団体から少しまとめて金を取るという構想をやっておられた。非常に頭が良く、収支をきちっとする堅い方でした。これに対して東京の計画がずさんで、気に入らなかったのではない。明らかに収支が合わない。冒険だという考えではなかっただろうか。

長林 確かにそうだった。

福岡 内を固めるという組織化だね。古野さんとはかく目標が高く、事業自体を重視していた。古野さんと岩永さんが交互に編集室にやってきて、われわれはいろいろ教育されるわけだ。ロンドンから帰ってきた古野さんに岩永さんがやつつけられた。「こんなばかげた日本新聞聯合社なんて、世界中にこんなばかなものはない」と言っちゃつつけるのだ。岩永さんは閉口しちゃったんだ。それで東川さんがやってきて、話が込み入るんで、岩永さんの所で何回か泊まった。そういうことを覚えている。岩永さんは東川さんに非常に遠慮していた。一目置いていたんだね。

「僕のライトハンド」

長林 そうらしいね。

福岡 古野さんにはしょっちゅう、「古野君、古野君」と言っているんだけれど東川さんは年も上だったのかな。なんとなく客員ふうな扱いだね。
長林 年も岩永さんと同じぐらいでしょう。

福岡 それで内信の論議のときに岩永さん、非常に苦慮したんだね。理論的には古野さんの言うことに全然文句はないんだ。しかし東川説も現実の安全性からいうと非常に強いんだ。個人的な関係でいうと東川さんに遠慮するということがあって、最後の土壇場で決裁をするとき、岩永さんは非常に苦しんだ。漏れ聞いたことだけど、声涙ともにくだって、「東川君は僕のライトハンドなんだ。古野君はレフトで、ともに僕になきゃいかん人間なんだ。ここでどっちかの決定をしなきゃいかんということは非常に苦痛だが、この際、将来のことを考えると内信を始めざるを得ない。東川君はぜひひとつ行き掛かりを忘れて協力してほしい」という最後の断を下した日があった。

長林 東川さんが受諾したときには2人とも泣いたらしいね。岩永邸のストープの前。玄関を入ると大きなのが左側にあったが、あそこで会談をやった。

岩本 (東川は)新聞組合主義を説いておられた。APの例を特に挙げておそらく時期尚早という議論じゃなかったのか。

長林 そうだろうね。やがてはやらなきゃならんことはあっただろうけれども。

岩本 古野さんは今やらなきゃ駄目だと言うんで、なかなか大変だったらしい。われわれは(東川が)上京すると喜んだ。おられると窮屈なものだから(笑)。

福岡 そうらしいね。昭和2年3月、漢口に行くとき、僕は大阪に寄ったんだ。あのとき岩本さんもいたんだな。

岩本 僕はいたよ。

福岡 僕は東京で岩永さんや古野さんと話をしている調子で東川さんとも話したんだ。そうしたら後で大阪の連中が「あんたあんなことよく言えますね」と言っ。こちらがあっけに取られた。

岩本 それはもう大変だろう。

福岡 僕の態度は大阪の連中からは、けしからん不遜な態度と思われるちゃったんだね(笑)。

岩本 たばこが嫌いだね。ちょっとでも煙があると嫌な顔をするんで、東川さんの顔を見るとたばこも吸えないんだ。

秋山 大きい声で怒鳴るわけでもないけど何となしに怖くてね。

岩本 いらっしやるのとときと、いらっしやらないときとではまるで違う。いるときはしゅんとして、いなくなると「あみだ」なんかやつたり(笑)。にらみは大いに利かせていたね。

長林 少し早いという頭だったのだろう。必ずしも絶対反対ではなかった。

岩本 A P(通信)のことは当時も随分紹介されたし、新聞組合主義でなくではならないということは非常に言われたが、おそらく内信を始めるのはまだ早いと。

福岡 古野さんが(東京に)いないときに岩永さんが東川さんと相談して聯合をつくった。聯合をつくるのにA Pの理論が分かっていない、というのが古野さんの言い分だ。根本を忘れているとね。

岩本 僕が大阪に行くとき、岩永さんに「大阪にうちの天才がおる。こいつに鍛えられてくれれば君も一人前になる」とやられたんだよ(笑)。

福岡 それを実証したわけだね(笑)。

岩本 参ったよ。窮屈な人でね。皆怖がつて。身体が弱くて、休まれると京都に交代でお使いに行くわけだ。稲本君なんか「お見舞いにながりました」と言うのを「お悔やみに上がりました」と言った(爆笑)。東川さんの前に出たら汗をたらたら流して全然ものを言えない。

福岡 僕に「君は一番大胆だ」と言ったのは稲本さんだ。

岩本 秋山さんとか塚本さんは割合、平気でやっていたが、われわれは

どうも。

船木 岩本さんは秘書をやっていたから随分、気苦労が多かっただろうね。

岩本 海外の経済英文通信をやれと言われて朝7時ごろから毎日出てやった。赤電の英文版。それを行っているうちにだんだん用事を手伝えということになった。その代わり勉強になった。手紙の原稿を英文で書くんだが、真っ赤になって返されてくる。「こんちくしょう」と思って「今度はどうだ」と書くと、またくちやくちやにやられてしまう。これが随分、役に立った。英語の書き方は、僕は東川さんに教えてもらった。大阪が上海のロイターへのニュース打電を引き受けていた。大きな地震とかがあれば、大阪から電報を打つ。これは東川さんがやっておられたから留守中なんか身代わりをやった。

もう一つ。「ファインナンス・アンド・コマース」という上海の週刊誌向けに「ウィークリー・ジャパンレター」という英文をやれと言われた。毎週1回。初めは東川さんに直してもらいながらやっていて、しまいはパーカーさんに直してもらった。原稿料が100円ぐらい入ってきて、半分は先生にあげた。それで僕は英語が書けるようになった。

秋山 東川さんの英語というのは非常に良いらしい。私がロンドンに行ったときに向こうの人が褒めていた。センテンスが短くて簡単。日本(語でもそうだが、原因と結果を必ず別にする。例えば「相場は何が上がった。これはこういう理由である」というふうな。英文もそれに似ている。私どもは知らないけど、ロンドンに行ったら「あの人の英語はうまいね」とロイターの連中が言っていた。

岩本 文章にはやかましい人だった。いちいち自分で目を通す。こちらは勉強になった。

福岡 辛いけれどもそういう人の所にいるのがいいんだね。

秋山 手紙を直すと後に索引がつくんだから。事務的に完璧だろうね。

福岡 事務家なんだね。古野さんはそうじゃないから非常に対照的だよ。
(東川さんはショートハンド(英文速記)もできたんだ。)

秋山 元々がケネディの秘書だからね。

福岡 英語を勉強するのはショートハンドがいいと言われたので始めた、という話を聞いたことがある。

秋山 ケネディの秘書をやっていたから当然やったのだろう。

長林 相当長い文章書きましたね。

岩本 東京式に対し大阪式を持っておられた。僕もなぜ東京で仕込まず、すぐに大阪に寄こしたのかと誰かに聞いたら「東京の悪い癖がうつらうちこつちに」ということで31日の晩にたつことになった(笑)。

福岡 東川さんのアイデアか。古野さんはそうじゃないからね。これは書いていかどうか知らんけれども、古野さんは東川さんのことは「商館番頭」と言っていた。それじゃ新聞組合はできないという考え方を持っていた。藤井君は帝国通信社にいたけれど帝通が現実に没落したのは何年ですか。

藤井 昭和4年だ。通信省への(料金)滞納で予約電話を止められた。

御大典取材で存在価値示す

福岡 聯合の内信を徳光衣城(いじょう)が受け持って、本当に始まったのは昭和2年の秋以後だ。僕は昭和2年の11月に漢口から帰ってきて、初めて岩永さんのところで徳光衣城に会った。そのときは、内信は始まっていなかった。これから始めようというときで、先生も岩永邸に初めて来た。帝通が没落したのは、聯合の内信が始まって本当にまだ日がたっていないときだ。そこへもってきて帝通が通信をやめた。ご承知のように当時

は民政党系の新聞がみんな帝通だった。政友会系の電通に通信を頼まなきゃいけないというので、非常な苦痛なんだ。想像以上にみんな苦しんだ。しかし背に腹は代えられず、大部分の新聞が電通に行った。

高知新聞⁴³の福田君の岳父で野中楠吉という人が僕を訪ねてやってきた。僕の家内の親父と野中が高知新聞を始めた5人のうちの仲間だった。家内の親父は早く亡くなった。野中さんが言うには「実は帝通が駄目になった」。内信らしいものは電通しかないが、高知は純然たる民政系だ。当時は非常に濃厚な民政系の新聞だから「いやだ」というわけだ。その代わりというと、聯合の出来立てはやはやの内信しかない。これはどういうことになるか、誰も分からない。

野中さんは「あんたここにいるから、ひとつ岩永、古野両氏に本気でやるつもりかどうか聞いてくれ。本当にものにするつもりなら非常な冒険だけれども、高知新聞はひとつ、あんたもいることだし、電通に行かないでここに来よう」と言う。こっちは責任重大だ。古野さんにそれまで盛んに吹き込まれていたけれども、「ちよつと待っていたきたい。確かめてからお返事します」と言って帰した。

岩永さんと古野さんに「実はこういうわけで野中さんが来た」と言うのと、2人とも「それはカモがネギをしょってきたようなものだ。それを逃してどうするんだ」というわけで、2人は「俺が命懸けで保証するから早速入るように」と言ってくれという。野中社長に話をしたら「それじゃ入りましょう」というので、高知が丸抱えでやってきた。聯合の内信の購読者ナンバーワンだろうか。

藤井 聯合にとつては御大典が非常にいいチャンスで、その存在価値を見せつけた。できて早々にね。御大典のとき、帝通はまだ予約電話もあって、やっていたが、士気はすっかり衰えて、がたがたして駄目なのだ。私は(帝通で)宮内省詰だったが、ほとんど予定原稿だけで、京都に

行っても遊ぶだけ。生の原稿はほとんどやらなかった。だからあのとき新聞社は大部分、聯合をとっただろう。あれがあったのは聯合にとって非常に運が良かった。

福岡 それほど心配はないというところを見せていたから、高知もそういうふうになったのだね。

藤井 その通りだ。御大典というのは今の時代と違って大変なことだからね。

福岡 余談だが、野中という人は土佐弁で、われわれでも話が分かりにくい人だった。高知は財政的にはしっかりしているけれど、発行部数なんかそう多いとは言えない。しかし古野さんは野中氏を同盟の理事会副会長にした。

岩本 大阪に新聞部があったのはどういうことか。外国に電報打つやつか。

秋山 向こうからも来るし、私はトン・ツーもできたので、実は土屋さんの紹介で入ったんだ。入って新聞部の方にちよつとやられた。土屋さんとその下に風見章がいて、2階には一矢慧という、後に英文毎日に行った英語の達者な男がいた。神戸のクロニクルにずっといて日本字が書けないんだ。おかしい話だけれど手紙まで僕に頼んだりして(笑)。けんかも英語、日本語ではけんかできないというぐらいの変わり者だった。その時分は上海からきたものを翻訳して東京に送った。

福岡 東京にも新聞部はあった。ローカルニュースなんだ。東京では土肥常温が新聞部の大将だった。外信は新聞部じゃないんだ。その時分は**勢多** 土肥という人は何をしていたのか。

福岡 ローカル新聞部長だ。東京の住谷金吉と2人でね。内信部のできる前の外信部長だったんですよ。

長林 だから古野さんなんか顎で使われた方だった。

福岡 大先輩だから。

勢多 土肥が「古野君、こんなことじゃ困るね」って言ったら、古野さんは「はい」なんて言っていた(笑)。

秋山 私がびっくりしたのは、土肥さんが腰にタオルかけて、風呂に行くような格好で大阪にげた履きで、実にぞんざいなふうをしてやってきたことだ。面白い人だった。

長林 人見知りをしなさすぎてね。

福岡 コスモポリタンでいい人だったね。

勢多 上海に行くとき、神戸まで送ってきてくれてね。船まで乗り込んだ。なぜ乗り込んだのかと思ったら、ボーイから外国たばこのようなものをたくさん買ってね。なかなか如才ないところがあった。

長林 千代田通信⁴⁴にいた頃、事務所はドイツ大使館の下にあった。そこに始終来ていた。朝なんかタオルを腰に下げて千代田通信つまり井原家だ。井原家で飯を食っているおやじがいるという。それが土肥なんだ(笑)。とことと上がって自分で飯をよそって食っているという。それほどに徹底した人だ。

福岡 僕が病気で休んでいる間、1カ月の弁当代を土肥さんが知らない間に払っているんだ。弁当屋が取りにこないからおかしいと思ったら、「ああ、あれは俺が払ってあるよ」とか言ってるね、平気な顔しているんだ。**勢多** あの人は漫画家の友達が多くて、岡本一平なんか非常に付き合いがあった。葬式には岡本夫婦が来ていた。それから先生土肥のことは翻訳部に3人入れたんだ。それが共産党で、仙台で死んだ有名な市川正一、文芸の青野季吉^{すゑきち}、平林初之輔といった人たちを連れてきた。そのころ翻訳はテーブルに向かって長いベンチみたいな椅子があり、そこにみんな寄って翻訳する。佐藤顕理先生は厳然として別室にいるが、翻訳のヒラ記者のわれわれはそういうところに並んで翻訳していた。

長林 伊藤さん、葵町のころの空気を。松永さんとか古野氏とかいろいろ面白い話があると思うが。

伊藤 僕はあの時分、相当若かった。一番記憶にあるのは佐藤先生だ。あの人は和服で人力車に乗って来るんだ。信玄袋の中に草履が入っている。そばにいる者が袋を受け取って草履を出すわけだ。だから車の音がすると、なるべく入り口の方に行かないんだ。そういう記憶がある。

長林 えらい貴族的なじいさんだったね。

伊藤 東川さんが時々、東京に出てきてずいぶん怖い人だと思った。何と言うか、とっつきにくい、気難しいという感じがした。

福岡 松宮君は東川さんの家にいたから私生活のことはよく知っているだろう。

船木 松宮君はどうしていたのか。

福岡 書生をしていたんですよ。

船木 書生ですか。京都支局があそこ(東川の自宅)になったんだね。

伊藤 家と同じだった。

大阪支社に新聞部

岩本 話は戻るが、大阪の内信関係が始まったころ、大阪に新聞部ができた。われわれ経済は3階におり、新聞部は2階だった。初めは大賀知周だったかな。板垣君とか藤川君、三浦良知とかが入ってきた。ところが大賀さんというのは本当の新聞記者で、むしろだらしない方だったから、東川さんは嫌いだっただね。気風が合わないので2階組は虐待された(笑)。

福岡 またえらい者を大阪にやったものだね。

岩本 当時の新聞部から今、人材が出ているね。藤川、板垣、三浦、もっ

といる。

長林 ドンちゃん(塚村敏夫)は後だな。

藤井 僕は(山口)巖さんが新聞部長のとき、大阪の(陸軍特別)大演習で出張したんだ。岩本さんはそのころは大阪じゃないのでは。

岩本 (昭和)7年までいたけれど。

藤井 もっと後だな。大阪の大演習は。

岩本 東川さんは、経済通信の次はドイツ通信。特派員をなかなか出せないんで、財界の連中から1口年間50円、200口集めてドイツの産業合理化の研究をしていた。

藤井 大阪支社というのは非常に排他的というか、東京から行く支社長を代々排撃し、みんなてこずった。新聞部長の萩野君も排撃され、近藤公一なんか、辞令が出ながら遂に行かないでそのままかきあつた。福岡 近藤は大阪育ちだ。僕が同盟になった後に大阪支社長で行ったとき、近藤は編集部長だった。

伊藤 あの人の支社長という話はなかったな。

藤井 編集部長だった。どうにもしようがない、みんな行ってもはじき出すと言うので、推測だが、例の古野式のやり方で板垣、藤川とみんな東京に持ってきてしまった。

福岡 それは新聞部だ。塚本義隆が支社長の時だ。

藤井 (山口)巖さんの後の連中が頑張っており、東京の連中を受け付けないのだ。

秋山 板垣さんあたりだ、それは。われわれは知らなかった。

福岡 ちょっと分かれていたね。

長林 高岩吉(たかいわき)というのがあったですね。

岩本 あれは私の後、調査部にいた。

福岡 随分後までいた。僕が行ったときにまだいた。



新聞聯合の本社＝銀座西8丁目（現在の銀座8丁目）

藤井 豊田さんはもっと後か。

岩本 豊田、寺西君は同じぐらいで、昭和5、6年ぐらいじゃなかったか。みんな正式に採ってもらえず、電車賃をもらって20円で来た組だ。正式の採用じゃなく電車賃だけもらった。非常に就職難のときだ。

福岡 東京にもあった。警察回りが30円ぐらい。30円の社会部員が20人くらいいた。

長林 電車の切符⁴⁵1冊はやらないんだ。

岩本 だんだん初任給が安くなった。福岡さんが80円。私も80円だった。その後70円、60円になり、50円くらいまできた。

福岡 購買力が上がっていたから総体的には同じようなものだ。

岩本 あれは何年だろうか。暮れのボーナスが15円、10円、5円というのは。

秋山 15円は（月給）1000円以上の人。50円から1000円までが10円で、50円以下が5円だ。

藤井 僕は成績が悪かったのだ。僕は60円だったけど5円だったもの

（笑）

福岡 成績だけじゃない、年限が関係していた。

長林 萩野か誰か憤慨していた。銀座へ出たら足が出たといって（笑）。

藤井 僕は聯合に入ったのが昭和4年。それまで60円もらっていた。そうしたら据え置きで60円。帝通にいるときは、ちょこちょこ請求するとか、電券（電車の切符）も売れば3円か幾ら。居残りをすれば弁当をただで食べられたり、いろいろあるからそういうものを換算すれば15円ぐらいになる。ところが聯合へ来たら60円ポッキリ。何にもくれない。だから減収なんだ。

運転手は人気の職業

福岡 「都」という弁当屋があり、そこに「車部」があった。人力のことなんだ。東京新聞はその時分、「都新聞」⁴⁶だったので、都新聞の社員が主たるお得意だったんだろう。国際、聯合も伝票で車に乗るわけだ。車に乗ったことにして請求をしているやつがいた（笑）。一番簡単に金になる。

藤井 聯合に内信ができてから僕が忘れられない人物は、たった1台の車の運転手の浜兵夫だ。駆け出しの新聞記者より威張っていた。1台だからたいていの所へ行っているので知っているんだ。どこへ行くと云えば、何々大臣はどこ、何々書記官長はどこに來ていると一番詳しい。長島又男の『駆出し日記』にそれが出ている。長島が出されたときに心配していたら、「俺が教えてやる」といって、全部そこら辺に連れて行ってくれたことがある。フォードかなんかでね。外信はあまり使わなかったかもしれないが、あの車はよく稼いだ。自動車なんていうのはいつごろから使うようになったものだろうか。

福岡 だいぶ後だ。岩永さんは初めから自動車に乗っていたけれども自

分の車だろう。大山という運転手がいてね。

岩本 よその車と競走したですね。

福岡 そうそう。スピードの競走をするくらい、仕事の競争が激しかった。

勢多 岩永さんの車が川に入ったことがあり、しばらく修理にやった。そのときに岩永さんが面白いことを言った。車が修理になっても命が助かったから、随分もうかったと思うと。そして体が何でもなかったら、車の修理代がもう少し安くなればいいと。欲の深いもんだなと言った。大山という運転手がいた。おとなしくてお洒落^{しゃれ}だった。

福岡 あの時分の運転手というのはなかなか地位が高くて、月給の話が盛んに出るんだけど、僕ら80円が入ったとき、大山の月給が150円なんだ。運転手の社会的地位は高かった。稀少価値なんだね。

勢多 あの時、運転手は幅を利かせていた。収入も相当あったんだね。

藤井 その時分の運転手は、今の飛行機乗りくらいに人気があったね。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

座談会 聯合と内信(第1部)

1963(昭和38)年6月5日

(出席者)

岡村一二^{いちじ}

(内信局社会部長)

大平安孝

(内信局政治部長)

長林密蔵 (内信局次長兼地方部長) 〓司会

田中正太郎 (内信局)

猪伏清^{いづみ} (内信局)

浅野豊 (内信局)

藤井信次郎 (内信局)

福岡誠一 (外信局外信部長兼ロンドン支局長)

大川幸之助 (総務局庶務部長)

板垣武男 (大阪支社内信部編集主任)

佐々木健児 (満州国通信社通信部長)

(編集者注) 役職は佐々木を除き、いずれも新聞聯合社における1935(昭和10)年12月時点のもの

❖ ❖ ❖

藤井 今日座談会は『通信社史』の続編で、新聞聯合社の内信開始という問題に焦点を当てたい。聯合が内信を始めて、皆さん非常に苦心してやられたときの状況を裏話やいろんな人の思い出、その他、面白い問題があるだろうから、それを伺おうというのが目的です。亡くなられた方が非常に多いし、方々に散っておられて何ともならないということで、生き残り兵が今日おいでいただいた方々です。大阪を代表して猪伏さんがみえている。司会は長林さんにやっていただく。

当時、帝国通信社から外電を地方新聞などに頒布させていたが、この契約が昭和2(1927)年に満期になったのを機に聯合が直接やることになった。同時に国内ニュースの収集頒布を5月1日から実施することにして2月下旬に全国の新聞社にあいさつ状を出した。しかし、実際にニュースを加盟社に配給して正式に業務を開始したのは昭和3年1月1

日。昭和2年に内信部を設けて徳光（衣城^{いじょう}）さん以下の陣容ができ、3年6月には局制になった。

長林 最初に皆さんが入社されたいきさつを。私のことを言うと、昭和2年1月に入社したが、その頃はもちろん内信は1^バも出ていない。

大平 内信をつくることになって高井（信義）君と大賀（知周）の2人が僕のところに相談に来た。一番先に内信としてやらなければならぬのは、各社の追従を許さないものを出さなければいけないということで、どうしても（千代田通信の）長林さんに入ってもらい、宮内省の記事は聯合独占という形を取りたいという話だった。長林さんが入ったという話を聞き、それが実現したと僕は記憶している。

長林 そうなんです。

藤井 『通信社史』によると、高井さん、岡村さん、栗林（農夫^{たみお}）さん、浅野さんは、局制になった3年6月のちよっと前に入ったというのだ。内信部ができた当座はいらっしゃらなかったというふうに出ている。

佐々木 それは間違いだ。大体2年の暮れにはそろったんです。

長林 2年9月の改革の頃は局長と言わず、内国通信部長と言ったのだが、東方通信の北京支社長だった徳光が来たんです。われわれは主任と言うのですね。大賀と長林、天野良和、それから部員が広岡光治、大平（安孝）、大川幸之助、田中、萩野伊八、沼佐隆次、塚村敏夫、福田（はじめ）36名。

田中 昭和何年ですか。

長林 昭和2年9月の改革です。

大平 天野君が入ったときに私が聞いていたのは、各社が車中談というものでもぞろぞろ付いて歩くのはいかん、経費節減の上からも車中談は全部聯合に任せろということ、天野は文章が古くてちよっと変だけれどあれがいいじゃないか、あれなら各社も認めるだろうということで、天

野を入れた。こう僕は聞いており、また相談を受けた。聯合を利用しようという空気が各社に非常に濃厚な時代だと思った。

長林 それは発表ものですよ。

田中 発表ものもそうだし、だんだんね。一斉配達というのは初めからやったのか。

長林 一斉配達は初めからでしょうね。私が昭和2年1月に入ったときはもちろん内信なんかない。私が最初に入ったのだが、2月に大正天皇の御大葬があり、私に雑観を書けと言う村岡清治（報道係主任）というおじいさんがいた。

内信拡充で次々とスカウト

大平 内信部長か主任かな。

長林 主任とかだったですね。

福岡 内信ができる前からいた。ローカルという部にあの人はいた。

大平 徳光さんはいつ上京してきたんだろうか。

大川 昭和2年夏の終わりだ。僕は一緒にくっついて帰ってきた。内信部を拡充して仕事らしい仕事をやらせるのは徳光しかなくろうというので、引っ張ってきた。私はさっぱり内信のことは分からない。ただ帰ってこいというから漫然とくっついて帰ってきたんで、ちっともお役に立たなかった。夏の終わりでした。

藤井 そうですね。9月に就任しているから。

長林 それで村岡主任が私に雑観を書けと言った。それも「2枚以上書いてはならん。タイプの能力がないから。ナンバーを打たないで。夜の行事だから御大葬¹⁵」と言われた。2月8日に2^バのものを番号を付けないで出したんだ。それが国民新聞¹⁶か報知新聞¹⁷に載ったらしい。試みに

やってみたわけだ。それじゃ浅野さんの入ったいきさつを。

浅野 聯合に入ったのは、昭和2年12月の半ばだったと思うが、日は忘れた。朝日新聞に岡見斉というおっさんがいて、僕のところをやつてきて「おい浅野、お前、聯合に入らないか」と言われた。その前に僕の友人で古沢（磯次郎）君が入っていた。

そのとき、僕は中央新聞¹⁶にいた。政友会の機関紙で、給料は遅配に遅配を重ねて3カ月ぐらいたまっている。こんなところにいてもしょうがないからどこかへ行こうと思っていたところだから、渡りに船で「行きます」と。「それじゃ明日、聯合に行つて徳光に会え」というので、時間を打ち合わせて次の日に会った。この建物だ。2階に上がつて行つたら、お眼鏡にかなつたのか、明日から来いという。明日から来ると年が越せない。中央は、移つてしまつたら金を寄こさないのは分かつているから、「わがまま言うだけど1月1日してくれ」と頼んだ。「それでもいい。しかし一度朝早く来い。朝めつぽう早く来るおじさんの長林というのがいるから、これに会つておいた方がいい」と言われ、その日は帰った。

2、3日たつて朝早く行つたら長林さんが内信の隅の方にいた。大きな木の火鉢があつた。休みの日だったのかな。和服を着てね。すねの辺りまで出しちゃつて。第2次試験もどうやら通過し、実際は3年の1月4日から勤め始めた。

長林 それじゃ田中さん。

田中 僕も浅野さんと同じように朝日の岡見さんから徳光さんから頼まれたという事で行かないか、という話があり、とにかく行つてみた。当時は万朝報⁴⁸から（東京）市役所に行つており、市政を担当する人を探しているということだった。入つて1カ月もたたないうちにボーナスをたくさんもらった記憶がある。昭和3年の11月か12月だったと思う。

藤井 皆さん、非常にいい給料でスカウトされたということですが。

田中 一つ例がある。僕は徳光さんに会つて、実は通信社というのはどういう仕事をやるのか知らないで、ちょっと考えさせてもらいたいと言つた。最初は月給1000円だったんですよ。そうしたら「それじゃこれだけ出す」と言つて5円、その場で上げたんだ。金の問題ではなく、もういっぺん岡見さんに会おうと思つたので、「今日、お返事は控えさせてください」と言つたら徳光さんは月給の問題だと思つたらしい。それで105円になった。

長林 浅野さんはどうですか。

浅野 僕は95円だった。

田中 昭和3年ですね。

長林 高橋邦男君が君の後に海軍省へ。

田中 それはかなり後だ。

長林 軍縮におつかつた？

田中 軍縮は昭和9年だからずつと後だ。内田（康哉）が（外務）大臣になつた時だ。

長林 市政記者を随分長くやつていたわけだね。

田中 その間に貴族院の本会議をやらされたり、委員会などに動員されたり、議会中は半ば向こうで暮らした。

長林 それじゃ大平さん。

大平 徳光さんがちよつと来いと。徳光さんは、僕は「毎夕⁴⁹」にいたときに知っていた。毎夕の編集局長だった。「ちよつと来い」と言うので「入れ」ということだと思つて、知り合いに「通信社というのはどうなるんだ」という話をした。そしたら「そのうち外交記者は通信社一本で、他の方はいらなくなる」と盛んに宣伝するし、他のやつも「通信社はこれから見込みあるんじゃないか。行つてみたらどうか」と言うので徳光

さんに会った。「今、月給をいくらもらっているか」と言うので「125円もらっている」と言った。「それでいいか」と言うから「仕事もしないうちに月給上げてくれと言ったってしょうがないだろう」と。別に高い月給で集めたというほどじゃない。

浅野 僕は高いと思わなかったな。

大平 「官邸をやつてくれ」と言われ、前にやっていた関係でやった。僕らが入ったときは、高山(金二)君も入っていたような記憶がある。いかなかったかね。

長林 東方の連中はちょっと後なんです。

大川 高山君はあんたと前後していたよ。

長林 それじゃ岡村さん。

岡村 私は浅野さんよりちょっと遅かった。昭和2年の暮れも迫ったときに天野良和氏が万朝報にやって来た。僕は夜勤をしていた。おでん屋かなんかで飲んできて、これから飲みに行こうと言う。仕事があるからと言ったら「仕事なんて冗談じゃないよ。こんな月給くれない会社で何をやっているんだ」といきなり引つ張り出された。

酒を飲まされながら「お前、明日から聯合へ来い。話はついていて。徳光というそそかしい男がいて、社会部に行けるやつがないか探している。お前をおれが推薦して徳光が賛成したから明日から来い」と。僕も万朝報じゃ月給も出ねえからしょうがないと思っていた。どうせ私は千葉亀雄に新聞記者に無理やりにならされた。今、白状すると、僕は生意気に文士になろうと思っていたのだ。この辺で足の洗い時だと思っていたけれど、天野さんが言うのもうちよいやろうかなと思って翌日行っただけです。

小屋みたいのがあって、玄関を入ると左側に3畳ばかりの部屋があった。応接間と称していたけれど実際は紙くずを積んでいた。そこへ天野

さんが僕を連れ込んで、紙くずの中に僕を放り込み「ちよいと待った」というわけだ。入社が決まっているから来いというのにおかしいなと思ったが待っていた。しばらくたつたらおつかねえおやじが入って来た。それが徳光衣城だ。天野が来ると思ったが、天野じゃなくて徳光がこのこ入って来て、「お前か。岡村というのは」「私が岡村です」「お前、通信社というのは朝から晩まで24時間仕事せんらんが、君は青いヒヨロヒヨロした顔をしているが務まるか」と言った。

開口一番、僕の顔色が悪いからこいつは危ねえと思ったんだろう。朝から24時間務まるかときた。「冗談じゃない、24時間仕事したら寝る暇がないから死んじゃう。俺は話が決まっているから来いというので来てやつたけれど、ふざけたことを言うな。わしは8時間寝なけりゃいから真つ平ごめんこうむります」と言ったら、徳光が周章狼狽(しゅうしょうろうたい)して「例えだよ。例え。君」笑。「例えなら話は分かった。非常に忙しいという意味を誇張した表現ですね。それなら話は分かる」「そうだよ君、そうだよ」「それじゃお世話になります」と言った。

月給いくらもらっているかと聞くから、今、田中さんの話を聞いて僕はしまったと思ったね(笑)。天野さんが決めているつもりで来ているから、僕は「待ってください」をやらないで83円もらっていると云ったら、「おい83円。それでよし」。半端の2円も上げやしない。青白い顔をしていてあまり役に立たないと思ったかもしれないが、きりがいいから85円にするとしたら83円にしがった。だから僕に関する限り当時の月給を出したというのはもつてのほかだ(笑)。

千葉亀雄に怒られる

藤井 万朝報はみんなで謀議して来たわけじゃないのですね。

岡村 そうじゃない。天野だけが引き抜かれて行って、徳光さんに社会部に行くやつを探して来いと言われて万朝報に岡村というやつがいるから連れて来ますと言って、僕が83円で入っちゃった。浅野さんと同じで僕も12月の月給が1月中ごろでないともらえないから、社に仕事に来るけれど、入社手続きは1月中ごろにしてくれと頼んだ。大川さんが僕の手続きをしたのが昭和3年の1月10日から15日だ。2年の暮れに仕事にかかって3年1月15日ごろに入籍するわけだ。83円で。

しばらくたつと時事新報¹⁴の編集局長をしていた千葉亀雄が僕に電話をかけてきた。「岡村君ちょっと来たまえ」と。何事ならんとばかり行った。当時、千葉は日本で一流の新聞評論家だよ。その時事新報の編集局長である千葉が僕をつかまえて烈火のごとく怒るわけだ。「君はジャーナリストとして見込みがあると俺はにらんだから万朝報に入れたが、つづけたので時事に引き取ることにした。時事の社会部に入れる手続きをしている最中に探してみたらお前は聯合に行っている。けしからん。即日、君は時事の社会部に来たまえ」と言うのだ。

僕は千葉から非常に愛されていた。「お前が俺の最後の弟子だ」と言うのだ。わしは「入ったらあそこはなかなか面白い。ガタガタしておかしなのがそろっていて、なかなか面白い所だ。梁山泊^{りやうざんぱく}のような所で将来性もある。面白いと思うからわしはあそこでやります」と言ったよ。そうしたら「ばか言っちゃいかん、通信社が日本で成り立つと思うか。冗談じゃない。あれはアメリカみたいな大領土と大人口を持ってローカルペーパーが発達している所だけが有り得るのだ。日本みたいなこんな狭い国で、全国紙がはびこっている所で成り立つ可能性はありっこないのだ。お前はばかだからそういうことを言っている。そんな所でお前また冷や飯を食うから、すぐ辞めて来い」と言われた。

僕も実は動揺した。それで(時事新報)に行ったら千葉は「ここで待って

いたまえ。社会部長が来るから話をしたまえ」と言って千葉は帰っちゃった。お堀の見える部屋でしばらく待っていたら青柳という社会部長が上がって来た。「岡村というのは君か。手続きをしたから今日からでもいい、社会部で働いてもらう。ときに君は顔色が悪いが、社会部というのは忙しいから務まるか」ときた。その一言がなければ時事に行ってしまうかと思っていたが、その一言でカッときたから、「務まりませんからお断りします。さようなら」。青柳は驚いて「待て待て」と言ったが、勝手に帰ってきた。

後に晩年の千葉が僕に「新聞の見通しについてただ一つお前に謝らなければならぬのだ。通信社が成り立たないと言ったのは俺の間違いだった。しかし立地条件は俺の言う通り決してよくはなかった。成り立つことは本当はなかった。ただ岩永(裕吉)という偉大なる人物がおったからで、岩永に負うところが非常に大きかったのだ。立地条件は悪かったけれども、岩永が偉かったからなのだ」ということを僕に言ったことがある。

板垣 どうしてあなたは千葉の弟子だったのか。

岡村 日本で初めて東洋大学に新聞学科というのができた。その新聞学科の講師が千葉だった。その千葉がある日、「読売新聞を評せ」という試験問題を出した。僕は写真が悪い、見出しが悪い、記事の書き方が悪い、整理が悪いとぼろくそにくさして書いた。当時、読売は発行部数が4万から5万だった。彼はその読売の編集局長だ。自分の新聞を評せという問題を出し、それを僕がぼろくそに罵倒して書いた。それを彼は非常に喜んでね。読売の編集会議で「俺の生徒がこう言っている。貴様ら読め」と編集の連中に読ませたそう。爾来、僕を新聞批評家として認めたのが千葉だ。僕は実は千葉の機嫌を取ったのは読売の文芸欄に原稿を買ってもらったのが目的だった(笑)。それで千葉さんには随分真面目に仕えた

わけだ。千葉さんはさっぱり僕の手稿は買ってくれないで、僕が原稿を持っていくと、「それよりも君は新聞記者だ」と僕を万朝報に放り込んだ。板垣 あんたの兄弟の柴田勝衛が一世を風靡した文芸欄をつくったことがあったが、それは後のことか？

岡村 当時から読売は文芸新聞だった。文芸新聞だからそこへ原稿を売りつけるのが目的で僕は千葉の愛弟子になったのだ。

長林 深慮遠謀だね。

岡村 しかるに志と違って、千葉さんに逆に自家薬籠中のものにされて、貴様は原稿屋じゃ飯が食えない、新聞屋の方が食えると強引に万朝報に入れられた。

板垣 その点はなかなか偉い人だね。文才がなくて新聞屋だと見破ったところは。

いきなり社会面の整理

岡村 それは彼が見損なったので、その頃、新聞社に入らなければ、今は石川達三ぐらいの文士になっていたかもしれん笑。余談を申し上げると、滑稽だったのは、僕はまだ東洋大在学中の1月に、千葉がちょっと来いというから行ったら「君はこの履歴書を持ってすぐに万朝報に行け」と。こういうことが書いてあるかと思って、封をしてないから途中で読んでみたんだ。「先日差し向け候のは偽者にて候、これは本者にて候笑。必ずご採用ありまし」。後で分かったけれども朝刊の社会部の整理をするやつが急にいなくなったので、困っちゃって朝刊の整理のすぐできるやつを探してくれと、千葉さんのところに頼んでいたらしい。それで僕にそういう手紙を渡して、行きがけに僕に言うには「お前なんでもいいからどんなことを聞かれても、できる、できると言えよ

笑。絶対にできると言わなあかんよ」という言い置きだった。

それで行ったら、大竹なんとかという偉い人がいて「お前に社会部の整理を今晚から預けるができるか。この前来たやつはできねえと言うからキャンセルしちゃった。その後にこの手紙でお前が来たのだ。これは本物と書いてあるからできるか」と言う。千葉に言われているから「できます」。「朝刊の整理だよ」。僕は整理なんてどこか掃くことかと思っていた。机の掃除かなかと思っていた笑。

その晩になったら、わしがいきなり社会部の整理主任だ。いきなりね。千葉の推薦で経験者が来た。そのころ、菅原というのがいたでしょう。あれが政治面の整理主任で夜勤、その前僕が座っているわけだ。菅原が印を付けては「子供さん、子供さん」と言っただけで原稿を放っている。僕はもういいか分からんから見えておったのだ。たばこ吸いながら。9時か10時になったらさすがに菅原が心配して、「君、そうやってたばこばかり吸っているけれどもいいのか」と言われた。「いいのか言ったら俺は知らんからしょうがない。できやせん」「お前、経験がないのか」「俺は経験はない。東洋大の学生だよ」「活字の号数ぐらいは知っているか」「俺は知らんよ」と。それから菅原に手伝ってもらって、その晩、5号活字は何本入るとか、2段見出しはどうだとか、ルールを教えてもらった。

それから工場に組みに行き、職工の偉そうなやつがいたから、「おい、お前に任せるから好きなように新聞つくっちゃまえ。上手にできたら明日、僕が吉原に連れて行ってやるからうまくやれよ」と。ところが翌朝の新聞を僕は褒められた笑。大したもんだと言うわけだ、今度の野郎は。職工が全部やつちまった。職工の方がうまくいって決まっている。それなら菅原がやるより僕の方がうまくいって決まっている。菅原がうるさく「この見出しはまずい。書き直せ。この写真は置き直せ」と言うのと職工は怒っ

ちゃった。こっちは「お前の好きなようにやれ」と。職工がサーっとやったところ翌日、伊藤理基とか偉いのが「岡村君。今朝の社会部はいいよ」と(笑)。すげえもんだと言うわけだ。文学青年だから見出しの文句だけはうまいこと書いていたんだ。

長林 あんた御大典は行ったか。

岡村 御大典のときは滑稽だ。社会部の人がいなかった。紫宸殿へ1社1人入れるという。各社、久米正雄を雇ったり、誰を雇うとか、一流の記者を雇うとかみんな1人ずつ入ったのだ。聯合は僕に行けと言うんだ。いま考えると生まれて初めてシルクハットをかぶった。あれは大川さんのだね。

大川 あれは買ったんだよ。死んだドンちゃん(塚村敏夫)が、頭が大きくてなかなかないので。それを貸したんだよ。

岡村 取り上げられましたよ。またいるだろうと。写真を撮ったらすぐ取り上げられた。紫宸殿に入って記事書かされたことを覚えている。あの当時は社会部なんてほとんどいなかった。

藤井 御大典はまた後で。当時の内信のデスクの人たちを思い出すと、僕は昭和4年に入ったのだが、いつも机を並べていたのはせいぜい6人ぐらいだったね。

岡村 長林さんに石黒、大賀さんは地方部で、中央デスクはあんた(藤井)に高橋三郎、浜州一、鈴木一平はだいぶ後。それから山西だ。その中で、長林さんは僕がどんなに早く行っても絶対かなわんのだ。どんな無理して行ってもちゃんと来ていた。

板垣 どうしてそんなに早く来ているんだ。

岡村 朝早起きして行っても、もう来ている。ちゃんと座っていて、ペラペラと官報を見ては、おかしい訳の分からない字で、くちやくちやく3行か4行書く。官報の抜き書き、これは全部新聞に載るんだ。どの

社も長林さんの記事が載ってしまう。人事往来と官報の抜き書き。これは長林さんが1人でやってしまい、間違うからいかなんと人にやらせないのだ。たまに僕がやろうと思うと「君、君。駄目だ、駄目だ」と自分でサツサツと書いて独占だ。病気もしないし休まない。日曜なんかどうしたんですか。

長林 日曜は大体出なかったけれど、たまには出ていましたよ。

岡村 何か知らんけれど、とにかくやっていたね。それで通信社というのはこういうことをやるものかと、僕は恐れをなしたけれどね。

藤井 石黒、高橋さんは2人ともみんなにかわいがられなかった。

長林 2人とも極端なのんびりだった。

岡村 まあデスクというのは外から好かれないのが普通だがね。会計だとかデスクなんていうのはね。

大平 夜とにかく8時ごろ僕らが帰って来るともう酒だ。

岡村 考えてみると良き時代だよ。酒飲みながらやっていったんだから。

大平 飲まん晩はなかったらう。

岡村 締め切りが済むと必ず最終電車まで「大寿司」で飲むんだ。

大平 官邸というのは遅くなるもんだから余計嫌われたんだ。あの野郎早く帰ってくれば、みんな早く帰れるのにと。

岡村 そうそう、大平さんなんかそういう意味でデスクに嫌われていたね。それから山崎義人ね。12時になると帰って来た。

知名度低く取材に苦勞

大平 僕ら聯合に入って、外に出たら聯合を知っている者は1人もいないのだ。聯合というのは一体なんだと。実際、記事取る前に説明しなければいかんのだ。

岡村 それが辛くてね。

大平 江木(えぎ)千之(ちの)先生のところに行った。文部大臣をやった貴族院の論客の一人で、「大平君、聯合というのは何だ」と言うのだ。新聞社が全部集まってつくって、これからは新聞社の連中が来ても会わなくてもいいのだ。僕に話しさえすれば、ほかの新聞社の人が来ても話さないでいいのだと言ったら、「道理で君、このごろ新聞社の連中が来なくなった」と。彼が時勢に遅れて人が来なくなったのを知らないのだ。俺の説明を真に受けて、便利になったと喜んでいた(笑)。それくらい分からなかったのだ。

浅野 通信省辺りの前にクラブがあったから、内務省に行つてあいさつしたんだ。そうしたら新聞の内報(50)と間違えて「内報も随分増えたね」と。大平さんの言うように、聯合の生い立ちを30分ぐらい説明しなければならず、相手方がのみ込めない状態だった。

板垣 大阪では「聯合とは何か」とちゃんと名刺に書いてあるのだが、その名刺を持って歩くのが嫌だね。持って歩くのが恥ずかしかった。

岡村 恥ずかしいよりも何よりも、政治部はいくらかいの。社会部は殺人事件とか、火事とか、現場に飛び込んで行つても、聯合というのはゼニ取りか広告取りかくらいにしか思つてくれないから困つてしまう夜中に急に電話をかけて「こちらは新聞聯合社です」と言つても、向こうにはさっぱり通じないから返事をしてくれない。人の死んだ嫌なもの、どうしても返事してくれない。仕方ないからうそをついて「こちらは都新聞です」とか、「国民新聞です」とか。「毎日新聞」、「朝日新聞」というと、たいてい先回りして記者が行っている。国民とか都新聞ならばいいだろうと、新聞社を騙(かた)るわけだ、急いで取材しようと思つて。

藤井 僕なんかも都新聞の名前を騙(かた)った。

岡村 ところがある晩、僕は中島弥(や)団次(だじ)だと記憶しているんだけど、

社会部関係で、ピストルを撃つたときかなんかではないかと思うんだ。弥団次の家へ電話をかけた。夜中の締め切りに間に合わせないといけない。「こちらは国民新聞ですが、ちょっと急ぎの用で先生に出ていただきたい」といったら、書生みたいな者が出てきて「国民新聞ですか。今来て先生と話をしていますよ」「そうですか。どうもありがとうございます」と。都新聞と言つてかけ、呼び出したことがある、そのくらい苦労しましたね。

佐々木 僕が南京の支局長をやつていて例の南京問題を起こしたのが聯合という社名のおかげなんだ。昭和6年3月の初めだったか、立法院長の胡漢民(こかんみん)が蔣介石に監禁された、そのニュースを朝日にスクープされたのだが、ところがこれが国民政府の忌諱(きい)に触れて日本人記者に対する弾圧が始まった。ところが新聞聯合という名前だから、私が日本の全新聞の親玉かなんかと誤解されたんですね。そのため私の電話、電報一切を押さえられてしまった。こっちは特ダネを抜かれて本社からどやされ、べそをかいているのに電報も打たせん、電話もかけません、ということだ。国民政府は聯合を押さえれば日本の全新聞が押さえられるという錯覚を起こしたんですね。ひどい目に遭つたよ。とにかく3月の初めから9月9日に古野さんが南京に来て、王正廷(おうせいてい)外交部長との間で解決をつけるまで6カ月にわたつて聯合南京支局から始まつて、在中国の聯合全支社局に対する弾圧が続けられたのだからたまらない。

藤井 同盟になつてからは、今考えるとPRを全然しなかった。昭和12年にニュース映画を始めると社会部に非常に感謝された。「同盟です」と言うのと「ああニュースの同盟ですか」と、非常に仕事やりやすくなつたということで感謝された。直接発表機関を持たないとなかなか知られないですよ。

板垣 今は同盟通信社を覚えていますが、共同通信社は知らないね。

同盟の方が共同よりも有名だ。

長林 後先になるかもしれないが、昭和3年のビッグニュースは御大典と張作霖^{ちやうくろん}の爆死事件、最初の普通選挙、済南事件^{さいなん}というのがある。その後（昭和5年）に浜口（雄幸^{おさち}首相）の狙撃事件とかあるが、御大典のことを大川さん。

岡村 当時は大川さんが現場の親分だった。

大川 いや、親方じゃないんだが。

長林 徳光氏以下36名が行った。

岡村 聯合としては珍しく多く行った。

大川 社としては経営的な立場からそんなにたくさん人を出さなくてもいいだろうというのだった。けれども徳光氏の例のがむしやらに押す理論が岩永さん、古野さんを口説き落とした。いっぺんに36名行ったらわけじゃない、最初は浜州一君と僕が設営で行って、それから御大典が始まった。みんなをどこへ泊めるかを僕ら庶務の人間は考えなくちゃならん。ところが宿屋へ泊めるだけの予算もない。下宿屋という下宿屋、部屋貸しというのは、全国から警備に來ている巡査の宿舎になっている。新聞屋さんやわれわれを泊めるところがないのだ。方々に頼んで下宿屋を1軒、お公家さんの家を2軒借りた。お公家さんの家には布団がないし、京都の朝は寒く、男爵の家を借りて、みんなの来るのを待っていたら、逐次やってきた。

紫宸殿の儀を最高潮としてあと外交団招待、それから陛下が桃山御陵にいらっしゃる、伊勢参宮にいらっしゃる、それを済ませてみんなぼちぼち帰り、浜君と僕が後始末をして帰ってきた。当時の費用がいくらだったか記憶は全くない。岡村君、行ってくれたんですね。

岡村 あの時、僕が一番長かった。最後の旅行までついて行っただから。

大川 1人に日当8円。社から10円くれたんだが、2円は残っている東

京の留守部隊の人と一諸に飯を食わなければならんから貯金しようということで、8円ずつ毎朝、封筒に入れて出てくる人に渡した。朝飯は近所の仕出し屋から弁当を取ったり、あるいは駅へ買いに行ったりした。徳光氏は15円なんだ。当時の8円といったら大金だ。

岡村 あとは全部8円で、僕なんか割がよかった。

大川 徳光さんだけが15円。彼は随分遊んだ、諸君もだいたい遊んだらしいが。

岡村 遊べた遊べた。しかも東京へ帰ってきて月給がまるまる残っていた。手をつけなくて済んだから。

大川 当時は専用線がなかった。予約電話をつなぎっ放しで送受信していた。電通は専用線とチャーターだが飛行機を持っていた。われわれも1、2回、深草^{ふかぐさ}の練兵場に行ってチャーター機の「使用願い」を出して、深草からフィルムを積んで使用するというのもあった。金では電通にかなわないが、われわれ派遣団には実に意気軒高なものがあった。

岡村 今でも覚えているが、張り切っていた。毎朝8円くれるものだから。

浅野 最初は10円くれたんだ。途中で大勢来るようになってから2円はねて、それで忘年会をやるという話だった。

福岡 電通の飛行機が落ちたのはそのときか。

浅野 2機とも落ちたんだ。敵のあれを喜ぶというのはあんまりよくないことだけれども、あのときは喜んだ。

岡村 こっちに飛行機がないから余計ね。

大川 さっき長林さんが言われた下宿屋というのは近所の郵便局長に紹介されて旧華族のおばあさんから借りた。「お貸ししますが、唐紙とか何とかいうのは気をつけております。この部屋へ来てください」と言われて行くと、狩野^{かのう}なんとかいうのかも知らんが、当時の非常な大家

の襖がある。床の間の上に鼓やら太鼓やらがあつて「これは先帝の即位のときに記念品で下賜されたものだ。こういうものだけは大事にしてもらいたい」ということだった。僕は、唐紙を破かれたらえらいことになると思つた。御大典というのはご承知の通り特別な事故でもない限りスケジュール通り運んでいくんだから、夜は当直の人が一杯飲んで帰つて来て唐紙を壊されたら困る。鼓やら太鼓やらはおばあさんに「片付けてくれ」といったら「いや皆さんに見ていただきたい」と。得意なんだな、旧華族だから。丸い大鼓で炎みたいなのが書いてある。何とかして片付けたが、問題は唐紙だ。唐紙を外すと寒くて寝られんだ。唐紙だけは大事にしてくれといつて頭を下げて歩いたよ。

岡村 お寺と両方へ泊めたでしょう、僕らBクラスはお寺だ。われわれ柄の悪いやつは危ないというのでお寺へ泊められた。大平さんは柄がいいからAクラスか。

浅野 太鼓たたいて叱られたよ。

大川 私はそういう内務、事務ばかりやらされたから、表へ出て他社と競争して特ダネを抜くとかいう苦労は一つもしなかった。宿舎問題だけでしたよ。

大平 あのとき、大阪の新聞部長は大賀知周だったな。大賀の下に山口巖がいて大阪の留守部隊長をやつて大賀があそこに来ていた。

岡村 京都へ来た僕は太賀というのに初めて使われたんだ。

大川 出発に先立ちまず自動車が必要だ。朝日、毎日みんな自動車を持っていているからうちも1台使おうというので、無理してポロポロのシボレーを1台買った。大型だけど2千円。岩永さんが個人のものを持っていて、伊達(源一郎)顧問は社の専用車に乗っていた。伊達さんのビュイックと買ったシボレーを御大典が済んで東京へ持つて帰ると、社に常備しておくだけの予算がない。それで売ろうということになって東

京から出て行くときに売る契約をしていた。2千円を200円ずつ10カ月の月賦。買うやつが運転して京都まで陸送する。そうすれば向こうでも大事に扱うだろう、将来自分のものになるからと。

長林 御大典の機会に写真サービスをやっただろう。

岡村 やった。

浅野 そうです。飛行機は写真が主だったんです。

福岡 写真部が昭和2年ごろあつた。僕は自分で写した写真を漢口から送つて、中外商業にこんな大きく出て非常にうれしかった記憶がある。

大平 写真サービスはやっていったんだ。

福岡 藤本というのがいた。

浅野 御大典のときにはあれが行つていた。

板垣 大川さん、僕はそのときの事情をよく知らないが、後から考えると、聯合が力を入れたのは、何か飛躍しようという狙いがあったんだか。

大川 さつきお話が出たが、内信部を置くということ自体、必ずしも会員8社が心から賛成しているわけではない。だから何とかしてわが内信部の威力をみんなに示したい、そのためには少々無理をしてもやりたい。特ダネみたいなものはいつ出てくるか分からないけれども、御大典みたいなものはあらかじめ計画することによつていいサービスができるというので、飛躍のための一つの踏み台にしたんだろう。確かあのときはいくらか分担金をもらつたと思う。いくらか覚えていないけれども。

岡村 相当取らなければあんなに金払えないよ。

福岡 僕は外信で局外者だけれども、昭和2年11月に漢口から帰つてきたときは、まだ「日本新聞聯合社」だった。その後、間もなく「日本」がなくなつた。帰つてきたとき、初めに会つたのが徳光さん。岩永邸で会つた。徳光さんが岩永邸へ来て、翌年の1月から内信をやる打ち合わ

せを初めてやった晩だ。それで非常によく覚えてる。徳光が9月に帰って来て、お膳立てをやっていたと思う。徳光さんがその間にいろいろ要求を出していたらしい。やる以上はこういうことをやらなければ嫌だと。11月に話が出来上がっていいよというときに僕が帰ってきて初めてその話を聞いた。1月に始まって早々、僕の記憶では相当スクープをやった。

浅野 1月4日に秩父宮妃殿下が決まり、その晩に朝日新聞だけが最初取ったんだ。聯合は夜11時か12時になって、朝刊にやっと載るか載らないかというときに流したのを覚えてる。

大平 あれは朝日と協定したんじゃないか。

長林 岡見と徳光の間にね。

大平 特ダネがあるという話だったが、僕らは何だろうと思った。

岡村 岡見さんが徳光氏に内緒で流すという密約があった。

福岡 岡見と徳光というのは互いに交換関係をやって、聯合もある程度のことをやったんじゃないか。

大川 岡見さんが徳光氏に耳打ちしたことを確認しなければいかんというので、結局、岩永さんと古野さんと樺山が当たったら間違いないというので、本腰になった。

福岡 第一弾はすべり出し好調ということで、次に御大典を機会に大いにやろうじゃないかということだったと覚えてますね。

大平 総選挙のときにはいろいろ裏面の情報がいぶ集まったらしいんだ。徳光氏は、政府のだいぶ痛いところをつかんらしいんだ。あの選挙で。そういう話をしていたよ。

猪伏 予定原稿でしょうね、大体は。全部新聞社に上げておいたの？

長林 そうそう。特に地方はね。

大平 御大典になってからの事件は、政治部関係で田中喜之氏が中心に

なって政友会の別動隊みたいな中政会とかいうのを作ったろう。

長林 御大典中に活動したんでしょう。くはらまきのすけ久原房之助なんか。

藤井 ところが御大典の本記は予定原稿でいく。社会面へ出るのはみんな現場のタネだ。東郷(平八郎)元帥をつかまえて話を聞くとか、外国の誰をつかまえて話を聞くとか、そのときにこういうことがあったという、社会面にでかでかと載せる記事は夜の式が済んでから夜中に取材して大変忙しかった。

モーニングとシルクハット

大平 御大典は田中義一(首相)が国民を代表して万歳を唱えたのが一番のヤマだ。

藤井 それが岡村さんのシルクハット。

岡村 そうそう。

板垣 聯合のデモンストレーションというのは分かるが、それは国家的な行事としてやったわけでしょう。その後が続く満州事変とか何とかの国内危機というものを意識してそういうことをやったのか。

岡村 そうじゃないと思う。国力が盛んに伸びているから、お祭りはロンドンの戴冠式52みたいなものだ。

大平 経済恐慌は昭和2年だろう。若槻(礼次郎)内閣の後だ。経済恐慌で若槻内閣が倒れて田中(義二)内閣ができ、田中内閣が御大典だ。

板垣 国家的な行事として演出されたと思う。

岡村 演出はされたけれども、大した演出じゃないよ。ちょうど今、パチカンの法王様が死ぬという話で、日本の新聞がどうしてわれわれの神父が死んだように書いているのか。あの心理と似ていてるのではないかな。要するに天子様のお祭りだ。これはやらなければならないので、新聞は無

我夢中でその前の大正天皇の弔いときも書きまくったね。書いて書いて書きまくった。

長林 あれは過当競争の最も激しいものだと思う。

岡村 僕なんか万朝報で朝刊の編集の責任を一人で背負わされていたので、お弔いときは本当によく覚えていられるけれども、無我夢中であらゆる誇大な言葉を書き立てた。

藤井 あの時分の日本最上の皇室のニュースだから。

岡村 皇室主義の花咲けるととき。最も輝ける新皇室中心主義時代だから僕はそういうことを新聞が書きまくるだけで、演出としては今考えなくて不細工な演出だよ。派手でも豪華でもなければ、京都の御所に砂利をばらまいただけだ。今でも覚えていられるけれど、久米正雄が書くことがなくて困って書いた文句をうまいことを書いたなど。自分の競争社だからライバルが書いたものを読んでうまいと思った。紫宸殿で田中総理が万歳をやる。その時の紫宸殿の様子を描写して「万歳旗が風にゆらゆらと翻って、万と翻り、歳とはためく」と書いた。久米が一生懸命、文才を振るって書いた。それを毎日の紙上で僕は読んでうまいことを書いたと思っただけでも、演出なんかむしろ不細工だったと思うね。紫宸殿の前の庭があるでしょう。お庭の入口に門がある、横から入れなくて正面の門のところへ並ばせてくれたんだ。各社、全部で十二、三人だ。通信社、新聞社も。

大平 前日に中を見せたよ。シルクハットをかぶらなかつたけれど、モーニングを着て。

岡村 当日、本番になると、聯合代表というので僕が一人入れたのはちょうど門の線の上なんだ。中には一步も入れない。新聞社というのは当時バカにされたわけだ。今日なら新聞社ならば相当いいところ、右近の橋の隣あたり。ところが右近の橋、左近の桜はるか向こうの門のと

ころに立たされた。門のところに立つのにシルクハットで何とかというのを着てこいというのだ。新聞虐待物語だよ(笑)。

藤井 新聞記者にとつては曠古の大典だった。毎晩、毎晩、県知事の宴会とか、市長とか。劇場はみんなフリーパスをくれるし、祇園踊り、鴨川をどりとかが、使い切れないくらいだった。

浅野 君は帝通で遊んでいたからいいけど、われわれ働いている方はそんなものをもらったって。

藤井 同情したよ、そのときは。

大川 こっちの留守部隊長は誰だったかな。

浅野 高井さんだ。

岡村 高井の下に中満、栗林(農夫)なんかがいた。

福岡 それが昭和3年。僕はそれから9年後のイギリスの戴冠式に久米正雄と一緒にいった。あのとき、朝日は「天声人語」の荒垣(秀雄)です。ところが久米は、そのときの調子でやろうと思ったとみえて、予報なんかやってない。荒垣は予定の記事を送った。ところが久米は終わってから出られない。人が多くて電報も電話も打てない、夕方まで缶詰になった。だから荒垣に完全にやつつけられた。

大川 御大典の期間中、京都市の事故としては火事があって、同志社の一部から火が出た。夜だった。ああいう機会は火事を非常に毛嫌いなものだ。もう一つ、昼間、陛下が桃山にいらっしゃるとき、直訴を企てたのがある。留守部隊長は誰かとさつきお尋ねしたのは、向こうから電話で東京の本社に送ったのは「鶴駕」となっていた。ところが本社から折り返しすぐ、「鶴」ではいけない、「竜」であるべきだ。混同しているんじゃないか。本社の方で直しておいたから京都で発表する場合はすぐ直せ」と注意がきたんですよ。僕は不勉強で、その後、漢和辞典を引いていないんだが、「鶴駕」は皇太子殿下であり、「竜駕」は天皇陛下という

使い分けを覚えた。本社で電話を受けた誰かが気がついて事故を未然に防いだということで、本社側の人も非常に勉強していたことを思い出す。板垣「竜駕」というのはポピュラーで、「鶴駕」というのは珍しいんじゃないか。

浅野 奈良県で発表していたのには「鶴駕」とあった。ガリ版で発表してそれを使っていたね。

福岡 余談だが、とにかく右翼がうるさいときで、写真部で正倉院の御物の写真を出した。ガリ版の謄写版で説明をつけて出した。ところが僕が翌朝、偶然見たら正倉院汚物と書いてあるんだ。ミスプリントで。これは大変だと新聞を慌てて見たら、幸いしてどこにも出ていない。これはしめたと思ったら、中外商業にそのまま出ている。これはえらいことになったと様子を見ていたけれどもさすがの右翼も中外商業は見なかったのだ。

大川 中外商業だけ出たので、赤尾敏というのが僕の所に来た。来て言うのには、自分は中外商業だけのことだと思って苦情を言いに行ったら「これは聯合からもらってきたから、文句があるなら聯合に行け」と言われたので来た、と言うわけだ。署名人に会いたいと。僕は署名人だったから、あれにはひどく驚かされて、徹頭徹尾、謝った。

大平 御大典中の写真の話が出たが、あのとき、電送写真が初めてでき、電通は電送でやった。聯合はどうしても飛行機で飛ばさなければいけないので、高知新聞の飛行機を借りて飛ばした。聯合は好評を博したという話を聞いている。

藤井 (電送は)朝日が日本電気、電通はジーマエスを使った。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

座談会 聯合と内信(第2部)

1963(昭和38)年6月25日

(出席者)

長林密蔵 (内信局次長兼地方部長)

大平安孝 (内信局政治部長)

岡村二一^{にいち} (内信局社会部長)

浅野豊 (内信局)

藤井信次郎 (内信局)

松方三郎 (外信局)

佐々木健児 (満州国通信社通信部長)

(編集者注)佐々木以外の役職は1935(昭和10)年12月時点の新聞聯合におけるもの。



長林 最初にビッグニュース。霞ヶ浦のツエッペリン⁵³がありましたね。

大平 あのとときは浅野さんが隊長じゃないの。

長林 大賀知周だよ。

藤井 霞ヶ浦のツエッペリン(取材)は、聯合内信で初めて古野(伊之助)局長が出馬した。

浅野 陣中見舞いに来た。

松方 海岸にツエッペリンが出てきたときどうするか、電話をどうするかとわあわあやっていたら、古野さんが「慌てることはないよ。東京で

見ていればいいじゃないか。屋根の上で」と言った。そうしたらツエッペリンが東京で見えたというウナ電⁵⁴があった。一文も使わずに、霞ヶ浦からの電報より何時間も早かった。

浅野 ツエッペリンは霞ヶ浦に降りる前に東京に来了。東京を2回、まわって霞ヶ浦に帰った。

松方 岩永(裕吉)に聞いた話だけれど、霞ヶ浦から電報を打つか、専用線をつけるかと大騒ぎした。

藤井 外国人が地図見たら、霞ヶ浦なんか東京にくっついている。

松方 霞ヶ浦なんて言っても分からない。

岡村 とにかく霞ヶ浦にはたくさん行ったね。大賀さんが大将だったかな。

浅野 僕は、霞ヶ浦が郷里だということで、丸山というお医者の家を借りて予約電話を申し込んだ。

藤井 到着は問題なかったが、出発で間違いが起きた。

浅野 時事新報だけうまくやった。他の新聞はみんな飛び出させちゃった。実際は飛び出さなかったんだ。午前2時ごろだった。(格納庫の)大きな扉の敷居にゴンドラがぶつかった。引つ張り出すときに敷居が折れて、直さなければならないということで、逆戻りしてしまった。予定原稿では朝刊に今日の午前2時何分に出発したということにしていた。慌てて輪転機を止めてくれと言っても間に合わない。時事新報は発行部数が少なかった。そのため最後まで出発を待っていた。それで時事新報だけが朝刊に「出発延期」と入れた。他はみんな「東の空、雲の中に消えた」と書いた。

長林 なかなかいい話だ。浜口雄幸^{おさち}首相狙撃事件の写真は？

浅野 非常に成功した。

長林 写真は中田(義次)君が昭和5年11月に。

浅野 中田君が聯合に入れてくれ、入れてくれと言うけれど、人件費が窮屈で入れることはできないので、アルバイトみたいなことをやっていった。そうしたらちやうどやられたところにおつかった。

長林 大体の新聞に出たそうだね。

浅野 担がれて下りるところを撮った。

岡村 この間の浅沼(稲次郎)のやられた写真みたいにピュリツアー賞になるところだったな。

藤井 中田君は小さな写真通信、写真屋のアルバイトのようなことをやっていた。自分のところに持って行ったってしょうがないからすぐ聯合に持ってきた。それをきっかけに入った。

岡村 お目見え原稿だね。それは大いに特筆すべきだ。

大平 それより先になるが、張作霖^{ちやうざりん}の爆死事件、あれも聯合が早かったと思う。電報が来た。僕はその電報を持って修善寺の田中(義二)総理のところに行ったら田中総理は何にも知らなかった。電報を(総理秘書官の)殖田俊吉^{うゑだしゅんきち}に渡し、それについて話をしてくれと言ったら「ちよっと待ってくれ」と言う。そして内閣の首脳部全部に電話をかけて、僕の持って行った電報を持っていつまで待っても下りて来ない。2、3時間してようやく田中の話を聞いた。だから田中総理は爆死事件に係っていたというのは、僕はその事実を見てうそだという判断をしていた。最近はそのということがはっきりしてきたようだが。

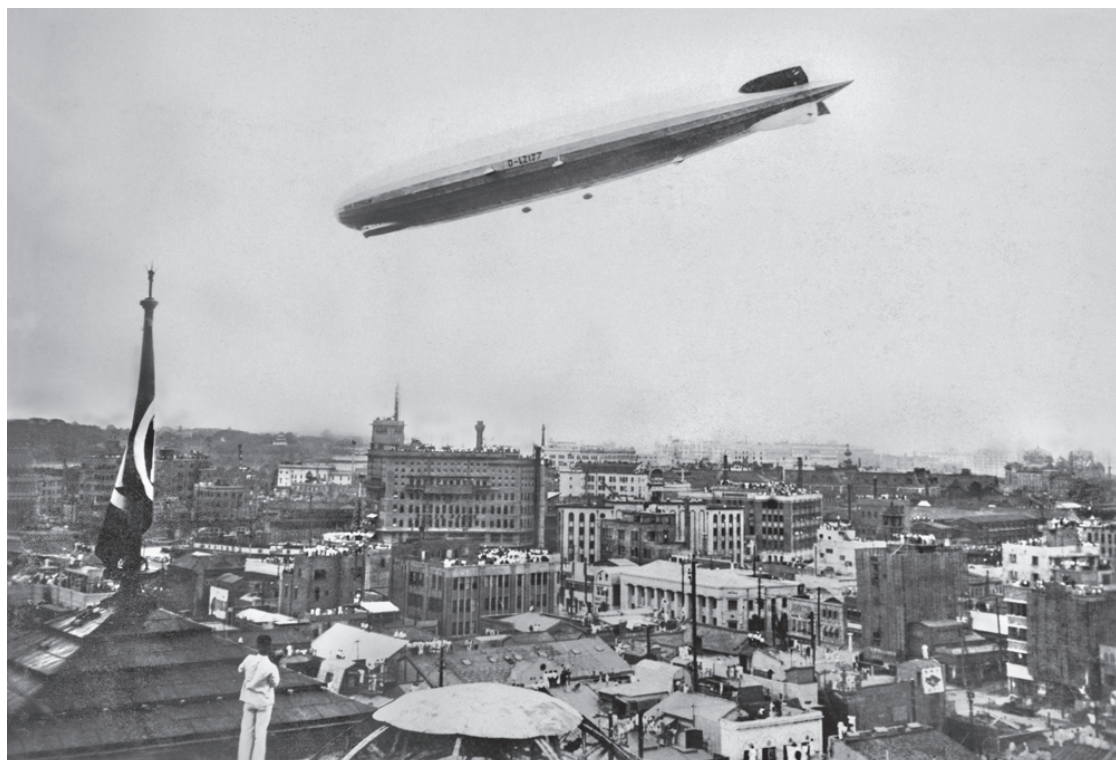
長林 軍司令官は村岡長太郎だったかな。

大平 あれは辞めたね。

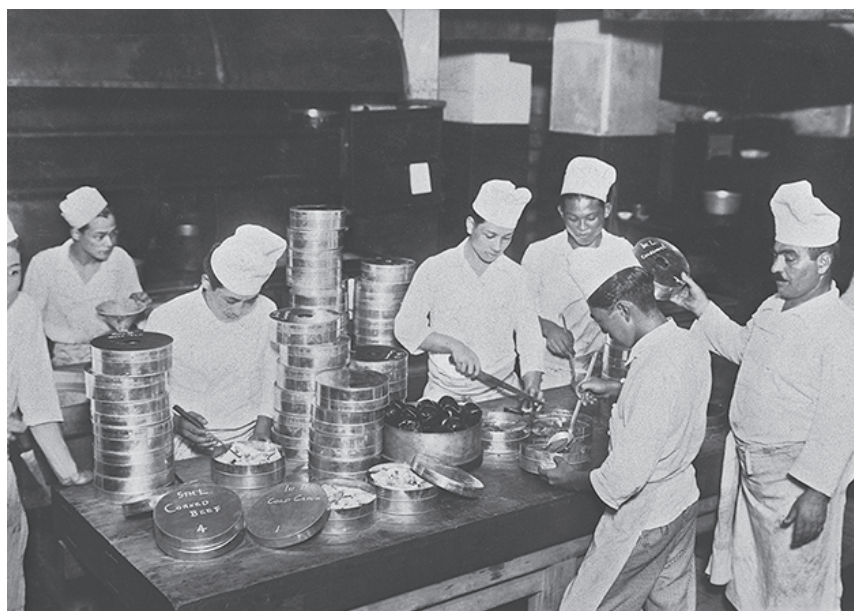
長林 大將になるはずなのにならなかった。村岡だったと思う。

大平 電報は奉天から来たんだね。支局は誰だろう。

佐々木 あのとときは奉天新聞社長の佐藤善雄さんが支局長だったでしょう。



東京上空を飛行するツェッペリン伯号=1929 (昭和4) 年8月19日



ツェッペリン伯号の乗客用機内食を容器に詰める帝国ホテルの料理人ら=1929 (昭和4) 年8月18日

長林 五・一五事件の聯合はどうだったのか。

岡村 五・一五の時は高井（信義）さんが内信局長で、内信局一本でやってたね。社会部なんてなかった。

大平 政友会の前の玄関のところに爆弾の穴が開いていたという話を電話で聞き、官邸に行ったら犬養（毅）さんが撃たれたという。

浅野 首藤君がいたね。

大平 東京府知事をやった藤沼庄平が来ていた。長谷川久一が警視總監だったんだ。藤沼が「あんな警視總監を置いたからこうなったんだ。俺が警視總監でなくてよかった」と述懐していた。

浅野 前日にチャーリー・チャプリンが来た。15日の朝刊は社会面の全面をつぶして朝日、毎日がチャプリンの記事を書いた。僕は銀座の千疋屋で飯を食っていたら号外が出た。おかしいなと思って買ってみた。「総理官邸に爆弾」と書いてある。社に駆け付けたら高井さんがいたのは覚えている。他に誰がいたか覚えていない。

大平 僕は官邸に行っていたよ。

岡村 どういうふうと呼ばれたか分からないけれども緊急招集があつて、飛び出で行ったことは覚えている。

佐々木 （五・一五事件の実行犯の一人の）橘孝三郎のあれ（手記）は聯合の大特ダネだった。橘は（事件後）ハルビンに潜伏していた。当時、満州軍駐在武官の小林省三郎少将が橘を庇護（ひご）していた。小林少将は奉天にいたが、満州事変の後だから新聞記者は誰も海軍など相手にしない。聯合だけが必ず1日に1回、誰かが連絡に行っていた。そうしたら後に台北に転勤して死んだ前田圭が、小林少将から橘がハルビンにいること、もうぼつぼつ自首する頃だということを聞き込み、橘が（7月24日）ハルビンの憲兵隊に自首し、橘の手記全文まで終始、聯合が独占した。橘が克明に手記をつけていることを小林少将から聞いていたので、内地護送の列車の



大相撲見物に訪れ、武蔵山（左）、玉錦（右）の2大関と記念撮影に納まるチャプリン＝1932（昭和7）年5月15日

中で入手するため、帆足升と太田知之の2人を箱乗りさせた。2人は交代で各社の記者を橋の周囲に牽制しておき、その間に別の車室で手記全文を写記し安東で下車、東京に打電し、聯合の大特ダネになった。

大平 社会部、政治部ができたのは6年じゃないかな。

長林 満州事変の当時にはできていただろう。

浅野 6年6月に内信局を確立し、政治、社会、文芸、演芸部を新設した。7年の1月(6日)に天龍の脱退事件⁵⁵があった。自慢話になるが、完全な聯合の特ダネだった。

岡村 そうそう、あんたが抜いたんだね。

浅野 その次の次の日だったか、桜田門事件⁵⁶が起きた。犯人は李奉昌^{りほうしょう}とかいう朝鮮人。陛下が通るといので、名前は忘れたが、社会部の記者が、警視庁の前の三角の曲り角で待っていた。爆弾が破裂しているのを見て社に報告し、それが非常に早かった。

警視庁の交換手から情報もらう

岡村 次の特ダネが、高雄辰馬が潜り込んだ(1935年昭和10年8月12日)の相沢事件⁵⁷。社会部から行っていた高雄が1人、その時間(事件発生は午前9時45分ごろ)に間に合った。事件が起きると門を閉めちゃったので、よその社は(陸軍省の)中に入れず分らない。運の良いことに高雄は中に閉じ込められ、出ようと思っても出られない。当時、記者クラブとデスクの間に直通電話があった。それにかじりついて、終始一貫、午前中のニュースは全部独占だった。朝、毎、読といえども一切お手上げで、こっちまかせということで非常に成功した。通信社というのは朝早く行くべきだという長林(密蔵)さんのイデオロギーが成功した。よその社が来ないうちに行け精神が実を結んだ。

二・二六事件の時は面白い話がある。今、東タイ(東京タイムズ)にいる小田善一が事件前年(1935年)4月に入って、当日社会部にいた。入社1年未満の記者を泊まらせ、ニュースの全責任を負わせていた。何が起るかわからない。内信は政治、経済、社会を通じ、1年にもならないやつを宿直させ、こいつに全責任がかかっていた。朝5時か6時、僕のところに電話がかかってきた。まだ暗かった。小田が「えらいこつてす。えらいこつてす」としか言わない。「ちっとも分らないけれど、どうも大騒ぎのようだ。とんでもないことが起き、大勢やられたらしい。何にも分らないが、とにかくえらいことらしい。朝から帝都がひっくり返るようなことになっているらしい。方々から聞いて来た。何が何だか分からない」という電話だ。

「とにかく方々に聞いてみる。社の大事な人たちに電話をかけてみる」と言って電話を切り、慌てて洋服に着替えて飛び出し、社に行こうと思った。僕はその頃、目白に住んでいた。目白駅まで歩いて10分。駅の近所で円タクを拾って社に行こうとしたらどうしてもあかん。しょうがないから(自宅で)警視庁に電話をかけた。社会部長にしてもらったけれども、部員は5、6人しかいない。それで社会部を任されても何にもできず、何の足しにもならないという考えがあったので、警視庁の古手の交換手を紹介してもらって引つ張り出し、僕も女が好きないもあるかもしれないが、どこかでアイスクリームを食べさせて、話をしたことがある。演芸の切符が毎月何枚もあったので、警視庁の女の子に毎月何枚か届けていた。「何かのときは頼む」ということでやっていた。

それをふと思いついたから、誰かいるかもしれないと思い警視庁の交換手に電話した。出てきたのがお茶を飲んだ女なんだ。それで「岡村だ。今朝はえらいこつちゃな」と引つ掛けたら「えらいことです」。「お前のところで分かるか」と言うと、「何でも(岡田啓介)総理大臣がやられた。

西園寺（公望）さんがやられた。池田成彬もやられた。内大臣もやられた。宮内大臣もやられたらしい」。女はべらべらしゃべる。「誰につなぎましようか」と言うから「ああいいよ」と言って電話を切った。

それから小田を呼び出して「俺が記事を送るからすぐ鉛筆で俺の言う通り書け。見出しは『本晩、帝都に革命勃発』。総理大臣も西園寺も牧野伸顕も池田成彬もみんな殺された。革命軍によって全部殺された。帝都は大混乱に陥っている。雪の帝都はどうとかこうとか……」としゃべったんだ。これを書けというと、小田は新米記者だからこの通り書いた。「よくこんなこと、分かったですね」。外信に行つてすぐ電報打てと言つたらそうした。

その後すぐ記事発表禁止が来た。検事局から正式なのが来た。外電も打つていなかったが、その直前に全部出しちゃった。世界中、ロイターもUPもAPも全部駆けずり回ってしまった。実際には牧野も生きていたし、西園寺も生きていた。大分間違ひはあったけれども、とにかくそのときは警視庁だつて分からないんだから。居ながらにしてニュースを取つて送つちやうた。

すぐ家を飛び出したが雪で、今でも覚えているが、目白駅のちょうど向こうのところで円タクが来たから止めようと思ひ、焦つて雪で滑つてひっくり返り腰を打つた。息ができないのをうなりながら円タクに乗り、宮城前を通れたと言つた。円タクは知らないんだ、事件が起きていることは。戒厳令が敷かれて宮城前は通れなくなる直前だったが、宮城前の様子を見ながら「お堀の鳥も心なしかはばたきが少し激しかった」という「宮城雑観」を社に帰つて書いて飛ばした。書いてしまうと同時に差し止めが来た。

もう一つ。何の問題でやられたのか知らないけれども、戒厳司令部に代表者が来いというわけで、各社の代表者が全部呼ばれて脅かされた。

松村秀逸（当時陸軍新聞班に。朝日は緒方（竹虎）が行く。毎日是小野賢一郎が行く。「新聞社はけしからん。勝手なことを書いた」と興奮していた。うちも責任者来いというので、俺が責任者だから俺が行くよと行つてみた。各社偉そうなのが来ているんだ。構わんと思つて座っていたら一人ずつ引つ張り出されて脅されては一人一人帰つて行く。僕が最後に残り、松村が剣をガチャンとやつて「新聞社は絶対服従しろ」と言う。何をすればいいか分からない。「戒厳司令部の言うことを絶対に踏み出すことはしない。余計なことを書かないで、その通りに書くことを誓うか、誓わないか」と脅かされた。「誓います」。「お前のところは通信社か。大したことはないから」というわけだ。通信社というのはそのくらいばかにされていた。

松方 反乱軍の連中、電通にも来たね。こっちは裏通りだから来なかった。

岡村 そのくらいばかにされていた。その後は各社自由取材になった。赤坂の幸楽に安藤輝三大尉以下が立てこもつて、あれからは政治部の連中まで全部動員してもらつてやつたわね。

藤井 国会議事堂が普請中か、建築したばかりで、あそこらに向こうの本部があつた。それで中尉か、大尉か。

岡村 栗原安秀中尉だ。

藤井 それが友達で、会見に行くとか行かないとか言つた。

岡村 長島（又男）じゃないか。筋をたどつて会いに行つたんだ。話を全部聞いて帰つてきたが、その話は使えない。掲載禁止だ。反乱軍を称揚するから。彼の思想なり弁舌を聞いて帰つてきた。反乱軍の自己弁護のインタビューだろう。

藤井 浅野さんじゃなかったかな。本社に帰つて来て「いよいよ革命だ」と言つたのは。大平さんは「今の金は使えなくなるんじゃないか。向こ

うの方にも色目使っておかないと危ない」と。

浅野 革命、革命と騒いで、僕のところにも電話で最初に来たのは「革命だ」と。

岡村 第一に僕が「本曉帝都に革命勃発」とやったんだ。

浅野 それから岡田啓介が生きていたというニュース。総理官邸を反乱軍に占領されたので、永田クラブ（記者クラブ）は今の神田橋の復興局の事務所、その頃、内閣調査局があった、そこに一時移した。クラブをつくると同時に専用電話を移した。29日の午後4時ごろ、反乱軍は一応引き揚げ、特別発表があるという。書記官長は白根竹介がやっていた。そうしたら「岡田総理は生きている」。他社は専用線がないため電話かけたりしていたものだから、うちは非常に早かった。

松方 外信の宿直は僕だった。僕は昭和11年の2月、途中から入ったので新米で宿直していた。あどとき、第一発はロイターのコールド・コッテスというのが自分の家から打った電報が入った。コッテスは青山に住んでいて兵隊を見ている。高度な事務電報暗号で最初に上海に行ったが、2、3行で止まってしまった。止めなければもつと事情がはつきりするの、わが方で止めたから外ではデマが飛んだ。シンガポールでもロンドンでも日本はひっくり返ってしまったということになり、尾ひれがついて大変な騒ぎになった。

佐々木 何日ぐらい抑えていたんです、報道禁止は。

岡村 発表だけやれるようになったのはその日の晩じゃないか。

浅野 発表物以外は書かせないんだ。

岡村 軍で発表するようになった。最初に発表物が出たのは夕方じゃないかな。それからずっと発表物だけでやっていた。

大平 僕ら小田君の電話で、音羽から真っ直ぐに高橋（是清）さんのところに行ったら、立っているお巡りさんが「もう駄目らしいですよ」と言う。

社に来ようと思ったら平河町で兵隊がバリケード。情報は地方新聞に止めておくということで全部流した。発表物だけ新聞に掲載するということで非常に喜ばれたね。

岡村 地方新聞には非常に喜ばれた。電通は送らなかったらしい。うちは全部地方に流している。

少数で中央突破戦術

長林 聯合ができて都内の新聞、それから地方紙にどんな影響を与えたかということをお願いしたい。

岡村 二・二六のときだってほとんど全部、政治部の人全員雑観取りから何から協力してくれて仕事ができた。取材の手足がなく、社会部で一番困ったのは警察回りがいないこと。朝日、読売あたりは80署もあるのを30人ぐらいで回って、各警察からタネを拾ってくる。うちは塚本一生が警視庁にいただけ。塚本は「地引網」とあだ名をつけられていた。彼が警視庁の各課を回って歩いた後はタネは何もない。各紙の記者がタネをとって本社に行くと、聯合から来ていると怒られる。サツ回りがいない、頭数が少ないので特ダネをとる方法を考えようというわけで、今でもよく古い社会部の連中は岡村の「中央突破戦術」という言葉を使っているけれども、人数が少ないから中央突破で行くよりほかない。

取材網がないため、つまらない戦術を考えた。「消息」というのがあるね。学芸欄とか経済欄とか、何の会があるとか、何の誰がどうしたという各新聞の「消息」という記事は全部目を通せというのでよく見ていた。そうしたら「長谷川伸、生みの母親と会見」と書いてある。今日何時、自宅と書いてある。1行しか出ていない。毎日新聞か何かの学芸欄に。ちようど入社3日目の高原四郎がいた。「毎日の学芸欄に長谷川伸、実

母と会見とあるから家に行ってこい。瞼の母まぶたというのを知っているか」「よく知りません」「おふくろと別れて会いたがっているやつだ。おふくろが見つかっておふくろを家に迎えるというんだから、記事になるから行ってこい」と言っちゃったのだ。

そうしたら電話をかけてきて「大変だ。長谷川先生がおいおい泣いちゃって。親子でえらい騒ぎだ」「それは大変だ。写真をやれ」。写真を撮って回したところ、全部の新聞にデカく載っちゃった。どこも気がつかなかったんだ。学芸記者というのはマンネリズムになっているから、そんなもの記事にならないと思ってるんだ。有名な「瞼の母」を彼が実演しているんだから。この間、長谷川が死んだのでそのことを思い出した。

もう一つ。東大総長の春の演説を新聞にみんな載せるようになった。卒業生を送る辞というのを東大総長がやると、新聞はみんな書くようになった。年中行事みたいになっている。僕が最初にやった。特ダネをつくるのに困って、たまたま大学生のことで何か問題があった。済んだ後で、今年の総長の言葉にこういう話があったというのを聞いて、「時節柄、社会時評だから面白い」というので記者をやって、話させて出したら意外に受けた。

長林 (総長は)長与又郎さんじゃないかな。

岡村 昭和7年か、8年ぐらいだな。

松方 小野塚喜平次さん。

岡村 そう小野塚さん、何か学生問題があつて。それ以来、中満が読売新聞に行ってから毎年やったんだ。そのうちに朝日も毎日もあり出す。今はみんなやるよ。東大総長の訓示というの。

藤井 今では総長も新聞を意識してしゃべるようになった。

岡村 総長もタネになるような話をやるようになった。最初は偶然だけ

ど、やったのはうちだ。それから絵や科学のことは社会部の記事にならなかった。サツダネ(警察ダネ)以外は社会部の記事にならなかった。学芸欄や科学欄があつてそこでは扱わなかった。どういう細菌を発見したとか、どういう注射がどうなるとか、医学とか、科学とか、薬学とか、美術とか、そういうものは専門の欄しか扱わず、社会部と言ったらサツダネと決まっていた。こっちはサツダネの弱いのをごまかすために自然科学の記事とか、文学の記事とか、そういうものを一生懸命、意識的にほじくり回しているうちに、その他の新聞がまねして科学記事を書けるようになった。

大平 サツ回りとして千葉なんかを入れたでしょう。

岡村 最初に3人入れた。千葉と田浦(義光と村上(定一)だ。無理に頼んで3人を入れてもらい、80署をカバーさせた。その後、少しずつ増えて変わり者もどんどん出てきた。岩永さんや古野さんが泣きつかれて入れたどうにもならないやつをサツ回りにした。社長の息子だからといっていい所にやれないので、岩永信吉もサツ回りにした。信ちゃんは夕方家に帰って一眠りして9時ごろになるとまた出て行って、朝方の2時から3時でなければ帰って来ない。毎日それをやり出した。とうとう岩永夫人に怒られてサツ回りはやめさせた。蠟山ろうやま(芳郎とろう)も長い間サツ回りで。浅草辺りの。わずかな人数だが、優秀な連中がサツ回りから出た。

大平 あれは何年かな。田中内閣の頃で不戦条約をやっていた。枢密院関係の取材になると頭の良いやつは、顧問官の自宅に先回りして待っているんだ。僕は田健治郎たけんじろの後をつけて途中でつかまえて2度、号外の特ダネをとった記憶がある。その後、(皇居)東御車寄せは入れなくなった。

藤井 台湾銀行問題のときは。

大平 東御車寄せは一切新聞記者が入れなかったのに無理やり入った。あそこで(内務大臣の)安達謙蔵をつかまえて特ダネをとった。その頃、

自動車を使いきるというので、石部金吉（石部幸式会計部長のこと）にしょっちゅう怒られていた。市川太郎と2人で内偵やつて市川に田中さんの後をつけさせたら田中さんから「いくら何でも妾の家に行くときは自動車をつけないでくれ」と岩永さんに文句が来た。僕は岩永さんに「妾の家では政談を一切やらないという誓約書を出すなら妾の家にはつかない。久原房之助が来ているとなったらつかないわけにいかない」と言うのと、岩永さんは「それはもっともだ」と言うので、田中さんが辞めるまで後をつけていたね。総理大臣の身辺については市川君にほとんど任せていたね、各社とも。

長林 （自動車を使わないと）商売にならない。

藤井 首藤君なんか（自動車代が）最高だったんじゃないかな。

大平 それは後になってからだ。僕と市川君の2人で月に百何十円とか、400円になったとしょっちゅう文句が来ていた。2人合わせて月給は400円にならない頃だよ。市川君がついて歩いているために各社にも相当役に立った。

長林 聯合ができて地方紙に対する影響は大きかっただろうね。

大平 地方紙は競争時代で、すべてが聯合ではなかった。その頃はまた地方紙は東京の記者クラブに入っていない。入っていたのは台湾日、⁶⁰満日、⁶¹新愛知、⁶²名古屋新聞ぐらい。

藤井 （名古屋は）新愛知だけだね。名古屋新聞は入っていない。山浦貫一が来てた。

長林 岡田啓介大將が本命を拝したときは、高橋さんがスクープした。

大平 高橋君は朝早く出て来るんだ。朝早く出て来て、一回り海軍省の中を回って人事は全部特ダネだった。岡田さんの本命の時も。

浅野 岡田の家に行っていた。江戸橋だったか。

藤井 あの時分、岡田は第2、第3候補ぐらいだったんじゃないか。本

命は別だったね。

大平 「（高橋は）近衛さんが辞めた原因をよく調べる。斎藤実内閣がなぜ辞めたかということを考えれば、すぐ分かるじゃないか」と言っていた。僕らもまさか岡田とは考えていなかった。

藤井 斎藤の後だから新聞社は今度は陸軍を狙っていたんじゃないか。内海君の今井田（清徳）朝鮮総督府政務総監。

大平 その程度の人事だと市川が2度ぐらい取っている。

藤井 浅野さんは北斗会⁶³でしたね。内務省では？

浅野 社会部だ。五・一五直前から総理官邸に行った。

長林 地方長官をすっぱ抜いたのは毎日だったね。

大平 あれは内務省のごみためと総理官邸のごみためで丹念にガリ版刷った後の原紙探しをやった。

長林 僕は宮内省でやったよ。給仕がコンニャク版で刷って捨てたのを便所でかぎつけてやったことがある。あれはよくやるんですよ。

藤井 ばからしいことをやったのは汽車の時間表の改正。毎日の青木がやっていた。

外信への対抗意識

長林 聯合の太平記に移ろう。東大閥というのは。

藤井 その前に松方（三郎）さん、内信ができて聯合の空気が大分変わってきたわけだが、外信からみてどういう印象があるか。

松方 僕は内信ができた後で入っているから分からない。

藤井 岩永さんが内信を理想論とし、内信をみんなでカバーして大いにやろうということになったので、外信の連中は非常に気を付けたということだが。

大平 内信から言うところの聯合は外信偏重だ。待遇も全然違う。福岡君なんか月給はわれわれの倍ぐらいとっていた。内信に対しては「気を付けろ。あいつらは乱暴者だからあんまり触るな」と。

長林 岩永自身も、内信局というところの悪いやつだと決めている。待遇改善要求も大平君と岡村が一枚加わった。

大平 いわゆる10円ボーマナスの後で、俺と山崎義人とか代表になって「金を貸せ」と古野さんのところに行った。すぐ貸してくれたのでこれも話にならない。いくらずつだったか。浅野君なんかもらったね。国会の帰りだ。

浅野 借りたよ。あれはみんな借りたんだ。必要な額を申し出ろというので。臨時国会があったんだ。みんな10円か15円、8円という3段階じゃないか。

佐々木 5円、10円、15円の3段階になっていた。昭和6年の暮れのボーマナスだね。

浅野 まだ暑いときじゃないか。臨時国会があつて松本楼に引き揚げろという指令で行くと、ビールか何かが出た。誰かごちそうしてくれたのかと思つたら、もらった金で払われた。どうするか。みんなで前借りを申し出ようじゃないか、社は満州事変が起きて金に困るというので、もらっちゃ気の毒だから前借りしよう、必要な額をみんな申し出ろというので、原稿用紙に書いて出したのを覚えてる。

大平 高井が岩永邸で裸で踊ったのは6年か。

浅野 交渉に行つたんじゃないか。

長林 まあまあと岩永の親父が言う。

大平 1円ぐらゐの弁当食わせたね。いい弁当だった。1杯出たものだから高井が会津磐梯山を踊った。

長林 へそを出して。岩永夫人は笑っていたけど嫌な顔をしていたよ。

藤井 今の組合からみれば楽なものだね。

浅野 ダラ幹のようなものだった。

大平 帰ってきたら中満、岡村の2人からのりくらりと聞かれたよ。

藤井 披露会をやってくれたね。

大平 品川のどこかで。

長林 大阪のことだけど、大賀が辞めて山口巖が新聞部長になった。

大平 御大典も終わって大賀が山口に（新聞部長を）やってくれと言つたら「俺がやるなら首切つていいか」と言つたそう。大賀が「君の好きないようにやりたまえ」と言つたら、御大典で京都に来ていたやつら全部首になつたんだ。

藤井 首切り巖。

大平 十二、三人しかいないところに6人とか7人とか切つたんだ。そのとき入れたのが猪伏清、藤川（佐吉）とか。板垣（武男）はその後だろう。萩野君が「板垣、板垣」と担ぎ上げていた。ところが東京で古野さんがうんと言わないので、大阪に入れた。

長林 本当に首切つたのか。

大平 僕らのところに来て、「巖に首切られたからどこか行くところないか」ときたよ。

長林 伊達（源一郎）、徳光（衣城）、座間（勝平）の3氏が辞めて差し支えなかったのか。

大平 別に。

藤井 古野さんが内信、外信（の局長）を兼任したようだったね。

長林 別に困りはしなかったね。

浅野 一時内信をつぶしてしまおうという動きはあつたんじゃないか。古野さんが「絶対そんなことはない、内信をつぶすということは絶対に」と言明されたのを覚えている。そういう言質を取ろうじゃないか、

声明させようじゃないかという騒ぎがあった。

長林 僕が交渉委員長で、とったんだ。午前2時か3時だった。

藤井 高井さんが局長になったのはしばらく間があったね。

大平 高井は磊落^{らいらく}というか、バーの女が勘定取りによく来ていたね。古野さんに見つかるのを非常に気にしていた。

藤井 徳光さんが大毎（大阪毎日）に入って、だいぶ引っ張って行ったときに波紋があったね。警視庁はほとんど壊滅だよ。岡野敏成がキャップで7人ぐらいのところを3人か4人、古いのばかり連れて行っただ。

長林 大賀も連れて行っただのは、どういいうきさつか。社会部の次長か何か、追い出されたんでしょう。

大平 人数は減ったけれど仕事に影響するほどのことはなかった。伊達さんが正月、園遊会を開いてくれるのがなくなっただけのものだ。伊達さんは陸軍に非常に食い込んでいたね。僕ら宇垣一成や田中義一に会うと「伊達君はどうしている」とよく言っていた。

長林 岩永さんとあんまりよくなかったのが原因じゃないか。

大平 岩永さんの性格には合わないんだろう。

長林 軍が嫌いだったからね。岩永さんは自由主義で地方を講演して、古野さんが後を回って弁解して歩いていた。海軍はそうでもなかったけれども陸軍は嫌いだった。

大平 岩永さんはおしゃれだからね。

藤井 陸軍にも友達は随分いた。満州の関係で。

長林 佐藤安之助、堀内はよかったでしょう。

大平 その頃的主流派ではないな。佐藤安之助なんか田中さんの関係だからね。

藤井 松井石根。

大平 松井の甥^{おい}を同盟に入れた。

藤井 あれは佐藤安之助が頼んだ。

長林 大平さん、浅野さん、地方紙から大きな問題が出たことあるか。遅いとか早いとか。何か希望があったか。

大平 社員総会があると、古野さんに僕と岡村君はなるべく出さないでくれと頼んでいた。静岡の大石、京都は誰だったか、うるさいのがいたよ。

長林 海軍省に行っていた浦田長老じゃないの。高知のやかましいじいさんがいたでしょう。

大平 高知はそれほどでもないんだ。福日⁶⁴、それと新愛知。

藤井 競争が激しい地方の新聞社はうるさかった。

大平 （静岡の）大石と京都新聞だ⁶⁵。神戸はそれほどではなかった。神戸は新聞がうまいという評判だった。それから非常に熱心に聯合を支持したのは岡山の編集局長。聯合を弁護してくれた。

浅野 山陽新報⁶⁶か。誰だったかな。

長林 国民新聞はやかましく言わなかったか。山根とか。

大平 山根真次郎になった頃、国民はほとんど力がなかったからね。

長林 それではこのぐらいで。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

座談会

広告聯合の思い出

1963(昭和38)年1月25日
日比谷会館で

(出席者)

木村哲造 (業務局中央部長)

平野義信 (業務局助役)

石津英司 (業務局助役)

不破欣一郎 (業務局)

藤井信次郎 (内信局)

板垣武男 (大阪支社内信部編集主任)

佐々木健児 (元満州国通信社通信部長)

(編集者注) 役職は佐々木を除き、いずれも新聞聯合社での1935(昭和10)年12月当時。座談会で言及される不破^ま磨^た太は35年12月当時、新聞聯合の業務局長兼広告部長。47年に死亡。



佐々木 『通信社史』の続編を編集することになり、その中の一つの項目として広告聯合の歩んだ道についてお話を伺いたい。『通信社史』には、広告聯合に関連した記事は3ページ半しかない。今日は、本筋の話をしたい。ただきたいし、合わせて裏話とか、思い出話的なものも承りたい。不破^ま欣^た一郎さんに話の引っ張り出し役を受け持っていたきたい。

不破 広告聯合は何年間か広告代理業をやった後、新聞聯合社と合併した。新聞聯合の業務局となって不破^ま磨^た太が局長になり広告部長を兼

任し、折橋(慶治)さんが事業部長になった。事業部は4階、広告部は1階だった。業務局に事業部を入れなければならないという考え方で出発していると思う。簡単に言うくと、広告聯合が昭和4(1929)年7月に創立され、8月から業務を開始した。その後、昭和7年に新聞聯合に広告部を設けようということになり、広告聯合を合併して業務局を設け、局内に広告部と事業部を設け、写真部も業務局に移した。

佐々木 昭和4年7月、匿名組合⁶⁷の広告聯合社ができた。6年12月1日に広告聯合が新聞聯合に吸収合併され、聯合の業務局になった。そして11年6月に電通に行った。

板垣 三転するわけですね。

不破 新聞聯合の広告関係というのは広告聯合、新聞聯合、それから半年間、同盟の広告部という形で来ている。時間を追って話を進めたいと思う。広告聯合がなぜできたかは、私はまだ若かったから本筋のことは分からない。帝国通信社が没落した。新聞聯合は初めは外信を中心にしてやっていたが、帝通の没落をカバーする意味で、内信(国内ニュース)も地方紙へ供給しなければならんという考え方で、内信を始めたのだと



不破磨太

思う。ところが内信を地方新聞に取ってもらおうと、いろいろ運動してもなかなか取ってくれない。

なぜかという、その頃は帝通も通信と広告の兼営、電通も広告と通信の兼営で会社を経営している。新聞社の通信料は大体を広告料と相殺するという建前なので、新聞聯合が一生懸命、地方紙を勧誘して一部有力社が入っても、小新聞までは入り切れない、中級の新聞も入り切れない。なぜかと言うと、新聞聯合は広告を全然集めてくれないからだ。「通信料を相殺する」という考え方がないじゃないか」ということで、勧誘に非常に弱った時代がある。そのため一時は神田の博報堂と業務提携して、博報堂の広告料と聯合の通信料を相殺してもらう、という考え方で動いたことがある。

これはうまくいかなかったようだ。一方で全国地方新聞連盟⁶⁸という団体をつくることになった。今もご健在のはずだが、山陽新報の赤沢助氏をはじめ、高知新聞の栗尾結城氏、小樽新聞⁶⁹の本田龍氏、それに九州日報²³の内田好之輔氏、新愛知(新聞)の勝田重太郎さんが中心になって何社かを起合して全国地方新聞連盟というものをつくり、新聞聯合の通信を買ってもらう努力をした。それでも新聞聯合の通信を取る新聞社の数ははかばかしく増えない。

そこで広告取り扱いの仕事をやらないと、新聞聯合の通信は伸びないという結論に達して、広告聯合を創立することになったと思う。素人の不破磋磨太と、いくらか広告を知っている石井衛太、經理には石川勝司、こういう人たちが中心になって広告聯合をつくった。だが広告業務に明るい者がいなかったの、石津さんを引っ張って来た。

新聞聯合は、APに倣って通信專業の形で社の発展を図っていききたい、どんどん加盟新聞社を獲得していききたいという考え方だった。だが通信料・広告料相殺という慣習を打破できなかったため、別会社として広告

聯合をつくり、広告取り扱い業務を始め、通信料に見合う広告を集めて地方新聞の通信購読を促そうというのが本当の狙いだったと思う。

広告業務は素人では理解できないところがたくさんある。石津さんが友人を引っ張ってきてくれる。そうこうしているうちに形がついてきた。石津さんには、広告聯合時代のお得意の開拓とか、新聞社との関係、電通や他の代理業が広告聯合をどのように見ていたかという話をお話したいと思う。その後、木村さんと平野さんに、外から見た広告聯合というものを話していただきたい。

その時分、木村さんは時事新報にいられたし、平野さんは帝通を退いて全国新聞通信社をつくり、そこで広告取り扱いをやっておられた。いわば広告聯合の競争会社という立場にあったわけだ。それでは石津さんよろしく。思い出せないことは私が後で補足しますから。

石津 期待を持っている新聞社は相当多かったが、電通に非常に義理立てするところが何社があった。取引にも支障を来すようなところが2、3社あった。

不破 その頃の政党は政友会と民政党でしょう。通信社は政友会を代表する形で電通があり、民政党の代表は帝通という状態だった。地方新聞は大体1県に2紙以上あった。それぞれの政党を支持する形で発達してきた。ところが突然というわけではないが、帝通が駄目になった。それで民政党系の新聞は、新聞聯合の通信を取らなければならない状態になっていた。ところが電通の広告料の水揚げが段々多くなって、それに頼らなければならない。広告聯合と親しくすると電通が邪魔をするかもしれない。それでうまく広告聯合を操縦し、電通の機嫌を損ねないようにという考え方が濃厚だった。

具体的な例を言うと、例えば名古屋新聞は電通系、新愛知は系列がない。新愛知は広告聯合を支持してやろうという考えがどこかにあった。

ところが名古屋は完全に電通系で、これと取引を始めるのに大変骨が折れた。戦後亡くなった大宮伍三郎という方が支局長で、ことごとく電通をひいきにして、広告聯合をないがしろにしようという考え方があった。名古屋ばかりじゃなく、その他の有力紙にもそのような傾向があったように聞いている。

半面、広告聯合というものができ、新聞聯合がバックにいる、これをひとつ成長させなければならんという考え方もあった。例えば山陽の赤沢氏、小樽の本田氏とか、高知の栗尾氏、九州日報の内田氏、神戸新聞、京都日日、大阪時事の3新聞の支局長を兼ねていた酒井謙吉氏ら。ある意味では新聞聯合を一生懸命支持していたということが言えましょう。

広告聯合は将来、激しい競争相手になるぞと言うのが、電通の考え方であつたかもしれない。他の代理業ができたのと別な意味合いで広告聯合を見ていた。双葉のうちにこれを消滅させてしまいたいという考えがあつたのではないか。このように私は見ている。

石津 一番ひどかったのは名古屋新聞ですね。あれは何だったのかね。いったん受けた原稿を返しに来た。

不破 そういうことがあるんですよ。広告聯合は新聞聯合がバックにある広告会社だ、新聞聯合の広告部だ、できるだけ早く何とかしようという考えが電通にあつたのだね。だから電通に近い新聞社は、意地の悪いことをしたものです。

板垣 電通から言ったら当然なことだろうね。

不破 もちろんそうだ。

広告料金で通信料を相殺

藤井 中央の新聞社は、電通系と帝通系に画然と分かれていたが、平野

さん、広告の分野はどうなのか。はっきり分かれていたのか。

平野 (話をさかのぼると) 帝通が地方新聞社に通信を提供していた。ところが地方新聞社は通信料をなかなかよこさない。どうしてもそれに代わるものをこちらが供給して相殺機関をつくらなければならない。帝通には広告部があり、通信社の威力でいわゆる硬派広告には非常に有力であつた。おそらく電通も及ばなかつた。ところが地方新聞となるとほとんど取引がない。

そのころ、細井組という地方新聞の有力な代理店があつた。帝通はその細井組を吸収した。それ以外に二つ小さい代理店を吸収して、地方部というものができた。細井組社長の細井直次という人が商売の上手な方で、ライオン、味の素、御園白粉みそのしろいとかいった大量広告主の地方新聞を扱っていた。それをそっくり帝通に持ってきた。それに付随して有力外交員が入社して有力な地方部ができた。その後は地方の通信料を取り上げることができた。

当時の地方新聞社は、言葉は悪いけれども経済的に弱体だった。広告を余計もらつて、こちらが金を払うぐらいにしないと通信料の値上げも何もできない。通信料の値上げは通信部の人が行って交渉すべきなのだ。だがそれでは新聞社は承知しない。そこで広告部の地方部を主宰している私が地方を歩いて「君のところは、今度はこのように費用もかかるのだから、これだけ値上げをしてくれ」と。そうすると顔色を見て「広告はどうだ」と言う。「広告はこの通りだ、さらに努力しましょう」と言う。「それじゃ値上げもこういうようにいたしましょう」ということで、通信料の値上げは広告料の水揚げ見込み額でできたわけです。

当時の通信社は、広告が非常に重要な関係に置かれていた。だから広告を取るために電通と帝通が競り合う。新聞聯合ができて電通と競り合う。激しいときは損得を度外視して扱う金額の上昇を競うということだ。

普通、広告代理店は、広告を扱うときには当然利潤を考えなければならぬ。ところが利潤は考えない。扱いが増えるということが目的で、利潤は第二の問題ということで、電通でもどこでも通信関係は非常に犠牲を払って、広告の扱いを増やそうという形を取った。

藤井 帝通が没落しても、帝通が握っていた広告主が広告聯合にうまく流れるという具合には簡単にいかない。

平野 それはね、帝通の首脳が代わったからです。頼母木たのもぎ（桂吉けいきち）社長が先代の竹村（良貞）社長の後に来られた。頼母木社長は報知新聞の広告部長だったので、広告のことは分かっていた。広告と通信という関係についてもよく考えていた。ところが頼母木さんは政党人で政界に行った。そのために社長を辞めなければならず、それを補充するのに、広告や通信というものもお分かりにならない、ただ民政党関係であるというだけの社長ができた。それに従って全然関係のない人を要所要所に据えてしまった。

たまたま私だけは広告を営業局の方で握っていて、ここだけは踏み込んでもらわなかったのですが、その他はほとんどの重要ポストがそうだった。そのような関係で、やる事がごとくわれわれの考え方と違い、相いれないところがあった。そして突然、私を休職にした。「月給は従来通り差し上げます。業務だけ離れていただけませんか」というそこで「冗談言っただけいかに。われわれはそういう立場で月給さえもらえばいいというわけにはいかない」と辞めて、本当にわずかな資本を私が持つて広告代理店をつくった。

そうすると、大量広告主をお得意にしていた人たちが、私が創立した会社から後から入ってきた。みんな得意を持ち込んで入ってきた。帝通は存立しているけれども、いわゆる通信料回収のための広告は、全部私の方に移動しちゃった。そこで帝通の経営はさらに困難な立場に

陥った。結局、私どもは、帝通の地方紙に関する限りは有力な代理店になったわけです。

広告聯合が出来上がって1年ぐらいたってからだろうか。旧知の赤沢さんが「広告聯合と一緒にならんか」とある条件を持って私のところへ来た。赤沢さんとは古い知り合いだったが、条件がね。今になって考えれば、あのとき、広告聯合と一緒にしていたら新聞聯合に寄与するところは、非常に大きかったであろうと思うが、当時は若かったし、自分でこれだけのものを握ってやっているんだ、それをこんな条件でという気持ちがあったもんだからお断りした。

広告代理業というのは非常にやりにくい。しかし、私の場合はスムーズにいった。長年、地方新聞の方と個人的にお付き合いがあったし、新聞社の協力もあったので、独立してから「お取引願います」と言うのと、「ああいいとも、みんなそっくり持ってきて来い」という形で、資本はほとんどなかったが、非常に楽にお取引ができた。

不破 結局、通信社が発展しようとする、広告がどうしても必要であると結論づけられた。そこで広告聯合ができた。広告聯合ができると、さまざまな妨害があったが、とにかく7、8人から始まって20人近いものになったでしょう。

新聞聯合と合併するまで短い時間だったが、広告聯合は新聞聯合をバックにしているということで、仕事は大きいものができた。例えば輸入を防遏ぼうあつして国産品を愛用しなければならぬという時期が昭和初期にあった。当時、国産品愛用奨励会という会があって、私をはじめ石井衛太、石津英司というような人たちが会の幹部を説得して、国産品愛用のキャンペーンをやった。1ページの中に一流商品を網羅してね。東京の新聞はもちろんだけれども、地方新聞もやったんじゃないか。

浜口（雄幸おさち）さんが民政党の総裁時代と思う。総選挙があって、選挙広

告の争奪戦があった。その時には新聞聯合に協力してもらって素人の私
が選挙広告獲得のために懸命に動いて、民政党も政友会も両方とも取っ
て来た。その時分の政党の広告というのは、今のように入ストレートに自
由党がもの申す、社会党がもの申すということではなくて、本の広告の
形で宣伝していた。1部10銭かそこらのパンフレットを出していたわけ
だ。内容は各党の政策、綱領を書いたもので選挙運動の一つの手段だっ
た。このパンフレットを売る選挙広告を1ヶ広告にして全国的にやった。
今の政党広告よりも間接的だが、非常に活発な選挙運動をやったことが
記憶に残っている。

板垣 広告のスポンサーは政党ですか。

不破 政党です。

板垣 広告に民政党なら民政党という名前が出るわけですか。

不破 出る。浜口の顔がでかく出てね。政友会は政友会、民政党は民政
党でやる。各1ヶの大きい広告をね。追広告と言って半ヶ広告を出すこ
とで、5段を出すとかいうことでやった。パンフレットは10銭ではできな
いだろうと思うものを10銭でバラまく。ただでもいいという状態でな
かったかと思う。

そういうふう激しいところがあって、いろんな妨害はあったけれど
も、広告聯合は新聞聯合をバックにしているというので、大きな舞台で
活躍ができたということは言えますね。その時分に有力な広告主に何が
しかでも食い込んでいったのは非常に大きな働きだ。扱いの量は微々た
るものだったが、大抵のところは広告聯合を利用してくれた。いわゆる
有力広告主はね。

それからもう一つ。私と一緒に広告聯合をつくった石井衛太は、広告
には何がしかの経験はあったが、玄人ではなかった。国際通信から新聞
聯合、広告聯合という経路だからわずかな経験だったが、いろいろ生か

して今から考えるとよくやっていた。例えば輸入広告。石井が扱ったの
はパッカード、これは日本に代理店があるが、アメリカから直接、扱っ
ていた。それから歯磨きのコルゲート、ゲッツのサラダオイル、ケロッ
グのコーンフ레이크など。これは大したものだ。外国の代理業者に手紙
を出して外国のエージェンシーと直接取引した。広告聯合で輸入広告を
扱ったことは特筆すべきだと思う。

藤井 新聞聯合との連絡は石井さんが1人で当たっていたようですね。
死亡記事覚えていますよ。誰か死んだというところと広告を取りに行かな
ければならぬ。

不破 広告聯合時代、死亡広告は何回かやっている。

藤井 社会部の僕たちのところによく来たよ。

不破 帝通で何年か経験した人たちが何人か来ているし、電通で経験し
た石井貫一さんが来ている。九州日報の支社長をやっていた遠山源太郎
さんが、広告聯合の営業部長をやって活躍していた。だから黒杵(死亡
広告)もあったはずだ。

新聞聯合と広告聯合が合体

藤井 広告聯合の初期のスタッフを覚えてるか。

不破 不破瑤磨太が社長で石井衛太、石津英司、石川勝司、そのほかは
電通、帝通その他で、広告業務に経験のある人々でサムライが多かつ
た。

藤井 野武士ばかりだな。

不破 そのころの広告は今とは雲泥の差で、通信販売が幅を利かせてい
た。もう一つは家庭薬、売薬。これも幅を利かせていた。化粧品ではレー
ト(平尾賢平商店)、ライオン歯磨、桃谷順天館、クラブなど。広告の大部

分は薬、化粧品、書籍、食料品というようなものだったね。そういう業界の有力なところへ広告聯合は働き掛けて広告を扱った。味の素も扱う、講談社も扱う。硬いところでは第一生命、第一徴兵保険、国光生命が得意先だった。常磐生命(現朝日生命)が金を出して日比谷の角につくった美松の広告を獲得したことを覚えていいる。それから有名な星製薬ね。これはおそらく岩永さんが誰かの仲介で、一部を広告聯合が扱った。

新聞聯合が広告聯合を合体することを昭和6年12月に決めて新聞聯合に移ったのが昭和7年の1月何日か。それではっきりした存在になった。それから人材がだんだん集まり、例えば木村さん、平野さんら。若手では電通の常務になっている佐藤四郎らの人材が集まり、新聞聯合広告部の活躍時代が来た。朝、毎、読の中央新聞関係の交渉事は木村さん、地方新聞関係の交渉事は平野さんと栗田貞一郎さんが担当していた。

佐々木 『通信社史』によると、昭和6年末の月額取扱高が10万円程度になった。それで収支トントンということですよ。

不破 それは少しさばを読んでいるな。

平野 私が電通に行つて、電通の地方の帳面を見る立場になったとき、想像していたより電通の地方新聞に対する扱い総金額はビックリするくらい少なかった。それは今おっしゃる金額には到底及ばない。合併当時ですよ。

不破 確かにそれはさば読みですよ。結局、発展期というのは、新聞聯合の広告部になってからでしょう。

木村 政友会と民政党が競争で選挙広告を出そうということになった。

平野 私は不破(達磨太)さんから「君、民政党は頼母木さんが幹事長だ。民政党を取ってきてくれ」と言われたんです。電通は栗原君と西野君が担当だった。西野君は旧帝通の人間で、頼母木さんのことを知っている。私は民政党本部に頼母木さんに会いに行つたが、忙しい選挙の前で幹事

長になかなか会えず、廊下でつかまえたんです。私の顔を見るやいなや、非常に勘のよい人ですから「よし半分」と。こういうことを即座に廊下で会つて言うんです。半分山分け。電通は既に原稿を作っており、西野君は私の顔を見て大慌てに慌てた。

木村 なぜはつきり覚えているかという、私は体が弱く、熱海で湯治をしていた。ところが電話がかかってきた。お湯に入っているのに1日に2回も3回もかってくる。見積もり競争というのだ。

平野 私は値段のことは直接関係しないから分らない。

木村 驚きましたよ。とにかく1日2回も3回も電話がかかってくる。とうとう腹を決め、朝日はいくら、毎日はいくらと決めて値段をはつきり出した。それを事務的に処理して平野さんが持つて行つた。当時幹事長で飛ぶ鳥を落とす頼母木氏だったから、大変だっただろうと思う。

平野 後で頼母木さんから「もつといいのを取ればよかったじゃないか」ということを言われたが、そももいかなかった。向こうは既に原稿をすっかり用意していたのだから。

木村 不破(達磨太)さんが喜んでいましたね。

平野 頼母木さんとの関係があつたから、もううのに私はちつとも苦労しない。顔見せただけで半分もらえたんだ。

広告商売はあらゆる面で戦争

木村 見積もりは苦労した。取ったはいいが、その値段で新聞社が入れてくれるのか、くれないのか。取ったはいいが、手をかましたんでは何にもならん。赤字を出したのでは取らない方がよかつたということになる。体面だけを重んじて電通と争い、「木村君、赤字じゃないか」と言われたら仕方がない。



光永星郎

佐々木 その頃の単価ははっきりしてなかったのですか。

木村 いや、はっきりしていません。

佐々木 それを値切るわけですか。

不破 安く見積もってね。

平野 広告商売というのは、あの当時は、あらゆる面で競争で、黙って新聞社へ回すような値段というのはいないんです。それをいかにこなすかが、新聞社と折衝する係の手腕になるわけです。

木村 もう一つ電通を慌てさせたのは目黒にあった大日本麦酒^{だいっぽんビール}。なかなか大きな会社だが、入札ではほぼ電通だった。平野さんと栗田君で見積もりを作って行った。電通と競り合ったが、この時は地方紙も中央紙も栗田君が取った。電通の（光永星郎^{ほしお}）社長、ヒゲの八火^{はつか}（光永氏の雅号）先生が木下君や幹部を呼んで激高したという話を聞かされた。後で電通の人に聞いても「電通の歴史に汚点をつけた。大日本麦酒の広告を新米の新聞聯合に取られるなんてどうかしているじゃないか」と怒られたということ聞いた。

もう一つは日本橋の高島屋。これは電通と競争になって真っ向から

やった。高島屋は京橋の八重洲口近くに2階建ての店舗で営業していた。

その高島屋が今の日本橋の店舗に移転するとき、3階ぐらいのページ広告を出すことになった。ページ広告というのは必ずしも高島屋が最初ではないが、飯田新七という高島屋の社長は、3階広告を出すのが、値段を安くしてくれというわけだ。電通は2代目社長の光永真三さん、木下さん、私の方は後藤庄太（その後改姓し、吉田庄太）が夜となく昼となく張り合った。その頃、広告料は行単価で、時事新報が22銭か23銭、朝日が28銭ぐらい。値段もお互いに競争したが、高島屋と協力して吉田君が丸く収めた。吉田君、なかなか出来のいい男ですよ。高島屋始まって以来の大宣伝、3階広告を出すということで、大変な意気込みだった。電通と新聞聯合が本当にかみ合ったのは高島屋でした。この件を契機に「地方」といわず、中央といわず、新聞社は初めて「新聞聯合は着実に進展している。信頼してもいい」というようになったのではないかと思う。

藤井 柳橋^{やなぎはし}などのいわゆる営業の軍資金は、電通などに比べて例によってしょっぱいもんだっただけでしょう。

木村 いや、電通もしょっぱい。当時の電通は。

平野 赤字会社だもの。

不破 細かったよ。交際費はなかなか使わせないとこだった。電通は。

藤井 聯合は？

不破 賞与の例で言うと、われわれペイペイ組は期待に胸を膨らます。すると角封筒で厚いんだ。今度は余計寄こしたな、と思って開けてみると、岩永さんの挨拶がプリントして入っていて厚いんだ。中味は20円か30円だ（笑）。そういうところだったから、交際費なんか細かったね。

平野 私には陰の苦勞があった。私は自分で代理店をやっていた。自分でも使い過ぎて失敗したんだが、陰の金が非常にいる。しょっちゅう地

方新聞社の支局長連中とつき合って金を使った。それが非常に良い作用をしてくれたのだが、新聞聯合に入ってから、そういうものは出ない。はっきりしたものは、不破（瑤磨太）さんの承認を求められるけど、つまらないものはできない。単なるお付き合いでやるんだから。表面に出ない、いわゆる裏面工作のため自分の金を使って、仕事の運びをうまくやらなければならなかった。

新聞聯合でもはっきりしたものは出していただくが、あとは個人的な問題になる。それがあがるがゆえに相手は無理も聞いてくれるということになる。貧乏会社だから交際費というのはたくさんは使わなかったと思いますね。それでも本当に有力な広告主が得意先になってくれた。例えば東芝や三共、出版は岩永さんの関係だろうと思うが、岩波書店の広告が全部聯合に来了。あれは立派なもんですよ。

木村 あれは岩永さんが広告を取ったんだ。岩波（茂雄）さんと学校が一緒だった。同窓ですか。それで随分、長い間会わなかったが、どこかのクラブで会って「君、今何をしているか」ということで話をされた。「広告もやるのか」「やらなくちゃならんもんで、やらせている」と言うのと、「俺は何も手伝いはできないが、お前が自腹ばかり切ることはないだろう。われわれも応援するよ」「広告費はどうなっているか知らんけれども」。そういったやり取りだったらしい。

それから何日かたって、不破（瑤磨太）さんが「えらいものを専務が持ってきた。神田の岩波書店だ」。雑誌界、出版界でナンバーワンだよ。今でもそうだろうが、信用といい、当時から羨望（せんぼう）的になったものだ。昔はご案内の通り朝日新聞、毎日新聞とも1面は全面書籍広告だった。岩波さんは題字脇3段あるいは4段という指定だが、岩波の広告なら優先掲載したものだ。

平野 場所がやかましいので、私は何度も岩波に行った。

木村 とにかくもらえるということで、恐る恐る不破（瑤磨太）さんと私が行った。当時、堤さんという方がいてね。社長から直々の話があったということ、岩永さんの威力は大したものだった。ただもうありがたいうことで引き下がってきた。それで溝口正さんに担当してもらった。駆け出しの代理業なり外交ではとても取れるものじゃない。それを岩永さんのお声掛けりで岩波が来た。私どもは誇りを感じたね、あの広告には。

平野 あそこぐらい（掲載場所の）やかましいところはない。そのために何度行つて相談したか分からない。一番いい所であれば承知しないんだ。

木村 朝日なんかよくしたもんだね。岩波を上に乗せないで他のものの上に載せたのでは、紙面が見劣りしていかと迷信的なものを持っていた。題字脇の3段を岩波で埋めちゃう。その下に大小取り混ぜた種々の広告を入れる。毎日もそうだった。読売だけが記事面下3段だった。岩波が全部、新聞聯合に来了というのは大変なことだった。

平野 おかげさまで骨が折れた。

藤井 失敗談はありませんか。

不破 何とかして電通を凌駕（りやうが）しよう、頑張ろうとみんな一生懸命になって、得意先開拓のため足をすりこぎにして働いた。全部取ろうと思ったやつが半分しか取れなかったのは失敗談だね。でも競争だからしょうがないのだ。100%獲得目標から言えば、50%しか獲得できないのだから、不成功を重ねていたということは言えるんですよ。だがこれは裏返すと成功ということですよ。

藤井 ところで古野（伊之助）さんは広告に対して意見を述べて演説するとか、何かを出したりしたことはありませんか。

不破 古野さんのは聞いたことないな。

平野 銀座の本社で話をされたのを記憶しているが、広告がどうのこうのという話じゃなかった。新聞聯合としての話で、業務局に対するお話じゃなかったと思う。

黒梓扱いで電通と競争

不破 電通との競争で一番エキサイトしたのは黒梓扱いだった。黒梓は通信部から「誰それが死んだ」という連絡がくる。「それ！」と行くと電通とぶつかる。小競り合い、大競り合いして全部取って来る、あるいは半分にされる、惨敗するということがある。そういうことが何回かあった。それこそ名士が危篤と聞くとスツと行く。金君というのがいてね。今はソウルで暮らしているが、実に大したものので電通と一人で競り合う。心の中から「打倒電通」なんだ。危篤というところで行っちゃう。2、3日待って死んだというときまた行って商売してくる。ファイトの固まりだった。彼は有名人の死亡には必ず行って、必ずものにした。偉いもんだ。電通は、新聞聯合の金は大変な野郎だと言っていたようだ。

電通には種田、小野久とか黒梓の猛者がいて、彼らと競り合っていた。聯合は、全部取れなくとも半分は取ってきて面子を立てていた。

平野 僕は地方紙担当だから、あまり死亡広告に関心を持たなかったが、江木翼さん^{なすく}かな。大臣が亡くなってね。来てくれというので行った。そうしたらいい具合に代議士がいて、名前は忘れたが、私の顔を知っていたんだ。「ああ平野さん来たか」というわけで、そっくりもらってきた。**木村** 編集も協力してくれましたね。夜分に電話がかかってきて、編集に電話すると直接便宜を図ってくれた。

藤井 その頃の編集は世帯が小さかったね。

不破 それと何とか電通を追い越そうという考えがみんなに浸透してい

た。

木村 相当浸透していた。

不破 (電通と合併する少し前に(元外相の)内田康哉が死んだ。その時、金君が飛んで行った。電通の社員はみんなバツジを外して葬儀委員みたいなことをやっている。そして金君の仕事を妨害するようなことをやっていたそうだ。それでも何とか頑張って半分もらってきた。

藤井 そろそろ合併前夜のことを。

平野 新聞聯合では私が一番後輩なんです。私が行った時分には、中央の方は既に積み上がって上昇しつつあった。ところが地方新聞の方はなかなかそうはいってなかった。行ってみたらビックリするほどしかなかった。私は元来、通信社育ちで地方新聞関係の通信を頭に置いて始終仕事をしていた関係上、ビックリしたんですよ。少ないので。新聞聯合へ行ったのはいいが、どこから手を出していいか分からない。

そこで考えたのは、自分が地方新聞の支社長連中と個人的にもいろいろ結び付きがある。そういう連中が直接持っている広告がある。代理店を経由しないで自分で直接扱っているもの、その中で動かしやすいものを個々にもらって歩いたんです。だから私の場合、広告を広告主から取るのではなくて新聞社から取って歩いた。それを新聞聯合に付けてもらう。その代わり利潤はそう余計に付けてもらえない。ほんのわずかな。それでも一つでき、二つでき、個人的に援護してくれる人たちが、当時代いぶきましたから何とか顔を立ててくれました。

幸運なことが一つあった。地方新聞を大きく扱っていた代理店があった。それが2代目になってつづれた。そこが一番多く持っていたのは講談社。それ以外にもいろいろあったのですが、私がちょうど新聞聯合に行って少したってからそういうことがあった。火事場泥棒式な話だが、つづれた後の広告をどここの代理店に移動させるかという問題があり、あ

ちこち移動させたわけです。チャンスということで、努力して講談社の広告を新聞聯合に移動させた。人間も採用した。

石津 人間も採ったね。塩野君を。

平野 塩野君のことで今日でも忘れないことがある。「トモサン」という胃薬の広告を出している友田合資（現在の共創未来ファーマ）に塩野君が飛び込んでいった。当時、電通の井上泉氏とかそのほかの代理店がいくつも入っていた。柿沼という方に会っているいろいろ私が説明したら広告政策を変え、大きい広告にして全新聞をくれた。塩野君の手柄で、私も努力した。

進文館という講義録の出版社があった。通信販売的な広告を出していた。新聞聯合では石津さんが行っておられた。私も以前から親しい広告主なので、石津さんが「平野さん、一緒に行って話をしてくれ」ということになった。それから随分行ったね。これも全新聞取った。値段は切りつけて安かった。

電通と新聞聯合の競争がいかに激烈だったかという証拠になる話もあった。電通の地方課長で平林彪雄という人がふらっと進文館へ来て値段も見ないで「何でも構わない、新聞聯合がやっている値段より1割引きます。だから私の方にそっくりください」とやった。進文館は「それで結構です」と。石津さんと一緒に先方に行き、「われわれは長年あなたとは特殊な関係で、苦心惨胆してこの値段にした。これは容易なことではないのだ。それをさらに1割引くというのならば、あなたの方はお得だから電通へやりなさい。その代わり私の方は今までの値段で、今まで通りのものをいただいてやります」と言った。それであれは二重に出したね。

石津 向こうもしようがないからね。

平野 向こうさんは困っちゃって往生したわけです。それであれは電

通はやめたんだね。

石津 やめた。

木村 先ほど平野さんから火事場泥棒という話があり、それで思い出したが、昭和8年か9年、はつきりしないが、松屋の専務の内藤さんが、神兵隊事件⁷⁵に引っかけ引つ張られた。その通信を新聞聯合が出した。そうしたら松屋の宣伝部が新聞社へ出掛けていき、どういう根拠かと追及した。新聞社からは「これは新聞聯合から来た」と言われ、新聞聯合に来た。「何とかしてくれ」ということなんだ。どの程度、編集に言えたかは記憶にないが、若干手加減してもらったかもしれない。

それから1週間たって松屋に行った。「誠に申し訳ない。こういうものを出して」と謝った。そうしたら「時事新報はあなたのところいかがでしょうか。もう一つ、中外（商業新報）がありましたね。扱ってください」と言うのだ。「いいですよ」と言ったら、「通信をタネと言ったら悪いですけれども、公平に扱っていただいて、うちの重役連中も感謝しております。ほんの寸志です」と時事新報と中外をもらったことがある。火事場泥棒じゃないけれども降って湧いた事件だ。電通も欲しがっていたし、新聞聯合に来たのを見て大慌てだ。ぬれ手で粟^{あわ}で火事場泥棒だ。そういう話はないんだが、これなんか全くうまい話だよ。

平野 もう一つ、田辺（元三郎）商店（現在の田辺三菱製薬）の内藤（豊次）さんが「エビオス」という薬の大量広告を出した。その広告を溝口さんがやっていて、地方の小さい新聞を一つぐらいもらっていたかね。ところが名古屋新聞の大宮さんが「平野さん、あなたを応援しなければならん。ひとつ私が考えている」というのです。

大宮さんが主導者になって、その当時の相棒だろうね。酒井謙吉君という神戸新聞の人、それから田中常人君という人がいて、それが中国民報⁷⁶。この3人から内藤さんと私が神楽坂に呼ばれた。3社そろって大量

契約ですよ。それをそっくり新聞聯合に扱わせようじゃないかという。

内藤さんという方は偉い人で今はエーザイの社長だ。外国へ再三行って広告のことはよく分かっておられる方なんだ。その人が私をつかまえて、新聞広告に対する議論を吹っかけてきた。お得意先とわれわれ広告屋では考え方に違うものもあるが、そんなことを言ったら、せっかく段取りをつけてくれた人たちに相済まないことになるので、ごもつともですと頭を下げて、3社そっくりもらって来た。

もう一つ。これは電通になってからも痛感したことだが、新聞社は一つの代理店に扱いを集中すると、自分の方に不利という面がある。あらゆる面で押さえ付けられるからだ。できるだけ押さえ付けられないで、広告を自分の方に持つて来なければならぬ、そのところのテクニクは、新聞社には現在でも無論あると思う。

電聯合併で電通へ

不破 新聞聯合になってからは新聞社の考え方も違った。お得意も電通と同じように新聞聯合を育てていかなければならないという考え方がどこかに出てきた。それでだんだん良くなってきた。電通との合併が表面化すると、新聞聯合が一生懸命活動しても広告主は「どうせ一緒になるんだから聯合さん、そうたくさん広告をもらおうとしなくなっちゃいいじゃないか」と言い出してきたね。しかし実際にはそういうことは影響せずにごんごん伸びて、いよいよ合併する時には24万円という数字になった。

われわれが聞かされていた電聯合併の元々の計画は、新聞聯合が電通を全部吸収することだった。「これは面白い。いよいよ電通はなくなるぞ」。何年か後には同盟通信という名前になって電通も新聞聯合

と一緒にになってしまうということで一生懸命やっていた。

ところが、主として電通側の工作だろうけれども、通信は新聞聯合へ、広告は電通へというんだ。木村さんからは「電通を接収するときには、あなたがやらないと困りますよ」と言われた。嫌だと言ったが「あなたしかやれないじゃないか。ただ、電通の得意を接収するときには、もう少しお手柔らかに頼みますよ」と言われた。まあしょうがないだろう。私も、もういっぺんやらなければならないと思っていたのが、あべこべに自分が接収された(笑)。だが、みんな最後まで張り切ってやっていたね。

平野 合併後、地方新聞の扱いを電通に行って帳面を調べたら新聞聯合の扱いが、電通の3割5分、意外に電通の扱いが少なかった。もう一つびっくりしたことは、電通は非常に犠牲を払って扱っていたことだ。損をしていた。それを今度は損をしないように値上げ、値上げとチャンスをつえては、お得意は1銭値上げして、新聞社は8厘とか7厘にするという具合に機会あるごとに直していく。それでも損はなくなるという時期がある日、来た。それまでは犠牲を払っていた。前に申し上げたように通信社の広告の扱い方は、中央はそうでもなかったが、地方は通信料という問題が眼の前にぶら下がっている。扱いを増やして通信料との相殺をスムーズにしていかなければならないということが、広告扱いの前提の考えであった。そこでチャンスのあることに損をしても競争で取る。ところが新聞社はまけない。そこで犠牲を払ってもよい、扱いが増えればよいと。結局全体からいけば通信料がそれだけ回収される形になる。

藤井 合併のときに人間は何人ぐらいだったか。

不破 少ないですよ。電聯合併は今から考えると、通信事業と広告事業が完全に分離されたもので、日本の通信界、広告界にとって非常に良かったと思う。世界を見てもフランスのアバス通信社^カだけが、通信と広

告の兼営らしい。その他はみんな通信專業、広告專業だ。日本ではどう
いうわけか分らないが、通信、広告兼業の形で発達してきている。お
そらく新聞社側の通信料の支払い能力が十分でなかったため、広告業務
を兼営して広告料で通信料を相殺しなければならなかったのだろう。

こういう事情があるので、帝通も電通も官庁、会社、商店に広告の必
要性を説いて広告を出させる努力を何十年も継続してやってきたのだろ
う。それがあある意味では日本の広告界の基盤をつくったと言える。電聯
合併で広告と通信ははっきり分かれた。そこで初めて広告業は、広告專
業として進歩していく土台をつくったということが言えるね。

岩永さんにしても古野さんにしても、初めは200万円で電通全部を
合併してしまうということだったけれども、通信と広告が離れるのは
しょうがないというような妥協もあっただろう。岩永さん、古野さんは
やはりAPのような組織が頭にあり、通信は組合組織で同盟通信、光永
星郎さんが頑張るなら広告部は電通へやり、その代わり新聞聯合の広告
部を25万円に評価させて、4分の1払い込みの25万円で、電通を200
万円の株式会社にして半数の株式を取得する。そうすれば電通に対する
発言権が非常に大きくなり、ある意味では新聞聯合系が通信、広告両方
とも掌握できたような形ではあった。今の電通の重役は、木村さんは別
だが、それ以外の連中は、われわれの土台に乗って重役になっていると
いうことだ。結論を出せばね。

佐々木 どうもありがとうございました。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

聯合の内信開始と10年間の活躍

浅野豊(元同盟通信京城^{京城}現ソウル^{ソウル}支局長、総務局次長)

内信開始の断下る

大正15(1926)年、若葉に風薫る5月、やがては老舗電通と火の出
るような競争を余儀なくされる宿命を負うて、日本新聞聯合社(昭和3年、
新聞聯合社と改称)は、日本の新聞通信界にさっそうと登場した。しかし
誕生したばかりの聯合は、国際通信社から引き継いだ組合8社に対する
「海外ニュース」配信の仕事と、大阪における「海外経済通信」発行の仕
事とを忠実に実行するだけであつた。このとき、最も強く内国通信開始
の必要を力説主張したのは、その年9月ロンドンから帰ってきた古野伊
之助であつた。これに対し、当時大阪にあって西部支配人だった東川嘉
一が強硬に反対を唱え、両者互いに譲らず、議は容易にまとまらなかつ
た。

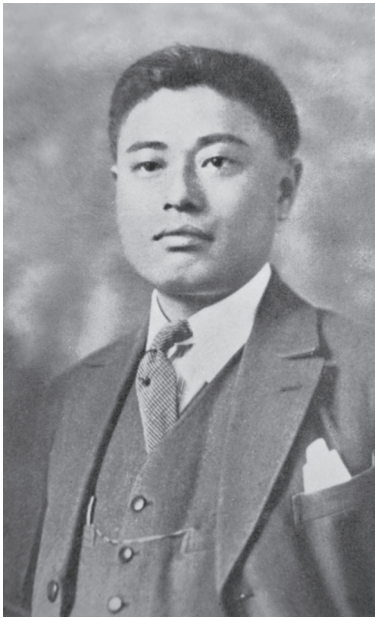
そして結局、大正15年11月、専務理事岩永裕吉の裁断が下り、ようや
く内国通信開始の運びとなつたのである。この間のいきさつについては
『通信社史』の「国内通信開始とその意義」に詳しく記されてあるから、
ここでは省略するが、内信を始める段になって、まずぶつかった難関は
取材網の整備ということであつた。さらに第2の問題はこれに要する経
費をいかにして捻出するかであつた。もともと聯合は、国際通信以来、
海外通信事業を目的として結成されたものであるだけに、外電輸入の仕
事はお家芸であるから、すべての点で整備されていたが、新しく内信を
始めるとなると、そのために内信関係の新しい陣容を必要とした。また

それに要する経費についても、聯合は新聞組合による非営利、実費分担主義を建前として成立しているのであるから、組合8社の了解なしに勝手に内信を始めるというわけにもいかなかった。

一方、組合8社はいずれも当時、日本における代表的な新聞であったから国内通信網も整備していたので、国内ニュースに関する限り何ら聯合に頼る必要はなかったのである。そこで、まず東京における諸官庁の発表物、いわゆる「玄関ダネ」を8社のために収集し、これを同時に配信する仕事を始めることとし、8社はこれに要する経費として、各社それぞれ月額300円を分担することになった。

これは各官庁で新聞記事資料の発表があると、各社の出先記者に代わって聯合が引き受け、同時に各社に配信する仕組みで、昭和2年5月1日、聯合社内にローカル・ニュース部を設け、その日からこの仕事を開始した。これが聯合の内信活動の第一歩である。

各官庁の発表物の同時配信を始めてみると、いろいろな不満な点や不備な点が出てきて、どうしても、もっと充実した陣容で本格的な内国通信をやる必要に迫られてきた。そこで昭和2年9月、社内の職制改革を



徳光衣城

断行して、通信部を外国通信部と内国通信部の二つに分け、東方通信社当時、北京支社長だった徳光衣城を内国通信部長に任命した。徳光は生え抜きの新聞人で、取材面における豊富な経験を思う存分活用して、着任早々、内国通信部の陣容の充実と整備とに没頭し、翌3年初頭には一応の陣容を整備した。そして1月1日から「内信」を加盟各社に通信し始めたのである。

その頃、帝国通信社は経営不振の一端をたどり、地方新聞に対する通信供給も意のごとくならない状態だったので、これまで国内ニュースの供給を帝通に依存していた地方の各新聞社は、こぞって聯合に加入を申し込み、同時に聯合の内信強化を強く要望した。

これに刺激されて聯合は3年6月、この機構を改め、内国通信部を内信局に拡大し、徳光衣城が局長になり、その下に整理部、政治部、社会部、地方部、経済部、運動部、写真部を置き、それぞれ部長を任命し、本格的に政治、経済、社会、運動、写真各部門のニュースを取材して加盟各社に供給することになった。

声価を上げた御大典報道

聯合の内信がその声価を一段と上げ、地方新聞の絶大なる信用を博するに至ったのは、3年11月に京都で行われた昭和御大典ごたいでんの報道であった。民主憲法の今日の社会からみれば、正気の沙汰とは思われないことであるが、明治憲法治下の皇室中心思想の国家体制では、天皇の御即位式ということは、やはり国を挙げての大礼であった。時はあたかも日本の国力の最もとも充実した秋とぎであり、締盟各国からは特別の使臣を派遣して、この盛儀に列するということがあったから、全国の新聞社並びに通信社は、こぞってこの報道に万全を期し全力を尽くすことになった。

そこで聯合でも京都日日新聞社内に臨時出張所を設けることになり、大川幸之助、浜州一らが先行して予約電話や宿舍の設営に当たり、11月になると徳光内信局長以下36名の社員を出張させて、記事に、写真に、その通信連絡によらず遺漏なき報道態勢を取った。その頃、帝国通信社はもはや完全に没落して問題でなかったが、電通はドイツのシーメンス社から輸入した写真電送の設備を既に有し、その上に飛行機2機を動員して写真原稿の輸送を行うという張り切り方であった。聯合も対抗上、飛行機をチャーターして写真原稿の空輸を行う一方、通信連絡のため、吹き込みに、速記に精鋭をすくってそれぞれの部署に配置して全力を傾倒した。

ところが電通の飛行機は2機とも墜落して犠牲者を出すという気の毒な事態となり、御大典ニュースの報道は新鋭聯合をして名をなさしめる結果になった。しかしこの報道戦に要した聯合の経費は予想外にかさんだらしく、伝記『岩永裕吉君』（1941年、岩永裕吉君伝記編纂委員会）には「御大典（京都に於ける）には内信局は立派な活動をして各社を満足させたが、その経費は予算をはるかに超過し、ニュース競争の高価なることを証すると共に、聯合の財政に一大警告を与えたのは当然であった。しかも社の実力はこれによって躍進した」と記されてある。

ツェッペリンでの大活躍

4年に聯合内信が一番大掛かりな取材活動を行ったのは、エッケナー博士を船長とするドイツの飛行船ツェッペリン伯号が世界一周飛行の途次、霞ヶ浦に飛来した時だった。この飛行はニューヨークを振り出しに大西洋を横断して故国ドイツのコンスタンツ湖畔の基地フリードリヒスハーフェンにいったん着陸し、8月15日、わが海軍の藤吉（直四郎）中佐、

朝日、毎日両社の記者を便乗させて、そこを飛び立ち、シベリアの上空を飛んで19日、霞ヶ浦に安着、99時間40分の世界新記録を作った。23日、霞ヶ浦を出発し太平洋を一気に横断して26日、ロサンゼルスに着陸、さらに米大陸を横断して出発点のニューヨークに飛んだもので、これが見事成功するか否かは、実に国際的な大ニュースだったのである。

地方部長の大賀知周を総帥として十余名の社員が霞ヶ浦に出張して取材活動に当たった。当時内信局長を兼ねていた古野（伊之助）外信局長は、ツェッペリン伯号の霞ヶ浦出発の日には、自ら出向いて社員を激励するという張り切り方であった。当時の状況を大賀知周は「新聞聯合社報」（4年9月号）に次のように書いている。

8月2日、霞ヶ浦航空隊付近の地理に詳しい浅野が出張して、まず下準備にとりかかった。通信本部を設定することが眼目であり、特に電話の不便な同地方でこれが一番な大事なことだった。幸いにも航空隊本部に近く、大飛行場も一望に見渡し得る最も景勝の場所、丸山医院を通信本部として借り受けることが出来た。このいわゆる地の利を得たことが、やがては今回の通信戦に成功した大きな原因となったのである。

（中略）

ツェッペリン伯号は15日ドイツを飛出したとの報に、17日浅野、隠岐、藤本が霞ヶ浦に先発して前景気を通信しはじめた。18日特派員全員出動、阿見^{あみ}の宿舍で最後の打ち合わせ会を開き、明日の手配や取材の分担をきめた。あくれば19日、ツェッペリン伯号飛来の日だ。午前7時には全員飛行場に出動、航空隊本部へは重松、隠岐、通信本部の丸山医院には大賀、近藤、荒川沖駅には岩崎、その他は全員飛行場でそれぞれの部署についた。

いよいよ空の怪物到来！ はるか雲間に巨体を出現、飛行場の上空を通過、帝都訪問、再び出現、ロープは投げられた。遂に着陸、あ何とめまぐるしくあったことよ！ 砂塵と、汗と、灼熱と、その中を記者は隼の^{はやぶさ}ように八方に乱れ飛んだ。スケッチに、インタービューに、伝令に、聯合スピリットは遺憾なく發揮され、すべては一条^{みだ}紊れず、その任務は遂行された。午後11時^{せんとん}戦塵ようやくおさまって全員宿舎に引き上げ、晩飯にありついたのは午前零時をすでに過ぎていた。

(中略)

第3日目は全員再び出動。この日は徹夜して翌朝4時のツエ伯号出発を送るというので一同さらに緊張を覚えた。「月下に語るエッケナー最後の言葉」をはじめ特ダネものが続出した。ところがツエ伯号はいよいよ出発となって大格納庫から引き出される時、不幸にも機体を破損したために出発は一時延期され、張り切っていた全員を失望させたが、出発延期の第一報は浅野が奇声を上げて通信本部に駆けつけ速報して各社をアツと言わせた。破損の原因、その程度、海相の責任談、修理の予測、エッケナー博士の談話、出発期の予想等の記事が続々と速報された。酷暑の折柄ではあり、全く徹夜の活動だけに、肉体は綿の如く疲れたが、心はいよいよ興奮しますます緊張した。

(中略)

ついに最後の日は来た。23日午後3時いよいよ出発との発表は本部の重松から逸早く速報された。われらの心はにわかに緊張し、それぞれの部署につき、水ももらさぬ速報体形を整えた。やがて予定の午後3時、怪物はゆるぎはじめた。3時9分全く格納庫外に引き出された。3時13分離陸出発、隠岐と岩崎が飛んだ。電話

口まで一瞬。しかも電話はこの快報を本社へ通ずべく、すでに連絡されてあったのだ。何たる幸運であろう。われらは相抱いて今日の成功を喜んだ。そこへ飛行場からの確報が来る。小林、浅野の本記や雑観が来る。エッケナー博士の「お別れのメッセージ」が来る。関係者の感想その他も集まってすべてが終わったのは午後5時だった。

(中略)

神戸^{うしん78}又新、九州日報その他から早速今回の通信戦にたいし丁重な感謝の辞が寄せられた。加盟各社がその競争紙を圧して常にリードしたということ、それだけでも我等はうれしいのだ。しかも海外に飛んだ電報はことごとく他社の通信より10分以上速かったとのこと。すなわち全世界に拡がった第一報は我等の手で創められたものであると思うときさらに喜びを深くするのである。

こうした涙ぐましい努力によって聯合の内信は日一日と成長し、各新聞社の信頼の度を高めたのである。かくのごとく3年から4年にかけては、聯合の内信がようやくその緒に就いたばかりであったが、それまで内信整備の中心だった徳光衣城が、伊達源一郎に殉じて4年3月末に退社するという事態が起こった。そして内信局長は古野外信局長の兼務となった。

そこで聯合の内信は再び逆戻りして縮小されるのではないかとの疑心暗鬼から、一時ではあるが内信局内の人心の動揺は覆うべくもなかった。そこへ聯合を退社した徳光が大阪毎日^{毎日}に社会部長として迎えられたので、徳光は聯合時代、手塩にかけた社員を大毎へ引き抜こうとしたりして、ますます動揺を大きくした。

結局、最後には古野伊之助と徳光衣城の二者会談が行われ、二、三の

社員を除き、聯合からの社員引き抜きはしないことになった。また「聯合の内信はますます拡大強化こそすれ、縮小するがごときことは断じてない」という古野局長の言明で事態はようやく平静に帰したのであった。

年とともに躍進

かくて4年を送り、5年を迎え、聯合の内信は3歳の春を迎えた。この年、浜口雄幸^{おさち}内閣は1月11日、懸案の金輸出解禁を断行、21日には衆議院を解散した。2月20日の総選挙では与党民政党が大勝したが、11月14日、浜口首相が東京駅で狙撃され瀕死の重傷を負うという珍事が突発した。

重大ニュースが起こるごとに聯合の内信はいよいよその実力を発揮し、加盟各新聞社の称賛と信頼を博した。当時の社報を見ると、衆議院解散時は、小樽新聞、信濃毎日、富山日報、静岡民友、京都日日、高知新聞、鹿児島新聞などから感謝の辞が寄せられたことが書いてあり、また浜口首相遭難の際の写真は、特ダネ写真として群を抜いて光り、各社夕刊はこぞってこれを掲載した。この写真は負傷した浜口首相が側近の人々に抱きかかえられてプラットホームから階段を下りるところで、苦痛を堪える浜口首相のゆがんだ顔がまともに写し出され、印象深いものであった。

6年はさらに重大ニュースが続出した年であった。それだけに聯合内信の活動もまた目覚ましいものがあつた。聯合の内信はよくその任務を遂行し、正確なるニュースを迅速に報道することに努力した。朝鮮総督、同政務總監の更迭のニュースは断然他社を圧し、あまりにも鮮やかな聯合の快勝ぶりとして「お話以上の大成功」と全国の新聞社から感謝電が山積みしたと、当時の社報に記されている。

また、満州事変（9月18日）勃発に伴う国内のニュースは内信局の全機能を挙げた活動によってよくカバーされた。当時の状況は、10月1日付社報に「満州事変の突発するや、聯合内信局は即刻非常態勢を整えた。刻々に展開してゆく事変の詳報、欧米諸国の論調、国際連盟の動向等、外信局が文字通り不眠不休でもたらす外電を照合しつつ、わが政府と軍部の態度、政界財界の意見、高潮し來たる世論の声など、関係方面を、聯合一流の巧緻なチームワークで見事にカバーし、各部は渾然一体、不休の努力をつづけた」と記されてある。

満州事変勃発とともに時を移さず、内信局から萩野伊八、相山政司、阿部孫一らが21日、東京から現地に特派され、続いて佐々木健児、升井^{ますい}芳平、森元治郎^{もとじろう}、鈴木茂（写真）らも特派され、この事変を契機として、聯合がかねて研究に研究を続けて完成したポータブル無電機をニュース連絡に使用し、その威力を発揮したことは特筆すべきことであつた。

なおこの6年、聯合内信局は従来の政治、経済、社会、整理、運動、地方の各部のほか、学芸、演芸の両部を6月16日、特信部を7月10日に新設し、一般ニュースのサービスのほかにフィーチャーサービスにまで手を広げるようになった。また12月1日から広告聯合社を合併して新たに広告部を設け、広告代理業の業務をも開始した。この躍進的發展と社業の充実とをみたことについて岩永裕吉専務理事は12月15日号の社報に「昭和6年を送る」と題して以下のように述懐している。

回顧すると昭和6年は新聞聯合社にとり、否日本にとって誠に多事多端^{たじまたん}な年であつた。今夏6月米国のモラトリアム案声明に続く^{つづ}独逸の経済的危機、英国の金本位制離脱等の世界経済界の動揺、9月に入つてよりの満州事変、これに関連する国際聯盟理事会、政変、金輸出再禁止等幾多の重要問題が重疊^{ちようじよう}し、これに伴い新聞

編集方面は前例を見ないほどの多忙をきわめた年であった。

新聞聯合社は、これら繁忙の間に処して、新潟支局の開設、各
部局の業務の拡大、広告部の新設などを着々として実行し、今春
4月建設に着手した新社屋の工事も順調に進捗し、近く移転をみ
んとしつつある。一般の不況に伴い、日本の新聞界は一樣に困難
に遭遇し、ことに聯合は東川経済局長を去る11月に失う不幸も
あったが、挙社一致、よくこれらに打ち勝った。今にして過去1
年を振り返ると、聯合の躍進と、その業績の偉大さは驚嘆に値する
ものがある。今年5月はあたかも新聞聯合社の創立5周年に相当
した。この5箇年の短日月に聯合は孜々として勉め、年々歳々、
目覚しい躍進を続けた。その躍進振りは日本の通信界空前の事に
属し、事業の広範な点において、はたまた国家社会に対する貢献
において、信用の絶大なる点において、創立当初に比して誠に隔
世の感がある。

殊に今回の満州事変の突発以来、聯合社員は「国家報恩の時至
れり」と、不眠不休、よく協力して報道の大任に当たり、日本の
立場を海外に闡明することに努めて来た。

聯合社の前身たる国際通信以来過去20年。たゆみなき努力に
よって獲得した世界通信界における新聞聯合社の牢固不拔の信用
と地位とは、聯合を通じて、日本が全世界に語らんとするところ
を常に率直に受け入れしめた。英米はいうまでもなく、彼の
仏蘭西の新聞においても、聯合ニュースの大なる掲載率をみたこ
とは、吾人が日本のナショナル・ニュース・エージェンシーとし
て、国家重要な使命を完了しつつあることを証明するもので、国
家報恩の万分の一を果たし得たものとして、吾人は、その間の尽
されぬ辛惨を慰め且ついささか誇りとする処である。

誠に当時の聯合内信局は旺盛な發育を遂げ、常に目覚ましい活躍を続
けていた。

特ダネに明けた昭和7年

7年の新年早々、聯合の内信は大きなスクープを続けざまに二つ加盟
各新聞社に送った。その一つは天龍一派の大本相撲協会脱退のニュー
ス、他の一つは桜田門事件のニュースであった。

聯合内信局は12月末、既に天龍を中心とする出羽海一門の西方力士30
名余りが、角道革新のため決起すべく極秘のうちに計画を進めているこ
とを知り、隠微のうちに天龍その他と会見し、その計画の内容を確かめ、
相撲協会に対する10項目から成る要求書まで入手し、春場所新番付の発
表された翌日、すなわち1月6日正午すぎ、新大関武蔵山をはじめ西方
力士32名が、京浜（現京浜東北）線大井町駅前の春秋園に立てこもると同
時に、この大記事を各社に速報した。

この日、西方力士一同は場所前の稽古を早目に切り上げ昼飯を食べ、
三々五々、何食わぬ顔で出羽海部屋を出て春秋園に向かったのであるが、
最後まで残った天龍は、容易にみこしを上げない出羽ヶ嶽をようやく促
して連れ出し、通り掛かった円タクに乗って両国橋を渡り、春秋園に駆
け付けたのだった。

これを見送った筆者は、早速公衆電話に飛び込んで本社に電話し、か
ねて準備しておいた原稿を同報電話で速報したわけであるが、この
ニュースが各社に伝わると、とそ気分のまだ十分抜け切らぬ各社社会部
は青天の霹靂以上の驚きでたちまち大混乱となった。折から各社とも市
内版夕刊の締め切り間際であったため、内信に関する限り通信ダネをそ
のまま自社の新聞に掲載することを見識なりとしていた東京市内の大



待遇改善を要求して立てこもった力士たち。右端が天龍=1932(昭和7)年1月7日、東京・大井町の料理店「春秋園」

新聞も、これを書き直している暇がなく、各社とも聯合の通信記事をそのまま掲載するよりほかはなかった。

朝日新聞社会部のごときは、わざわざ聯合本社に電話をかけてきて「今、天龍以下が春秋園に立てこもったという通信をもらったが間違いないか」と念を押してきたほどだった。そこで「間違いない、疑われるなら春秋園へ行ってみれば分かる」と答えると「いや春秋園へも記者を飛ばしたが、夕刊締め切りまでに時間がない。あの記事について聯合は責任を負うか」と言うので「もちろん全責任を負いますよ」といったやり取りのあったことを、筆者は今なお記憶している。

第2の特ダネは相撲特ダネの翌々日の1月8日、天皇陛下が代々木練兵場における陸軍始観兵式から還幸の途中、桜田門外警視庁前に差し掛かったとき、朝鮮人李奉昌が御料車めがけて爆弾を投げつけたニュースで、当時警視庁詰の記者がたまたま鹵簿の通過を拝観すべく警視庁前の広場に立っていたので、これを目撃すると同時に第一報を送ったものであった。

犬養(毅)内閣は、この事件の責任を負って即日辞表を取りまとめて奉ったが、その議に及ばずとのありがたき優詔を拝して留任し、1月21日、議会休会明けの日に衆議院を解散し、2月20日に第18回総選挙の結果、議会上空前の大勝を博したのであった。これより先の1月28日には(第1次)上海事変が起り、前蔵相井上準之助が血盟団の小沼正のために射殺され、三井合名の理事長団琢磨が同じく血盟団の菱沼五郎に射殺される事件が相次いで起こった。

血なまぐさい事件が次々に起こり、人心極度に不安と焦燥にかられていると、5月14日、映画の喜劇俳優チャールズ・チャプリンがやって来た。その時の日本の歓迎振りはこれまた狂気の沙汰で、東京の各新聞とも翌日付朝刊で東京駅着の模様を大々的に書き立て、東京朝日ですら

社会面のほとんど全面を費やして報道した。

ところがその日夕方には日本歴史空前の事件ともいべき五・一五事件が突発したのである。ちょうど日曜日だったので聯合では内信部員の非常招集を行い徹夜で大活動を続行した。明くる8年の5月17日には事件の全貌が発表され、記事解禁と同時に使用するための予報原稿は200枚に達する大量なものであった。

非常時の掛け声とともに時は流れて9年を迎えた。この年は人災、天災こもごも至るといふ近來まれな凶年であった。その頃の聯合は既に国内通信網も完備し、国内のどこでどんな事件が起こっても、即刻これをキャッチし報道し得る態勢にあった。

わが国ニュースの最重要の中核である東京では、主なニュース源である各官庁をはじめ、各種団体、大会社、銀行その他に、それぞれ専門の記者を配置して、本社と出先との間には専用の直通電話線を持ち、時々刻々ニュースを本社に送り、本社はまた同報電話あるいは専用直通電話で組合各新聞社に間断なく速報する設備ができていた。また地方で起こった事件は全国主要都市50カ所余りに支社支局あるいは通信員があり、地元組合新聞社の協力を得て事件発生後数分の間に東京本社に通報する仕組みになっていた。そして東京―神戸間の専用電話線は2回線に増設され、さらに大阪―福岡間に専用電話線が新たに増設された。

10年は新聞聯合社が社団法人同盟通信社に合流するため発展的解消を遂げた記念すべき年である。この年11月7日、社団法人同盟通信社設立の認可があり、新聞聯合社は全機能を挙げて新通信社に合流することになったので、12月31日に解散した。

聯合内信局も新通信社の編集局に移り、気を新たにしてお活動を開始することになった。思えば昭和2年5月、ローカル・ニュース部に始まった新聞聯合の内信は、約10年の間に発展に発展を重ね、解散当時の内信

局員は109名に達し、2年の内国通信部開設当時の部員36名に比べると約3倍に当たり、誠に隔世の感がある。

しかし聯合10年の発展の跡を顧みるとき、必ずしも坦々たる大道をバックカードに乗って飛ばすようなものではなかった。昭和初期の世界的不況時代に直面し、さらに満州事変の勃発などで経費はかさむ一方であり、定期昇給すら満足に行われないこともあった。ことに7、8年ごろには益暮れのボーナスを支給する方途もつかず、餅代と称する金一封を支給して、その場をしのぎ悪戦苦闘を続けたこともあった。その頃を追懐して「聯合の冷飯時代」という言葉が今なお語り草に残っているほどである。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下で」）

商業通信と聯合は相互共助

岡本輝磨^{てるま}（元商業通信広島支局、元同盟通信）

昭和3（1928）年4月、株式会社商業通信社広島支局に入社、昭和58年6月、株式会社共同通信社を辞めましたので、同盟通信社勤務を含めての通信社生活は55年と3カ月。商業通信社からスタートし、日本商業通信社（同盟の姉妹機関・子会社）、同盟通信社、共同通信社、KK共同という道を歩み、現在生き残っているものは、私の知る限りでは数少ないと思いますので、昭和初年の通信社像を中心に書きます。

昭和初期の日本の経済界は東京、大阪を軸とした各地の株式、米穀、

生糸、綿糸、綿花、砂糖その他の商品取引所の値動きに従って大きく動いていました。

3年ごろの通信社は、新聞聯合社と商業通信社が主流でした。新聞聯合は主として世界や日本のニュースを各新聞社に流し、商業通信は全国の各種取引所に通信網を持ち、取引所と放送局（NHK）に刻々の市況を提供するほか、地方の新聞社にも経済市況を流していました。この二つの通信社は対立、抗争していたのではなく、『通信社史』の「国内経済通信の開始」〔326頁〕の項に「聯合は昭和四年七月、国内通信網の完成を機会に、『国内経済通信』事業も始めることになり、その方面の専門通信社である株式会社・商業通信社と相互共助の関係を結んだ」と書かれているように、業務上密接な関連を持っていました。

この時代の通信業務は短時間の、しかも限られた時間内に大量の各種経済相場とニュースを送受信するため、担当者は速記その他の特殊能力が必要とされていきました。広島でもこの相互共助の精神にのっとり、聯合の担当者が急病などやむを得ない事情で欠勤した場合などには、聯合側の要請でピンチヒッターとして駆け付け、急場をしのいだこともしばしばありました。その頃の通信社の電話による送受信はものすごいスピードで行われ、その権威者は「秒読みの○○」または「受けの××」と雷名をとどろかせ、通信マンを震え上がらせると同時に憧れの的にもなっていました。

昭和12年、同盟は経済通信の必要から子会社通信社の創設を企画、商業通信を吸収合併して「株式会社日本商業通信社」を設立、7月1日から業務を開始しました。これで経済通信は、同盟が独占的地歩を確立しました。

〔新聞通信調査会報〕第307号 1988年6月1日発行

五・一五事件首謀者の留守宅取材

長谷川峻（たかし）元新聞聯合外信部、大阪支社、福岡支局

農村は不況で娘は売る、失業、五・一五事件、満州事変と続く昭和7（1932）年、早大専門部卒業の私は、九州日報（社主：中野正剛）が新聞聯合の加盟社なので、支配人古野伊之助に頼んで「委託生」にしてもらった。いずれ採用するが、無給で外信部に配属。部長福岡誠一、次長結束武二郎、長谷川才次、安保長春等の陣容。戦火は満州、華北だから、外電で電通に負けられないと大張り切り。委託生もローマ字電報を訳したり、スケルトン³と取り組んだりして大汗をかく始末。

岩永裕吉（専務理事）と古野は満州事変中の日本で、海軍と陸軍が電通と聯合をそれぞれひいきにする格好になって、外国に電報を打つようでは国益にならないからとて、通信社の合同を熱心に各方面に説いていたが、電通は世帯も大きく資本内容もよいから、「聯合、何を小しやくな」と容易なことではない。同盟になったのは後のことである。

古野さんは昼食のとき、僕のような無給の者まで、近くの食堂に誘って25銭の弁当を、ともにつくくこともあって、陪席の立派な紳士を「上海支局長の松本重治君だ」と紹介してくれて、あとは上海を中心とする外国通信社の活躍ぶりに耳を傾けていた。

日本の新聞各社は、外電に関しては、外国の通信社のいいカモで、その契約料は秘密にする屈辱が続いている。こちらも一本化して外国と対抗するという夢があるから、「APが…」、「UPが…」、「ロイターが…」と話は大きい。

「あそこには山口巖^{いわお}がいるから、しっかりやれ」と激励の後、「月給取

りは借金しては駄目だ。借金に追いまくられて仕事ができなくなるからな」と注意もされて、支配人から餞別をもらった。

大阪支社（支社長・塚本義隆）新聞部は山口部長の下に藤川佐吉、板垣武男、猪伏清、三浦良知、神坂鶴太、外経には岩本清（後に共同通信専務理事）、庶務には豊田治助がいた。新米は徹底的に鍛えられる。しかも日曜日はスポーツがあるから休みなし。思い出の一つは夏の甲子園野球。ネット裏で左手に受話器を持って実況放送そのままに吹き込み、右手はスコアを付けるのが1週間続くから難業だ。ちょうど、ロサンゼルス・オリンピック（1932年）が開会中で、試合の合間に、1000自由形の宮崎康二君優勝、1500自由形北村久寿雄君優勝と、次々にアナウンスされたときの観衆と記者席の熱狂は忘れられない。

昭和8年4月、選抜野球を取っているとき、「すぐ社に戻れ」の命令。それより前に、山口部長が福岡支局長に就任していたので、「九州は人氣の荒いところ、お前は中野（正剛）の家にいて、福岡の地名も人も知っているから行け」と言われて、やっと大阪の安く、うまい屋台の食べ物のお味も知ったところで惜しいが仕方がない。間借りの部屋から布団を担ぎ出して梅田駅をたった。

博多駅着8年4月3日、神武天皇祭。九州日報主筆の清水芳太郎は、題字の上に、いち早く日の丸の色刷りを採用していた。聯合支局は「九日（九州日報）」の一隅に速記を含めて少人数でいたが、早速、事件にぶつかる。五・一五事件の記事解禁が1年ぶりに行われるのに、書き原稿が少しもない。九州の社会部ダネは「九日」から提供を受けることになっていたが、清水主筆は非常時に、市井の人殺しや強盗の記事などは認めない方針だから、犬養毅首相を白昼、首相官邸で「問答無用」と射殺した五・一五事件の三上卓、黒岩勇、古賀清志、中村義雄君らの首謀者が佐賀を中心として九州が多いのに、解禁までの1年間の家族の記事

がないのだ。早速、手当てしなければと、三上、黒岩らの留守宅を二度も三度も訪ねて集めた原稿と写真を片っ端から送稿した。

さて記事解禁日、支局長以下みんなで各紙をめくる。聯合の記事をどれだけ使っているかだ。ここが通信社のスリル。どうだ。朝日、毎日をはじめ地方紙も福岡の原稿を使っている。山口支局長の鼻息は荒い。東京の社会部からも褒められたが、博多の繁華街にあった「千里十里」という大衆食堂で、ごちそうしてくれた。

そのうちに聯合支局が「九日」の編集局をカバーすることになって、山口編集局長生誕、私もその一員となったが、古野支配人が来福されて、巖さんと私を福岡ビルのレストランに呼んで「自分は東京で電通合併まで頑張るから、長谷川君も『九日』をよくして、福岡日日を合併するんだね。そうしたら君はロンドン支局長だよ」とおだてられた。数日して下宿屋に退職金2000円の書留が届いた。生まれて初めての小切手で、月給45円で一年半の在社だから破格だと思い、そのまま8年間、福岡で暮らした。

（新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行）

経済通信20年と思い出の人々

稲本国雄（元新聞聯合外経部長、元同盟通信大阪支社長）

国際通信社末期の大正12（1923）年に入社し、昭和31年に共同通信社を辞めるまで前後34年の通信社生活を通じて、僕にとって一番思い出

の深いのは、聯合、同盟にまたがる20年の経済通信時代である。

入社当時、経済通信の本拠は大阪であり、神戸支局から転じたのは大正15（昭和元）年だった。その頃、大阪には東川嘉一支社長をはじめとして編集には塚本義隆、秋山操、連絡部には高橋勇、鷹嘴寿、升井芳平、少し遅れて古野清一郎、上野伊三郎、調査部には植松尚男、岩本清、塩見恒明、少し遅れて高岩吉、高間俊一といった諸君が頑張っていた。場所には北浜からずっと西へ寄った大川町の角の小さな3階建てビルの2、3階で、1階には「とり由」という煮売屋があり、いい匂いが3階まで上がって来たものである。

東川氏は経済通信（原注：当時は外国主要市場の相場、商況、経済ニュースの速報サービス）の創始者であり育成者であるが、体軀は誠にせん弱、風采堂々とは申しかね、友人の間では「燃え残りのろうそく」とあだ名されていた。それだけに身だしなみのよさは大変なもので、常に最新流行の洋服を着こなし、一分のスキもない伊達者だった。一分のスキもないのは頭脳の方でも、犀利明敏、カミソリのような切れ味があり、おのずから人を威服するものがあつた。編集や調査の若い連中が今日は留守だと



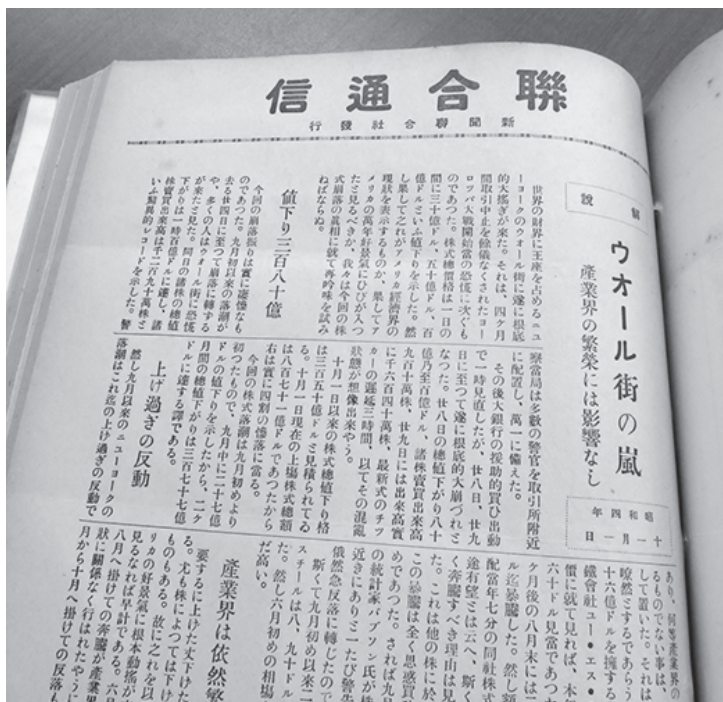
東川嘉一

いうので、アミダくじなどで油を売っていると、いつの間にか部屋の入りに口を黙って立っている。吵せざる一眼の炯炯たる残燭などの騒ぎではなく、一同縮み上がったものだ。

ちょうどこの頃はイギリスのゼネスト、金本位制離脱、ニューヨークの株式暴落と世界の経済界もようやく動乱期に入り、経済通信も繁況を加えるとともに、東川氏の仕事への情熱も最高潮に達した頃で、これに引きずられて、われわれもまた大いに働かされたものである。なにしろ早朝7時ごろには世界各地から相場の数字が入り、これのチェックと商況の翻訳校閲、これが済むと経済ニュースの翻訳、編集、それから英文通信のための電文エクステンション。次は赤紙の解説の執筆、調査資料の閲読となる。

この解説というのは経済通信読者へのサービスとして経済時事問題を取り上げて時々解説するだけだったが、塚本氏のドイツ派遣を後援する会ができてからは会員に配布するため日刊の通信となり、われわれは大変なことになった。何しろ午前中にルーティンを終わり、その日の外電の中から大きなタネを選んで200字詰め原稿用紙最低20枚は書き、印刷屋へ回し、校正をとり、その日の夕方に発送するというのだから、ウツカリすると昼メシも食えぬこともあつた。それに月に1回くらい割でパンフレットを出したり、しまいには、膨大な「綿業年鑑」の編集までやらされたのだから、相当グロッキーだった。

編集部にはその後、衣奈多喜夫、豊田治助その他の新進も加わり、調査部の人たちも、もちろん手伝ってくれたが、直接の責任は僕や秋山君にかかってきたから辛かった。しかし秋山君の重厚誠実な仕事ぶりは誠に敬服に値するものがあつた。東川氏は冷徹の人。仕事も切れたが、人も「コイツ使える」と思うと、トコトンまで使い切る人だった。言葉は丁寧だが、命令は貫かずにはおかぬ厳しさがあつた。こちら音も上げ



新聞聯合の経済解説(紙はピンク色) = 1929 (昭和4) 年11月1日付

るのはシヤクだから、徹夜してでもやる。
こんな一種の競り合いの毎日だったが、月給も割合大幅に上げてくれた。何円何十銭刻みの時に1期10円というのは当時としては破格だったらしい。昭和6年東川氏逝去。入院の前に「仕事のことは君がいるので安心してゐる。頼むよ」と言われた。こんな言葉をいただいたのは最初にして最後だった。合掌。

次の支社長は塚本氏。合理化全盛のドイツから帰りがたのホヤホヤだったから、経営も人使いも誠に「合理的」だった。編集部にも従来の

人の他に殿木圭一、池上幹徳、寺西五郎、小寺巖、滝口義敏といった俊英が入り、またある者は海外特派員として出て行った。仕事の方もアメリカのニューデイル華やかなりし時代で忙しかったが、また充実した時期でもあった。それに電通との競争も火花を散らす激しさだった。
しかしいつも思うことだが、外電関係にはいわゆるスクープというものは無い。入手した電報を正確迅速に翻訳し、均衡のとれた解説を加え、権威をもって伝達する。それに尽きるのである。ある年インドルの綿布関税の引き上げがあったとき、当時三品市場を回っていた剛腹な板垣武男がこう言った。「朝から市場はジワジワしていたが、聯合の赤電が一本入ると、たちまち目に見えぬサザ波のように市場全体に広がって、相場が次々に値を消していく。赤電の威力というものは実に大したものだ」。
外電を扱う者の本懐はこの一瞬にあると言えよう。
13年に経済通信を東京本社に移転⁸¹。大東亜戦争開始とともに壊滅。業別通信の創設等々書くことは山ほどあるが紙幅がない。しかし長谷川、板垣、その他同志諸君の奮闘で、かつての経済通信や解説は今や時事通信の膨大な事業として、違った形で再び花を咲かせている。懐かしい先輩、同僚、後輩の諸君はそれぞれ所を得、偉くなっておられる。慶賀それに若くものはない。

〔新聞通信調査会報〕第9号 1963年9月1日発行

一日の仕事は外電受信から

森山朝男（元新聞聯合神戸支局）

私が新聞聯合社に入社したのは昭和7（1932）年。当時、神戸支局は、神戸区（現中央区）海岸通商船ビル7階にあって、経済通信が主たる業務であった。ほかに分室として神戸新聞社内新聞部（速記係）があった。

商船ビルの方には、男子社員10人（速記兼専用線係4）、女子社員15人（邦文タイプスト5、主として電話係）、ボーイ40人などがいた。経済通信購読先も、細長い神戸を東の端から西の端まで、銀行、貿易商社、製造業、証券、商品取引所関係など約200軒があり、毎日印刷物を6便、自転車で配達していた。

一日の仕事はまず外電の受信から始まった。当時、相場と商況類は大阪支社が海外から受信していた。そこで月曜日を除いて、毎日午前6時50分になると、支社通信部が、本支社局の点呼をして、膨大な数字の固まりを、かなり速いスピードで読み上げる。送信時刻がギリギリか、少しでも遅れるようなときは、まだエレベーター係が来ていないので、商船ビルを7階まで駆け上ると手先が震えて、読むスピードについていけず、全く必死の思いだった。

この一連の数字は、一行15字ぐらいのが二、三十行でひと固まりとなっており、ヨコとタテに、それぞれ一字ずつチェック数字がついていて、この暗号の正確さを保つようにできていた。この暗号にはニユーヨーク綿花、生糸、砂糖、金物、油脂、シカゴ小麦などの商品相場と市況のほか外国為替相場、株式、公社債相場などが含まれていた。さらに相場類は、ロンドン、ボンベイ（現ムンバイ）、スラバヤ、上海方面から、

また種々の統計類が月に1、2回送られてきた。市況類は、ユニオン・コードと首っ引きで解読するのだが、ときどき相場と市況がチグハグなことがあり、コードブックの表紙に印刷されてある「ACCURACY FIRST」（正確さが第一）の文字に苦笑させられた。

これらの数字を受け終わると、すぐ英文、邦文タイプに向かい、前日から用意しておいた原紙に打ち込み、前日の相場、市況と照合点検したのち、ローラー輪転機で赤紙（原注＝聯合の通信紙がピンク色に染めてあり、得意先は「赤電」と呼んでいた）に印刷し、購読種類別に封筒に入れて第一便を発送する。この間わずか1時間、購読先が営業を開始するまでに届けなければならぬが、待ち切れない購読先からは、ジャンジャン電話がかかってくるし、まさに戦場の感があった。外電は、ほとんどが暗号に組まれており、それだけに電文の乱れには、手の打ちようがなく、さらに当時、海外からは海底電線により、国内相互は架空線（かきうせん）の専用線であったから、故障や遅滞が多く、暗号解読は並大抵ではなかった。

仕事以外にも、いろいろ苦労があった。夜間中学に通ういたずらざかりの少年が40人もいたのだから、中には配達をサボる者、7階の炊事場からバケツいっぱい水を入れて、下の自転車置き場にいる同僚にぶっかける者など。しかし昭和13年の風水害で支局が孤立した時、大きな力になってくれたり、ピクニックに行ったり、野球チームを編成して対外試合をしたことなど、楽しい若い日の思い出は尽きない。

（新聞通信調査会報「第217号 1981年1月1日発行」）

聯合・大連で経済通信

馬場書生（元新聞聯合大連支局）

日本新聞聯合社の大連支局に入社したのは昭和2（1927）年5月中旬。支局は紀伊町にあり、支局長は川島信太郎、支局員は峰鶴次、諸谷司馬夫、女子タイピスト1人、それに通信物配達が数人という小世帯であった。当時は経済通信、それも外経一本で英、米、インド、その他の外地から為替、綿花、金、銀、銅などの相場とその動きを説明する簡単な情報を、大阪支社から電報で受信し、電話で得意先へ速報するとともに、ピンク色の社名入り用紙に欧文、和文のタイプで打ったものを謄写版で印刷し発行していた。

1週間の動きをまとめた週1回の「国際週報」も出していたが、大連からは大豆、豆粕、豆油のいわゆる三品取引所から寄り付き、大引け、「歩み」とともに、週報を「ツム（新聞報）」、「ツムウナ（新聞至急報）」で送信。社名も日本が消え新聞聯合社と改名、略称「聯合」と呼称されていた。聯合の経済通信料は綿花、為替など1口100円。経済通信を購読していたのは大連駐在の三井、三菱はじめ日綿、東棉、田村駒など日本の大手商社で、香上銀行（香港上海銀行）、花旗銀行（シテイバンク）の英米外国銀行もみられた。

当時、満州は銀を貨幣単位として、すべての商取引が行われていたため、現存するかどうか知らぬが、銭荘というものがあり、銀の売買をしていた。この銭荘の大手筋も聯合の経済通信を取っては商売の指針にしていた。

昭和何年ごろであったか、経済通信だけでなく一般ニュースも扱うよ

うになり、長沢千代造、芳賀勇、大橋善次郎、小久保丈夫、宮崎司、前田圭などのオペレーターや編集人が姿を見せ、社屋も敷島広場の五品取引所の一角に変わり、終戦前に満州日報社の3階に移転、ここで終戦を迎えた。当時大学卒で初任給六、七十円が相場であったと思うが、1種類100円の通信料といえは高価なもので、それだけ権威もあった。

（新聞通信調査会報「第291号 1987年2月1日発行」）

太平洋無着陸横断飛行の報道合戦

熊谷正男（元新聞聯合青森支局）

大正の末期から約40年にわたる通信社生活のうち、今でも忘れられないのは、昭和5（1930）年から6年にかけて前後4回、現在米軍の基地になっている青森県三沢市の淋代海岸で行われた太平洋無着陸横断飛行をめぐる息詰まるような激しい報道戦である。

昭和2年にはリンドバーク大佐の大西洋単独無着陸横断、同4年にはドイツの飛行船ツェッペリン伯号の世界一周、世界の関心は残された処女コース「太平洋無着陸横断飛行」に誰が成功するかであった。その離陸基地に選ばれたのは、当時一寒村にすぎなかった三沢村淋代海岸で、世界の鳥人たちは続々この地に殺到した。

一番乗りを目指したのは昭和5年9月のブロムリー、ゲッティ両氏の「タコマ市号」、続いてトーマス、アッシュ両氏の「パシフィック号」、モイル、アーレン両氏の「クラシナ・マッチ号」と次々挑戦したが、い



初の太平洋無着陸横断に成功した「ミス・ビードル号」。燃料節約のため途中で車輪を外し、米ワシントン州ウェナッチ市の空港に胴体着陸した——ウェナッチ・バレー博物館・文化センター (Wenatchee Valley Museum and Cultural Center) 提供

ずれも失敗。4度目で成功したのはクライド・パングボーン、ヒュー・ハインドン両氏の操縦する「ミス・ビードル号」であった。

昭和6年10月4日午前7時1分、淋代海岸を離陸したミス・ビードル号は太平洋をひとまたぎして米ワシントン州ウェナッチ市の空港に無事着陸し初の太平洋無着陸横断に成功。シアトル発聯合至急報で日本全国で号外が発行された。

当時歴史的な離陸成功のニュースを速報しようと、三沢へ集まってきた各国の新聞、通信各社の報道陣はおびただしい数で、中には飛行機を持ち込んだ社もあった。私は当時新聞聯合の青森支局員として、組合社である地元の東奥日報社⁸²に全面的におんぶして、離陸と同時に全世界に向けて第一報を送る国際スクープ戦に参加したが、東奥さんの全面的な協力で他社に1回も敗れたことがなく、APから感謝電をもらったほどであった。

そのころは現在のように通信設備も整備されておらず、離陸現場から電話のある古間^{ふるまぎ}木まではハトや自動車、花火のほか、当時使用を許可されていなかった無線機を前夜ひそかに、離陸現場を見通せる松林の中へ持ち込み、八戸市の郊外で受信するなど、他社に気付かれないような作戦を練ることに苦労した。

一方、郵便局の電話回戦も少なく自由に使えなかったため、電話を独占しようと、一人が付きつ切りで申し込みカードを入れ、他社の速報を妨害する手も使われた。また現場から郵便局までの道路に丸太を並べて、他社の車の通行を邪魔したりする社もあったという。郵便局の電話のほかに国鉄の直通電話も利用したが、私は青森運輸事務所前夜から泊まり込んで、国鉄古間木駅から呼んでくる直通電話のベルが鳴ると、事務室に一つしかない市内電話に飛びついてこれを確保、支局と東奥日報を繰り返して呼び出し、他の市内連絡を封じ込める作戦を買って出て1回

も失敗したことがなかった。

ミス・ビードル号が着陸したウエナツチ市はシアトル東方にあるリングの町で、リング王国黒石市くろいしと姉妹都市になっている。かつて太平洋横断で沸いた淋代海岸は米軍の一大基地になっており、小川原湖畔に建てられた「翔翼の碑」は日米を結ぶ太平洋の懸け橋として永遠に記念するモニュメントとなっている。

〔新聞通信調査会報〕第163号 1976年7月1日発行

社会部1年生で大相撲取材

坂田二郎(元新聞聯合社会部)

僕の郷里は津軽だ。津軽といえば、例の津軽選挙⁸³。これはどうもいただけないが、自慢のタネがないわけでもない。リング、民謡、太宰治、わけでも相撲がそれである。

まだ小、中学生のころだったが、そのころ「相撲の神様」といわれた郷土出身の力士、大ノ里おののさと一行が弘前に巡業してきたときのことをおぼろげながら覚えている。大ノ里は大正14(1925)年以来、8年間も大関を張り続けた名力士だが、その彼が武蔵山や天龍と組んで、角界かくかいの宿弊打破のしの烽火のしをあげた。昭和7年1月、春場所開幕の直前のことだった。ストライキなど、一番やりそうにもないチョンマゲ連中が「ストライキ決行」の挙に出たのだから、さすがの大日本相撲協会しやうぶくけいも周章狼狽しやうしょうばい。それに劣らず、世間がビックリ仰天したのも無理からぬ話だった。

当時、新聞はこの大ノ里一派を「革新力士」と呼んで、むしろ同情的に報道したが、彼らが協会に突きつけた「協会の会計制度の確立と収支の公表」など、10カ条の要求は協会に拒否されたため、連判状に名を連ねた大ノ里以下32人の革新力士は、協会を脱退して「大日本新興力士団」の名の下に旗揚げしたのである。

その前年、満州事変が突発していることを思えば、覆うべくもない軍国主義的風潮の真ただ中であり、珍しい「反乱」事件であった。それにしても、その時の理路整然たる10カ条の要求書は、いったい誰が起草したのだろう。必ず影武者が黒幕がいるに違いない、というのが世間の憶測であった。

実は、僕が大学を卒業して、その足でジャーナリズムの世界に飛び込んだのは、この大ノ里反乱事件の翌年、つまり昭和8年の3月であった。恩師である東大新聞研究所長の小野秀雄先生が「今は小さいけど、将来必ず大通信社になるから」と勧めてくれたのが新聞聯合社という通信社であった。

先生の言葉を信じて、今は跡形もないお堀端の時事新報社の講堂で行われた入社試験をどうやらパスして、運命を託したのが、この聯合であった。デスクには今は亡き長林、大平、中滴、岡村、栗林、近藤の諸先輩がズラリ。僕は早速、社会部にたたき込まれた。その名も「遊軍」というヤツで、何でもやらされることは今もほぼ変わりあるまいが、今の遊軍は相撲を手掛けなくとも済むのではないか。

当時は相撲の専門記者がいらない。場所が始まれば、政治部の浅野豊、森元治郎もりもとじろうの両先輩が間に合わせに相撲を取材するという仕組みであった。入社して間もない夏場所を迎えると、お鉢が僕に回ってきた。有無を言わず、「相撲に行つてこい」である。

相撲知らずの「相撲記者」は、往復14銭の電券を渡されて、両国・国

技館通いをする破目となった。少年時代の記憶に残る大ノ里の姿を、既にその時の土俵に見ることはできなかったが、大ノ里ら「革新力士」の要求10力条を起草した影武者は誰であろう、わが浅野先輩と聞かされて、入社早々の駆け出しは、ただ啞然として驚くばかりであった。この浅野説は耳に聴いた話だが、恐らく真相ではなからうか。

さて、駆け出しであろうが、チンピラであろうが、一人前の相撲記者として遇してくれるのが相撲の世界である。もちろん、木戸はご免だし、親方たちの部屋に呼ばれると、必ず上座に据えられ、飛ぶ鳥落とす勢いの横綱三役連が「先生、どうぞ」といつて酒をついでくれる。つい、いい気持ちにもなったものだが、現代の相撲記者も、昔と変わらないと言えるのだろうか。

僕が相撲記者のころ、東京日日新聞（現毎日）の発行人が明大相撲部で勇名をとどろかした相馬基（もと）という相撲記者で、当時の横綱・玉錦（たまにしき）と兄弟分の盃を交わしたほどの豪者。相撲記者としても横綱格であったわけである。

僕のような相撲知らずの相撲記者でも、社のデスクは仮借しない。中入り後ともなれば「一番一番の取り口と決まり手を電話で速報しろ」というのだから、どだい無茶な話である。

当時の聯合は他社やライバル電通のように升一つ買うでもなく、砂をかぶるような土俵の一般記者席の中に放り込まれて取材しなければならなかった。しかし、これが結果的には幸いであった。なぜなら、肩を寄せ合っている他社の先輩記者に、頭を下げて「今の一番はどうしてどうなったんですか」と聞くことができたからである。他社といっても、升持ちの大新聞社ではない。ふだんはお目にかかることもない群小新聞の相撲記者で、彼らは大相撲本場所ともなれば、不思議と姿を現す。羽織にはかま、時には白足袋（たび）といういでたちが多く、一見壮士風であった。

しかし、彼らは風体ほどには硬直漢でもなく、うるさがりもせず、取り口や決まり手を教えてくれた。チンピラ相撲記者は、一語漏らさず聞き取り、知ったかぶりで電話送稿する日々であった。こんな塩梅（あじ）だから、加盟紙から「どう考えても取り口がおかしい」と突っ込まれ、冷汗（れいあせ）三斗の思いも再三にとどまらなかった。

今はどうか知らないが、その頃は大入り満員となると、協会から記者たちにも大入り袋が出される。件の壮士風の先輩記者が記者クラブの幹事として、この大入り袋をクラブ員一人一人に手渡すのだが、初めてのとき、僕は「こんなものは受け取れない」と断った。ところが、「生意気言うな。縁起物なんだ。取っておけ」と一喝（いっくわ）食わされ、恐れをなして受け取った。開けてみると、確か10銭玉一枚が貼りつけてあった。なるほど断るほどの額でもないのだ。

その夜、行きつけの銀座の寿司屋へ行って、その話をしたら、「その大入り袋、ぜひくれ。くれれば今晚の勘定はいただきます」という。進呈したら、さっそく後ろの壁に貼りつけて、「これで千客万来ですよ」とニコリ笑った。今はどうだろう。寿司の味も落ちたように、そんな情緒も薄くなってしまったように思えてならないのは、僕だけの僻見（へきけん）だろうか。

話は飛ぶけれど、今ではひと勝負ごとに「ただ今の決まり手は」と場内放送してくれる。居ながらにしてテレビ実況放送も見られる。これでは相撲記者も廃業かと、一応思われるのだが、実際はその逆であるらしい。観戦する方の目も肥えていて、専門の記者、老練な解説者がますます要求される時代に入ったようである。

思えば、電波の夜明けであったればこそ、相撲知らずの相撲記者でも通用したわけであったのであろう。

電波といえ、ラジオのスポーツ実況放送が行われたのは昭和2年8

月、全国中等学校野球大会の甲子園球場からで、52年も前の話である。その後、ラジオの野球放送は年とともに盛んになり、野球に次いで水泳が放送され、相撲の方はちょっと遅れた。

それは当時、経営難に陥っていた相撲協会が、「もし相撲の中継放送を許したら、国技館の観客はますます減るだろう」と二の足を踏んで、NHKの申し入れに応じなかったからである。しかし、6代目出羽海親方が「相撲は元来、見るものである。ラジオで面白そうな勝負を耳にすれば、相撲に関心の薄い人でも、きっと国技館に来るようになる」と主張し、ようやく中継が決まった。果たせるかな、昭和3年1月、春場所が国技館からラジオで実況中継されると、大鉄傘下の升席はたちまち超満員となった。

〔新聞通信調査会報〕第205号 1980年1月1日発行

北満鉄道の買収交渉取材

海路昌臣（うみじまさおみ）（元同盟通信ハルビン支局長）

北満の国際都市ハルビン特派員の4年間、政治・経済・社会にわたる取材活動の思い出は尽きないが、北満鉄道（北鉄、旧東支鉄道）の買収交渉に関する報道は、この案件が当時、日・満・ソ三国の外交の焦点であり、しかもハルビンは北満鉄道の理事会、管理局のお膝元で、朝、毎両紙や競争相手の電通との間で取材合戦も激烈を極めたので、ひとしお思い出が深い。

周知の通り、北満鉄道はソ・支両国の経営下にあったのが、満州国の建国で満・ソ両国の管理に移り、実質的にはソ連側の支配下に置かれていた。理事長のイスこそ満州国側の李紹庚（後に交通部大臣、駐日大使など歴任）が占めていたが、これは名目だけで、副理事長クズネツォフ、管理局長ルディの2人で牛耳っていた。

そもそも北鉄買収が日程に上ったのは①満州国の心臓部を貫走する北鉄の経営がソ連の支配下にあつては、満州国の完成は期し難い②北鉄は旧帝政ロシアが極東侵略のため建設したものが、社会主義体制下の現在でも、極東における経済的發展と赤化宣伝の強力な足場となっている③北鉄は欧亜をつなぐ国際交通の要枢を占める以上、満州国の發展のためにも買収しなければならない——という陸軍の主張に基づいたもので、強気な軍の一部では買収などは生ぬるい、実力で接収すべしなどと思いつた強硬論さえあつた。

当時のソ連としては、ヒトラーのドイツ首相就任でナチス勢力が勃興し、西方が緊張化したため、直接国境を接する満州国、ひいては日本との間の紛争のタネを一掃し、東方の平和を図りたいという国内情勢に直面していた。そこで旧帝政時代からの帝国主義的遺産を整理し、非帝国主義的立場を明らかにするとともに、いささかも収入を図るという大義名分を口実に、北鉄の手放しを決意したわけだ。

そこで買収交渉は、東京を舞台に満・ソ両国間で行い、日本側があつせんするという形で進められた。昭和8（1933）年6月26日の第1回日・満・ソ三国会談以来、折衝1年7カ月、実に40回の会談を重ねて同10年1月21日、ソ連側の大幅譲歩により一挙解決、3月14日に歴史的調印にこぎ着けた。

交渉代表は、満州国側は駐日公使^{ていしげん}丁士源、外交部次長大橋忠一。ソ連側は駐日大使ユレネフ、外務人民委員部極東部長カズロフスキー、北鉄

副理事長クズネツォフの名を並べているが、実質的には日本外務省欧米局長東郷茂徳（しげのり）とソ連側カズロフスキーとの間で折衝が続けられた。

買取価格は邦貨1億4千万円と、ソ連側従業員の退職資金3千万円。

支払い条件は、価格の3分の1は現金、3分の2は物資で支払い、支払い期間はいずれも3年間となっている。1億7千万円で

一、(イ)鉄道総延長1726キ（満州里（まんしゅうり）—綏芬河（すいぶんが）—新京間35の本線）(ロ)2544キの業務用線—2567キの電信線並びに電話、給水設備

一、鉄道に属する機関車、貨車

一、その他各種工場、森林利権、一切の財産

をガッポリ手に入れた。むろん現在の貨幣価値とは比較すべくもないが、昨今ではちょっとした企業や金持ちの脱税額、金融機関従業員の横領金でこの莫大（ばくだい）な資産を獲得したばかりか、頭痛のタネだった「赤化基地」を一掃したのだから、たしかに日滿外交の勝利といえるわけだ。裏を返せば、日ソ両国の軍事勢力の差だが、かつての日本にもこんな時代があったという事実は今やほとんど忘れられている。

さて、買取交渉に関する地元ハルビンのニュースソースは主に北鉄特弁公署で、毎週1回ないし2回の定例会見が行われた。李紹庚特弁は温容だが手堅い能吏タイプで、共同発表だけでは味のある記事は取れない。そこでわれわれは比較的大胆に発言する年配の通訳（名前は失念）を追っかけたものだ。本筋の交渉は東京なので、各社特派員はサイドニュースで腕を競った。

北鉄理事会と管理局は、邦人記者はシャットアウトだったが、東京で調印の行われた直後、理事会の解散式が催され、われわれもカメラ持参で傍聴を許され、初めて理事会内に足を踏み入れた。既に戦いは終わり、和やかな空気だったが、ソ連側首脳部の面上に漂っていた哀愁感は今も（まぶた）瞼の底に残っている。旧帝政ロシアの極東経営以来十数年の歴史に一応

ピリオドを打ったばかりでなく、買取交渉といい譲渡条件といい、ソ連側としては強い敗北感を禁じ得なかったであろう。

接収当日の3月23日には管理局でも初めてわれわれの訪問を許した。ハルビン新市街大直街のこの建物は旧帝政時代の面影をとどめる古風な建物で、ソ連体制になってもただ鉄道経営ばかりでなく、極東政策の足場として各種重要な役割を果たしていた。満ソ両国国旗の交差した光景も、消え失せた歴史の一コマというべきだろう。

その3月23日には、交通部大臣丁鑑修（ていかんしゅう）が国都新京から接収列車第1号に搭乗してハルビンに乗り込んで来た。日・満・ソ要人や関係者多数を招待する祝賀宴を主宰するため、遠藤（とやま）（柳）満州国総務庁長、阪谷（さかたに）（希二）同顧問らも同行した。お祭り気分の横溢（おついつ）したハルビンの一日だった。

ソ連側従業員の本国引き揚げ列車がハルビン駅を出発したのは、4月に入ってからだと記憶する。その1号車でルディ管理局長がハルビンを去った。ルディ局長は事実上、北鉄ソ連側の大頭目だったばかりでなく、他に重要な密使を帯びていたものと推測される。剛腹（ごうはく）をもって鳴り、日本軍の糸を引く度々の北鉄デモでは火あぶり人形にされる存在だったが、ハルビン駅頭のルディにはもはやそんな面影はなかった。列車のステッブに立った感慨深そうなるその横顔に、人情というもののは洋の東西もなく、政治体制の右も左もないことを感じたものだが、これも日本人の甘い感傷で、当人はひそかに将来の捲土重来（けんどちゅうらい）を期していたのかもしれない。

従業員の引き揚げでは、駅のプラットホームに家財道具の山が積まれた。われわれから見ると、あんなものまでもと感ずるほど細かい台所用品まで持つて行くのには驚いた。当時のソ連本国の生活状況を考慮しての措置か、スラブ民族の習性が分からないが、ハルビン生活への愛着心の反映と解しても、あながちこじつけではないだろう。当時北鉄ソ連側従業員の大半は赤大根、つまり表面は赤いが中身はエミグラント（外国

への移民と変わりにと言われたもので、満州国のお題目ではないが「安居楽業」のハルビンを去るのは泣きの涙だったかもしれない。

大連・新京間の満鉄本線は標準軌、北滿鉄道はすべて広軌だったので、大連―ハルビン間に直通列車を走らせるためには新京・ハルビン間242^キのゲージを標準軌に変更しなければならぬ。そのゲージ変更工事の実施期日は忘れたが、ある日の早朝から列車運行ダイヤにほとんど影響を与えないで、ほんの数時間の突貫工事で完成した。もちろん人海戦術で全区間を数十カ所に細分し、ワン・ツー・スリーで着工したのだが、満鉄技術陣の勝利を全世界に誇示した壮挙だった。

かくて、大連・ハルビン間にスマートな特急列車「あじあ号」がデビューした。その試乗の日、満州の広野を颯爽と疾走する「あじあ号」の車窓に寄りながら、筆者は、北滿鉄道買収の総仕上げがこの特急列車ではないだろうかと考えていた。

（新聞通信調査会報」第142号 1974年10月1日発行）

「聯絡操典」と新米速記者

葛生林之助（元同盟通信高知支局）

本棚を整理していたら「聯絡操典」という小冊子が出てきた。新聞聯合社連絡局とあるから、電通と合併して同盟通信社になる前のものである。私が同盟に速記者として入社したのは昭和15（1940）年であるが、私が持っているということは、同盟になってからも、この「聯絡操典」

がそのまま連絡局の指針になっていたのかもしれない。

連絡要員としての心得や、専用線の運用、記事の扱い方などが述べられているが、速記者に対しては「著名ノ人名地名等ヲ正確ニ記憶スルコトハ速記者ノ必須要件ニシテ常時之ガ暗記ニ努ムベシ」「速記者ハ常ニ著名人士の動静ニ留意スベシ」と列記してある点に注目したい。著名の範囲であるが、先輩の話や私の体験からいうと、各省の大臣から局長級ぐらいまでと、各県知事や幹部級代議士など政官を中心に各界のトップあたりというところであろうか。一般人でもこれぐらいの「常識」を持つた人はいたが、速記者の場合は「正確ニ記憶スルコト」となっているのが、格別に重みを感じさせたのである。

私は入社後間もなく高知支局へ転勤となったが、先輩たちの仕事ぶりを見ていて、その「常識」の広さ、深さには頭の下がる思いであった。当時、高知の相手支局は岡山。支局長は松宮寛次氏で、多忙時には支局員に代わって専用線（岡山―高知）で直接記事を読んでもくることもあった。私もこの頃、同氏の読む内務省人事異動の記事を受信したことがある。予期した通り上級職の名前は字解なし、次第に速くなる独特の読み方で立て板に水のごとく…。聞き返すとその分のロスを埋めるかのように、一段と速くなるのには参った。知っているのは大臣の名前ぐらいという新米の速記者にとって、仕事の厳しさを教えてくれたこのときのことは今もはっきりと覚えている。

（新聞通信調査会報」第338号 1991年1月1日発行）

バッグ便の中身は写真と原稿

久保田久男（元新聞聯合発送部）

昭和10（1935）年、銀座西7丁目の新聞聯合社発送部に入社。当時の発送部長は山本政常。その頃の勤務は日勤、夜勤、宿直の3交代で、バッグ係は染谷さんという人が担当していた。したがってバッグ便は、それ以前から行われていたものと思われる。

バッグ便の中身は、写真と地方加盟社に係る生原稿が主であった。要するに新聞の原稿になるものだけが特別に取り扱われ、バッグ便が急行列車で輸送される仕組みになっていた。ある時は原稿が遅れ、列車の車掌にホームで直接手渡しして発送できたというぐらい、原稿に対する駅側の気配りがうかがわれた。時代とともに編集からの持ち込み量が膨れ上がり、当初1支社¹以内程度のものが3²、多い支社では10³と増加の一途をたどり、バッグ便料金がパンク寸前になり、経理当局からお叱りをたびたび受けたことを思い出す。

（新聞通信調査会報」第287号 1986年10月1日発行）

プラットホームを走り抜け

荒尾弘（元新聞聯合青森支局長）

昭和3（1928）年4月、新聞聯合社の青森支局に勤務していた頃のことです。毎朝5時、東京から3通話、続いて仙台から2通話（当時1通話は5分間）の予約電話でニュースを聞き取り、すぐに速記を翻訳しながらガリ版を切り、早出のボーイが片っ端から印刷した。相当の量になった通信を、函館支局行きと函館新聞社行きに分けてバッグを作り、駅までは自転車、次いで当時日本一と言われた青森駅の長いプラットホームを走り抜け、出発間際の連絡船に投げ込む。午前7時半ごろだった。それが正午すぎ函館に着き、新聞社に届く。これがバッグ便というわけで、海底電話、無線、テレビ、ラジオなどという便利な通信手段がなかった頃の通信手段だった。函館支局からは小樽、札幌、旭川各支社局や新聞社に電話送信する。それが北海道での唯一のニュースとして翌朝の紙面を飾った。余談だが早出のボーイが朝寝坊をしたときなどは、以上の仕事を1人でやった記憶がある。

（新聞通信調査会報」第287号 1986年10月1日発行）

居残り仕事も度々

加藤静絵(旧姓名・三輪とめ、元新聞聯合)

日比谷図書館前の古ぼけた木造2階建ての新聞聯合社に入社した時は、タイプは藤本松子さん、島田君子(旧姓・熊沢)さん、深町愛子さんの3人だけでした。新入社員の私と、色の白いかわいい顔をした小柄の久保田愛子さんと総勢5人。通りに面した日比谷公園の見える2階の窓際で、実社会への第一歩、慣れぬ手つきで、ポツンポツンとやっております。同じ部屋に親分肌の大賀知周さんがどっかりと椅子に腰をおろし、眼鏡の奥で目を細め「いい眺めじゃな」なんて扇子をバタバタさせておられました。

初めて外信部の原稿をタイプし、美男におわした土田金雄さんのところへ、おそろおそろ差し出し(この頃はまだ整理部なるものがなかった、土田さんが校正している間に、タイプしたろう紙をくしゃくしゃに手の中に丸めてしまい、物静かな土田さんがニコニコされながら、ろう紙こそ必要なことを丁寧に説明してくださって、大変赤面したことを覚えています)。

入社後間もなく伊達源一郎さんのお宅で、忘年会が催され、仮装行列で、前田義孝さんが中国人、渡辺銚さんがこじきに扮し大喝采。先輩の藤本さんがあ的美声で「叱られて」を歌われ、アンコールまたアンコール。日頃、謹厳そのものの方々も大いに飲んで、隠し芸を披露され、大変にぎやかな集まりであったことも楽しい思い出の一つです。

發送部のボーイさんたちの演芸大会に私たちも招待され、席上古野伊之助さんがご自分の若かりし頃の苦闘を語る述べられ、ご飯の代わりに

焼き芋をかじりながら働いた話など、あの温顔に微笑をたたえ、ボーイさんたちを激励され、私も深い感銘を受けました。

内信の長林密蔵さん、外信の福岡誠一さんの原稿が読めるようになれば、タイプも一人前。私もどうやら一人前になりかけた頃、藤本さんが退社されました。同盟誕生とともに電通社屋の明るい一室におさまったときは、みんなご機嫌でしたが、忙しいのには慣れている私たちも、打てども打てども減らない原稿の山に、本当に参ってしまいました。田中正太郎さんがいろいろ心配してくださって、夕刊締め切り後30分ずつ交代で休んでよろしいとお達しを受けたときは、みんな飛び上って喜んだものでした。

家に帰って休む暇もなく、夕飯の仕度で、台所で天ぷらを揚げている真つ最中、社からの電話で呼び出し。何か事件が起きたらしい。揚げ立てを二つ三つつまんで、大急ぎで出社ということもありました。居残りも度々。福岡さんが居残り手当のあまりの少なさに驚かれ、「これではラーメン食べたら足が出る」と早速会計を説いてくださったのも、うれしいうれしい思い出。入社当時、5人だったタイプが、退社のときは昼間だけで30人以上、ともかく忙しい毎日でした。

15年間の長い通信社勤めから退いても、見る夢は社のことばかり。何か事件があると、「ああ社では今ごろ、大変だ」と殺氣立った方々の顔が浮かび、何だか落ち着きませんでした。

〔新聞通信調査会報〕第7号 1963年7月1日発行

合併契約書案文をタイプ

松尾節子(旧姓・上田、元新聞聯合タイプ部)

ある日、岩永裕吉専務理事が黒の腕章をお持ちになり、着ておられる上着の袖に、安全ピンで留めてくれとおっしゃられた。いまだ専務のお顔もまともに見たこともないほど遠い方で、不器用だった私は、ただオドオドして夢中でした。つけたと思ったら、専務は「気の利かない人は、ワイシャツの袖まで留めてしまうが、君はどうか」と言われ、パッと上着を脱がれたので、ハッとして息が止まりそうになりました。

タイプリストとしてまだつたない技術しかないとき、専務理事室に機械を持って行き、誰もいない部屋で、電通と新聞聯合の合併契約書の案文の練り直し文書を毎日打たされた。間違えた反故紙は全部焼却され、誰も入れないよう鍵もかけられるほど機密な仕事をさせていただいたこともありますが、今考えると、どんな仕事ができているのか全く汗顔の至りです。

(「新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行)

諸先輩の教訓

藤川佐吉(元同盟通信華南総局長)

かつての同盟通信が、そして今、共同通信、時事通信がある。その最大の要因は新聞聯合、同盟通信時代から伝統的に代々の社首脳部が社員教育に日頃、心を砕いてきたことだと思う。数限りない諸先輩から受けた教訓のうちのいくつかを拾ってみた。

岩永さんの教訓

聯合時代の昭和9(1934)年、大阪から転勤になって岩永裕吉専務理事の部屋へ挨拶に行ったところ、いろいろないたわりのお言葉を頂いたまではよかったが、「ただし君、仕事の上ではあくまで積極的にやれ。やり過ぎての失敗の責任は自分が負うてやるが、やるべきをやらずに失敗したときは大いに怒るよ。過ぎたるは及ばざるに如かずと習ったかもしれないが、わが社では仕事に関する限り『及ばざるは過ぎたるに劣る』だから」とのお言葉であった。あの上品な専務の口からこんな激しい言葉が出ただけに、驚きと感銘を深くした。人を見て法を説け、の意味もあつたろうが、それだけではないと思う。自分では、この専務のお言葉を通信社勤務中だけでなく、今も身に付けているつもりだが…。

古野さんの一言に救われる

同盟初期の13年3月、古野伊之助専務理事が北支から夜行列車で東京に帰られると先輩が知らせてくれた。満州へ防寒具の用意もせず赴任して間もなく発病し、あと2、3年の寿命と医師に宣告され、京大で加療のため京都に帰っていたので、早速京都駅に向いて、5分間の停車の間に、不用意からの発病をおわびしたところ、常務は「絶対に医者と言

う通りに療養せよ。もし医者が、気候風土が合わぬというなら、すぐにも内地勤務にしてもよい。くよくよしないで養生することだ。それで駄目なら死ぬまでじゃないか」と誠に淡々と、しかも懇々と話してくださった。外地勤務の出鼻をくじかれて悲観の極にあった者にとって、古野さんの言葉は蘇生の思いであった。それまで幾度か先輩友人から慰めや励ましの言葉を頂いたが、2、3年の寿命といわれた身には、どうもピンとこなかったが、古野さんの一言で恐怖も失望も消し飛んでしまったのは自分ながら不思議であった。白隠禪師や隠元和尚の一喝を現代版にすると、古野さんの言葉になるのだろうと思った。

山口さん式指導

聯合の大阪支社時代に恐れ敬っていた新聞部長山口巖^{いわお}さんが朝出社して間もなく、「オイちよっと来い」と先に立って廊下の方へ行かれるので、また何かお目玉かなあといつて行ったら、何と洗面所であった。当時としては設備のよいビルで、熱湯も出るようになっていた。そこで「じつとしておれ」と言うなり、外国製の安全かみそりで無精ひげをきれいにそってくれた。もう用事は済んだから受け持ちの部署へ急げとのことであつた。いつもはこわい部長だったが、このときばかりは涙が出るほど優しい山口さんだった。その日に出掛けて行った記者クラブで、他社の同僚から「どうした風の吹き回しか、聯合君がひげをそつとる」と言われて、山口さんの心遣いが身に染みる思いがした。以来、毎日、自分でひげをそることにした。

岡村社会部長の機転

10年7月の静岡地震のとき、聯合を知っている地元の人が速報を入れてくれた。これをみた岡村二^{にいち}社会部長は鷹嘴^{たかばし}寿連絡局長のお株を奪って、慌てて専用線に駆け付け、名古屋、大阪に震度を入念に確かめていた。大阪でも名古屋に劣らぬ激震だったことを確かめた岡村部長は、地

元からの速報にその後の災害推計を加えて地震通信第一報を各社に速報した。市内の数社がこれで号外を出したのであつた。第一報を出してしばらくは岡村部長も落ち着かぬふうだったが、通信員や特派員から次々に入る続報は第一報をはるかに上回る災害だったことはもちろんだ。とつさに地震と遠隔地の震度調査、こういう機転が利かねばならないのだと職場で教えられたのであつた。

松方さんのきちょうめん

17年4月、同盟本社から「新京（長春）支社の事務引き継ぎは新任の松方三郎・満州国通信社理事長にせよ」とのことで、支社の帳簿書類を束ねて大和ホテルの松方さんの部屋に持参した。後で一通り見るからと言うので置いて帰り、数日後、正式に引き継ぎをされると言われて行つてみて驚いた。余りにもきれいに整理区分されているのである。松方さんのきちょうめんさんに感心するとともに、自分のだらしなさを恥じた。筆者に多少でも整理整頓の習慣がついたとすれば、松方さんに無言のうちに教えられたたまものだろう。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

ご機嫌な青春―新聞聯合

大鋸^{おのがこぎ}時生^{ときお}（元新聞聯合大阪支社）

僕の人間形成は、新聞聯合大阪支社に働いた3年余の日々に方向づけられたようだ。僕の周囲にいた多くの人々、そしてその集団をリードし

た古野伊之助イヅム。それらに強い影響を受けたことは争えない。僕の
そうした青っぱかった日々を記録しなくなった。

新聞聯合が、同盟通信に昇華したのは昭和11(1936)年1月。発展
解消直前の役員および主要職員名が出ているが、大阪支社のエントリ
は次のようである。

▽支社長・塚本義隆(むらもと ぎろう)

▽庶務会計部(6)部長・伊勢田富久

▽外経部(10)部長・稲本国雄、(以下)秋山操(あきさお)、池上幹徳、殿木圭一、高
間俊一、塩見恒明ほか

▽内信部(47、囑託2)部長・塚村敏夫、(以下)板垣武男(編集主任)、柴田
機一(商況主任)、大鋸時生、前農夫、安本宣雄ほか

▽連絡部(36)部長・小林徳宝、(以下)松宮寛次(次長)、酒井正秀(速記主
任)ほか

▽電信部(9)部長・高橋勇、(以下)大富信二、高野小次郎、上野伊三
郎ほか

▽発送部(9)部長・半田義一

▽写真部(4、囑託1)部長・鈴木茂

どれもこれも懐かしい名だ。そして、皆若く、せいぜい45歳どまり。
50歳を越すなどは数えるほどしかなかった。

もっとも、僕は中之島の江商ビル6階に移ってからの後半しか知らない。
加えて物覚えが悪いときているので、思い違いもさぞ多かろうが、
まだ多くの関係者が元気でおられることだから、それぞれの反応を願
いすることとし、まず随(しか)より始めてみよう。

なにしろ若かった。恐らく思い上がった小生意気な小僧っ子だったろ
う。30歳までに部長になれなかったら新聞記者など、やめてしまうと放
言していたそうだから、われながら恥ぢずかしくなる。かくて学校を出

るとともに入った神戸新聞で、編集局長と部屋の真ん中で渡り合って追
い出された僕を拾ってくれた神戸又新日報も、ストライキに巻き込まれ
て見事にクビ。そのときの仲間の加藤重雄と反対派だった日高為政君が、
今や仲良く京都新聞の役員に収まっているから面白い。こうして浪々(ろうろう)を
かこっていたのを、神戸新聞での後輩、神坂鶴太君(かみさか かく)が、彼の新しい職場
に推挙してくれた。それが聯合の大阪支社だった。考えてみると、この
親切がなかったら、きょうの僕はなかったろう。だのに30年以上も無沙
汰でいる。

こうして昭和8年2月初め、僕は聯合の「R」をもじった社員章を襟
につけた。後年、ロータリークラブに引き込まれたとき、そのバッジを
見て聯合の岩永裕吉専務理事が熱心なロータリアンだったのに思い当
たった。そう言えば聯合のナシヨナリズムは、ロータリーのそれに通じ
るものがあった。

その初出社の日は、僕に「これからけんかはしません」と約束させた
うえ、採用を決めてくれた新聞部長の山口巖(いわお)さんの九州日報出向の日
だった。しばらくの後、長谷川峻(たかし)がその後を追って離阪したが、今や国
会の古顔大臣でいる。後任の藤川佐吉部長から、ドイツ帰りの新知識と
聞かされた塚本支社長に紹介された。「どこを持たせるの」「裁判所です」
「大丈夫なんですか」と僕の面前での大声のやり取りには、随分、鼻白
む思いをさせられた。でも、ややこしい人事関係と策略ずくめの職場を
渡り歩いた身には、こうした開放しの会話ができる空気というのが、
何とも言えぬ魅力でもあった。

こうして江商ビルに通勤し始めたが、僕の顔見知りには神坂君一人。誰
も通信社の仕事について教えてくれない。もっとも神戸新聞時代に電通
から聯合への契約交代があったし、又新日報では軟派の整理をやり、電
通ダネを日夜いじっていたのだから、アウトラインは承知していたが、

現場の仕事は新聞とはまるで違う。その辺がのみ込めない。加えて部内は満州事変の従軍帰りがいたりして、奇妙な興奮があつて余計になじめない。ままと、わが道を行つたのが、どうやら周囲を刺激したらしく、「先輩、せめて机の上に足を上げるのだけはよしなさい。皆が何かと言うから」と神坂君にたしなめられる始末。

一方、新しい担当、大阪控訴院と大阪地方裁判所には有名な司法大記者の鈴木常吉(朝日)が君臨し、その牙城を破ろうと各社が懸命に拮抗した時代。裁判所詰などやったこともなく、聯合の名刺を振り回してみたところで所詮、とうろうの斧^{おの}。焦るばかりで仕事にならない。「新入りのくせに頭が^ず高く、しかも高給」との批判が逐次、高まつたらしい。高いと言つたつて、たかが70円。何を、と思いましたが、後で聞くと大阪商大出の安本宣雄が45円、のち猪伏^{いのぶ}が強く望んで東京本社に転じたのは、大阪にいては100円にはならぬからだと本人が語っていたぐらいだから、やはり目障りだったのかもしれない。

その矢先の8年2月27日、世界漫遊中のバーナード・ショーが神戸に上陸した。世界的ニュースである。神戸ならあいつ、とばかり出張命令が出た。何となく難しそうな、しかも地味な取材だから一つ、との意地悪い空気があつた。しかし、僕は海岸回り(税関、水上署、船会社、出入港船舶の取材担当をそう呼んでいた)は、これまた無経験。英語で著名な学校は出たが、英会話はからつきし。どうやら、ここもご縁がなさそうだなあ、との考えがちらつたのだつた。

世界的文豪の初来日。今なら上陸第一步をキャッチすべく大変な騒ぎとなり、新聞・放送・通信・ニュース映画関係者など恐らく100名を超える大動員騒ぎとなろう。だがその朝、メリケン波止場に降り立ったショー翁を囲んだのは、たった7名の記者と5名のカメラマン。群集はかけらも見なかった。もっともチャプリンのときは人山を築いたから、

哲人ショーの気難しさを知っていたのかもしれない。

その7人の記者は朝日、英文毎日、神戸、又新日報、名古屋新聞、そして電通と聯合。全員、懸命だった。と言つてもインタビュウは専ら英文毎日にまかせ、あとはショー翁の発言に耳を澄ますばかりだった。何を話したか、すっかり忘れたが、ただ「日本の第一印象は」との問いに「まだ何も見えないよ」と皮肉につぶやいたのを覚えている。実は、外来客を神戸港でつかまえ、日本の第一印象を求めるお定まりのむなしさを、かねて感じていたからでもあるが。

ところで、僕の取材は大ヒットだった。日本の夕刊で電通を圧倒し海外向けも、はるかにリードした。しかも朝刊では、大阪入りで聯合が完敗したのだから余計に目立ち、僕の評価は一夜で一変した。というところ、いかにも自慢話めくが、僕が速かつたのではなく、電通が遅すぎたのだ。坊っちゃんの悠々居士^{ゆうゆうこじ}が相手だったのが幸いしたにすぎない。にもかかわらずこれを話題としたのは、実力をストレートに評価する仕事本位の聯合マンの気質に強く打たれ、「これは良い社だ。ここで一生を賭けよう」と心機一転したことを言いたかつたからである。

こうして、僕のご機嫌な青春が展開した。各部に次々と友達ができた。一番、気難しかつたのは稲本国雄部長以下、秋山操、岩本清、塩見恒明さんら大先輩のいた外経部。どうやら新聞部など眼中になかつた模様。月給も、僕らの平均より倍は高かつたらしい。でも池上幹徳、小寺巖、寺西五郎、俣野博夫(原注)インドネシア通だったが死んだ、殿木圭一ら、僕らとチヨボチヨボと思えるのもいた。支社きつての善人と思える高岩^{たかいわ}吉、高間俊一も元氣だったし、前川治の少年時代も、確かこの部だった。ただし支社の最大勢力は、やはり通信・連絡部門、写真、発送を加えると優に支社人員の6割近くを擁していたらう。その一人一人が違った個性を発揮して一騎当千を氣負っていた。今も元氣な大長老・高橋勇さ

んがいつも出勤一番手。悪遊びしての朝帰りに、よんどころなく早出してくる悪童どもは、ギョロリとにらみつけられる。なんとも尻がこそばゆかった。

女子社員も大勢いたが、現在「合升会」のメンバーである藤江喜代子、松岡フサ、松岡俊子、岡田キツ、笹田清子さんたち以外はすっかり忘れてしまった。いや忘れてならない人がいた。聯合女子社員のうちで最高給者と言われた伊勢田富久庶務会計部長である。その配下に豊田治助^{じすけ}、木原礼二がいたのだ。思い出す聯合解散の日、僕の解散手当は1000円札と58円だった。その1000円札を、細かくしてもらおうとすると、伊勢田さんは「滅多にももらえないのでしょう。たまにはお母さんに見せなさいよ」と、僕をにっこりとたしなめるのだった。もち論、無理にこわしてもらったが、考えれば考えるほど心弾む思いの山積みする良き若き日々だった。

〔新聞通信調査会報〕第134号 1974年2月1日発行

帝国通信から新聞聯合へ

花田為次郎（元新聞聯合大阪支社）

私は昭和4（1929）年、勤めていた帝国通信が没落し、福岡支局で聯合に引き継がれ、翌5年10月から大阪の新聞聯合の速記者になった。当時の社屋は淀屋橋近くで、有名な美津濃運動具店（現ミズノ）が近くにあり、支社の向こうの角は小学校。雨の日など自家用車が子どもを迎え

に来た。さすが大阪だと、田舎者の私はびっくりしたものだ。

下宿は北区沢上^{さわがえ}江町の間借りで、梅田駅から天王寺行きの小型の汽車で通勤した。その頃から地下鉄の工事が始まっていたようで御堂筋から淀屋橋の川中に、油谷式^{ゆた}ハンマーで鋼矢板^{こうやいた}が物すごい音で打ち込まれていた。

当時の支社長は東川嘉一^{いかわ}さんで、新聞部は山口巖^{いわ}さんの下に主任中村政治、周藤、俳句の酒井正秀、松生、それにジョージ・ラフトばりの髪を真ん中から分けダンスに凝っていた伊賀徳次の諸先輩。当時ダンスをする人は大変なモボ^{もぼ}で、写真部の出島青年もダンスに行っていた。私の職場の速記では北川という人が翻訳の字が大変美しかったのを覚えていた。

外勤ではデスクをやっていた青白い顔にヒゲの濃かった神崎さん、マッチの収集が趣味とか。度の強い眼鏡の藤川佐吉、背の高い猪伏清^{いのしげ}、いつも鳥打帽の三浦良知、桑名鹿男・大分新聞^お社長の息子さんの東穹、二枚目の竹村智の諸氏が記憶に残っている。通信の方は岡山担当が松宮覚次さん（後に共同通信岡山支社長）、福岡係が大野佐月、山田春治の両君、大野君は私と同年で大のツカファン（宝塚歌劇のファン）。よく話を聞かされた。当時の専用線は1回まわしたら神戸、3回以上は東京というふう

に手回しで呼び出す古風なものだった。

江商ビルに移ってから夜、大騒ぎした事件がある。三浦良知さんが自分でエレベーターを運転して上階の方へ上ったが、いつまでたっても下りて来ない。上でエンコしたらしいが、三浦さん、大慌てでガチャガチャやっているうちに動き出して皆ホッとした。江商ビル時代も私にとっては楽しい思い出が多い。

〔新聞通信調査会報〕第138号 1974年6月1日発行

同報電話方式を開発

上野伊三郎（元新聞聯合大阪支社）

午前5時出勤

プレスワイヤレス受信のため、一年中、午前5時に出勤する。寒い冬の朝、江商ビルのエレベーターホールで急いでよく滑った。出勤は主としてタクシーで、代金50銭は特別に支給された。

二・二六事件

標金（原注）上海で通貨代わりに通用していた長方形の金塊）相場のため上海ロイターを傍受していた。二・二六事件に際し、同放送は「クーデター」の見出しで、東京はもちろん、興津、湯河原のことも詳細に報道している。英文を訳して名古屋以西の各支局や新聞に配信したのは言うまでもない。通信線が途絶したのに、どんな方法でロイターは上海へキャリーしたのであろうか。

「歩み」同報装置

株式通信の購読者は約50軒あったが、刻々の相場を送り込むため、20人以上の女子社員が一齐に電話口で速報するのは、何とも壮観であった。この改善方法として同報電話方式を開発した。会議電話の最初かもしれない。

ポートモレスビー

大戦の初期、大阪は南方からの傍受を担当した。記憶に残るニュースは、ソロモン群島より1週間を費やしてたどり着いた牧師の談として、着水した水上飛行機の乗員がヤシの木に日章旗を掲げたこと。ポートモレスビーの初空襲では驚くほどの低空で来襲し、爆撃を繰り返し、高射

砲陣地の兵士も砲を撃つことができなかったと語ったこと。

（新聞通信調査会報 第307号 1988年6月1日発行）

第2節 写真スクープ

決定的な1／15秒／浜口首相狙撃の瞬間

中田義次（元新聞聯合写真部、元同盟通信写真部長）

昭和5（1930）年11月14日朝、特急「つばめ」が東京駅を発車しようとする9時少し前、駐ソ大使として赴任する広田弘毅氏を5、6名の写真班が取り囲んでいた。「閣下、済みませんが少しこちらを向いてください」。ズボンのポケットからホームスパンの鳥打ち帽をのぞかせ、重箱くらいもある25^{センチ}ほどの大きなアンゴークメラを構え、10分の1秒のシャッターを切っていた。それは35年前の私です。1枚では自信もなかったので、2枚目のシャッターを切ろうとカメラを構えたときです。

異常な音を聞きました。そして数秒後にはホームの中央部付近がどよめき、騒がしく感じられます。何か起きたが、何だか分からない。無意識に、全く夢中で、見送りの人垣を押し分けて突進しました。走りながら「そうだ銃声だ」。大きなカメラ、そして大きなかばん、ホームは見送り人の人の波、なかなか思うように走れません。右によるめき、左に

ぶつかり、やっとの思いで人垣の一団にたどり着きました。大変な人垣です。それにも増して大変な警官の数です。みんな帽子のバンドをあとに掛けていて、物々しく殺気だっています。人垣で何も見えません。何だか分かりません。人垣の一団は少しずつ、有楽町よりの中央階段に前進移動しています。数秒、数歩、まだ分かりません。「首相が撃たれた」「浜口（雄幸）首相がやられた」と伝わるまで、それほど時間もかかりません。

この日、浜口首相は、中島弥次郎（やだじ）秘書官を同伴、岡山県下の陸軍特別大演習陪観のために、特急「つばめ」で西下する発車ベル2、3分前の出来事です。両目を閉じ、顔面も蒼白（そうはく）、生死も分かりません。警官と人垣の一団から抱きかかえられた首相の姿がチャリと見えます。

各社の新聞写真班は無我夢中、目も血走って、マグネシウムを人垣目指して機関銃のようにたたいてます。そのマグネシウムの音と煙でホームはさらに混乱を呈しました。私は各社の写真班の動きを見ながら不思議なほど冷静でした。なぜか理由は分かりません。「残りの手持ちタネ板が1枚しかない」。そんなことが冷静にさせた原因かもしれません。大切に使う、チャンスを生かそう。



東京駅ホームで狙撃された浜口雄幸首相＝1930（昭和5）年11月14日、中田義次撮影。『通信社史』331頁掲載の同様の写真は中田撮影のものではないことが後に判明した

人垣と警官の一团はホームを中央階段に向かってゆっくり移動しています。地下道に入れば撮る機会は二度とありません。私はとっさに人垣を離れ、階段の反対側に回りました。首相の一团は階段の二、三步前まで来ています。一步、二歩、階段を下り地下道にかかります。ファインダーを顔面に食い込ませるように、息を大きくのんだのできます。蒼白の首相の顔が鮮やかにレンズを通してつかめました。ここだ。15分の1

秒でシャッターを切りました。目を向けると人垣の一团は地下道に完全に入っていました。長い時間を感じました。両手に汗がびっしょりにじみ出ていました。

駅前からマツチ箱のように小さな目黒行きの市電に乗り、内幸町で下車、特別目的もなかったが、就職を依頼している仲間を訪ねて新聞聯合社に向かいました。半ば朽ち果てた裏階段を上がって写真部に顔を出した。途端に「この忙しいのにはばか野郎、帰れ」と大きく怒鳴られました。無理もない。首相が撃たれ、社はテンヤワンヤの真つ最中、そのうえ同社の柴田斌写真部員の撮ったものが全部駄目では。「私も一枚撮ってある。使えたら使ってください」。自信はあったが、けんまくに恐れをなし、恐る恐る申し出ました。

30分も現像したと思う。結果は自信通り。聯合から契約社に配信されたのももちろんのことです。朝日新聞の写真部長、谷口徳次郎氏が息を弾ませて飛んで来ました。「いかなる条件にも応じる、原稿をくれ」と涙を流さんばかりに食い下がっていたのが、特に印象に残りました。当時、朝日は通信社の世話にはならないと、聯合との契約がなかったのです。もちろんこれが縁となり、朝日にもその後、配信するようになったことは当然のことです。

私の一枚の原稿が全国に、全世界に大きく報道されたときは、喜びの涙が出ました。そして写真班としての生きがいを感じました。

昭和3年、御大典で名古屋、京都、奈良に出張。帰京後間もなく、同年暮れに、住み慣れた帝國通信社の経営不振が原因で浪人しました。

浜口首相事件の翌年、6年4月、晴れて新聞聯合社に入社が決まりました。浪人生活3年、月給50円、私の23歳のときです。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

アンゴーからスピグラへ

中田義次（元新聞聯合写真部、元同盟通信写真部長）

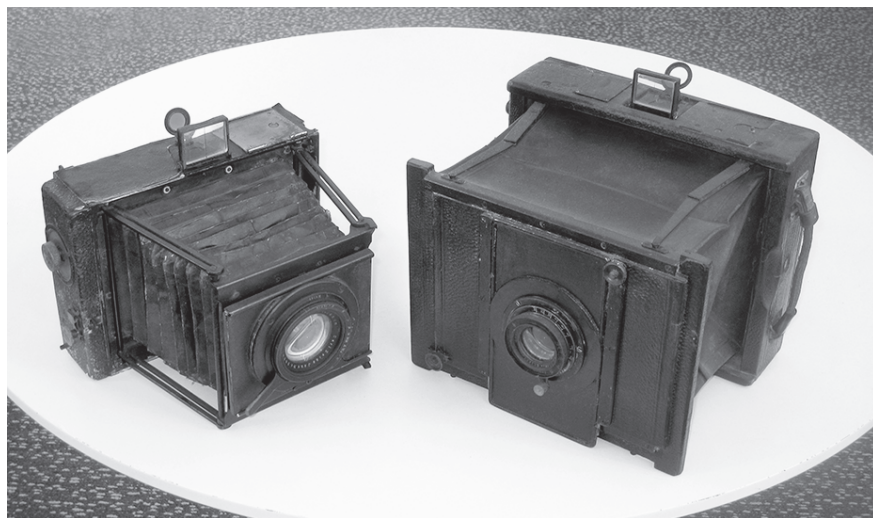
大正初期から昭和、つまり敗戦までの通信社で活躍したカメラはドイツ製のアンゴーカメラ（キャビネ型）、レンズはダゴールF6・8が主力武器で、若干パルモス、クラップ（手札型）も併せ使用されたが、通信社の場合はアンゴーカメラ・オンリーといっても過言ではない。スピグラは敗戦後連合軍が上陸し、アメリカ系通信社が軍とともに上陸してからである。ライカ（ドイツ製はいつごろ開発され、日本に何年ごろ輸入されたか。残念ながら全く記憶がない。昭和初期ごろからアンゴーと併用してライカも利用されるようになった。

上海事変⁷⁹勃発のため、昭和7（1932）年、上海に従軍したが、現地でライカを購入した。「ブラックライカ・エルマーF3.5」で確か250円から300円程度だったと記憶している。私物として持ち帰った。満州事変、日華事変、太平洋戦争と戦時下での急速な国内の変貌。その間、国内ではアンゴーカメラが主力武器で、イーストマン（米国の乾板、つまり種板ガラス板を使用。印画紙はアゾ（米国）のガスライト紙を使用。ブロマイド紙は全くと言っていいほど使用しなかった。

アンゴーで取材した原稿は、メトールの現像液で現像、プリンターで焼き付け、地方新聞社に配信した。その時代の地方新聞社には今日ほどの印刷設備もなかったので、鉛版、紙型、写真の3種類に分け、それぞれに応じて列車便で送稿した。従って地方紙が入手するのは数時間後、あるいは1日後とズレが当然起きた。

写真電送機を通信社で最初に導入したのは電通で、昭和3年の御大典⁸⁰

直前である。写真電送機が開発される以前は伝書鳩^{でんしよばと}も大きな役割を果たした。各社の屋上には必ず鳩舎^{きやうしゃ}があって、何百羽の鳩を飼っていた。科学の進歩で、この鳩もすべて必要なくなり、さびしく消え去った。アンゴーはF6・8という代物だから、昼間でもマグネシウムの光源を使用しなければ、撮影はほとんど不可能といってもいい。



戦前のドイツ製報道写真用カメラ、アンゴー（右）とパルモス

アンゴカメラは通信社には忘れられない貴重な役割を果たしてきた。スピグラが、戦後の立役者のように言われているが、同盟通信は戦前からスピグラはロッカーの中にお蔵入りしていたことを書き添えておく。なぜ活用しなかったか、という疑問は当然と思うが、第一にフィルムが入手できなかった。第二はアンゴが手に慣れ、恋人のようなもので、スピグラを使用する者がいなかったのが実情。当時のカメラマンは職人氣質だった。アンゴも戦場では活用の余地はない。代わってライカ、コンタックスという軽量カメラが従軍では使われた。

敗戦後日本に上陸したアメリカ系マスコミは全部スピグラだった。アンゴも伝書鳩と同様、敗戦後消え去った。スピグラの良さは、オールマイティーの取材が可能なこと。東京裁判の時代から通信社も新聞社も全部スピグラとなった。そして一眼レフの時代が来た。東京五輪（1964年）では小型機に移り、最近ボタンを押せば、写真が撮れる時代となった。

大正期からの通信社を参考までに書くと、帝通、聯合、電通、中外通信、学芸通信、辻村製版、写真通信などで、その他写真部を持たない社も何社があった。これら通信社は、東京の場合、各社が中央新聞、やまと、万朝報、都、二六新報、毎夕新聞、朝日、日日などの社に、取材した原稿を自転車で売り込みに競争したもので、当時1枚の原稿を売ると3円であった。

（「新聞通信調査会報」第229号 1981年12月1日発行）

私の上海特急

中田義次（元新聞聯合写真部、元同盟通信写真部長）

昭和5（1930）年11月、浜口雄幸首相が東京駅で狙撃された特ダネ写真が縁で、帝通（帝國通信社）浪人から浮び上がり、新聞聯合社に入った。当時の聯合は、日比谷公園脇の今の日比谷会館の所で、裏階段を上すると写真部、その奥に宿直室、編集室へ通じる廊下の左側に岩永裕吉事務の部屋、1階はタイプ部の木造2階建てという粗末なものであった。夜ともなれば近くの「おた幸」から熱燗をとって、一杯やりながら電話をとったり、原稿を書いたり編纂室には、高井信義、長林密蔵、大平安孝、岡村二一、栗林農夫諸氏の顔もよく見かけた。

7年2月、出社するとすぐ上海行きを命じられた。上海事変の勃発である。緊急事態というわけでも家にも連絡できず、羽田から大阪まで飛行機。大阪でフィルムその他の資材を調べ、無電機も託された。大阪から



中田義次＝1952（昭和27）年ごろ撮影

長崎まで列車、長崎支局で手配してくれた深夜出帆の「エンプレス・オブ・エイジア号」の2等船室に乗り込んだ。というより乗せられた。本来なら日本の連絡船を使うのだが、時間の関係で思いもよらぬ豪華船の客となったが、日本語は全く通じず、閉口した。支那人のボーイがスーブを1回だけ船室に持ってきてくれた。

翌朝、船が停止したので丸窓からのぞくと、写真で記憶していた上海の街並みが200^{リヤ}ほど前方に見えた。急いでデッキに出て外人たちと一緒にランチに乗り込む。黄浦江の水は黄色く汚れていた。上海支局には連絡してあるはずなのに、誰の姿も見えなかった。敵地(?)に日本人がカメラとフィルムを多量に、おまけに無電機まで持っているのだから穏やかには済まない。税関の支那人は大声で英語と支那語でべらべらまくしたてるが、チンペンカンペン。お手上げで泣きたい気持ちだった。日本語で筆談を始め、日本人、新聞記者、取材目的等々と書き、3時間ぐらい交渉した。どうにか先様も理解できたらしい、というより音を上げたのかもしれない。カメラだけ渡してくれ、残り一切フィルム、資材、無電機は没収されてやっと解放された。

対日感情の悪化、便衣隊^{べんいたい}ゲリラ、不安はあったが、来るところに来たというのが実感。街中に出たものの、地理が分からず、途方に暮れ、運を天に任せるより方法がない。建ち並ぶ高層ビル、大群衆が右往、左往。難民らしい人たちが荷車を引いている。難民の流れは右から左に移動している。遠くから砲声、銃声が聞こえる。支局はどこか全く分からない。直感で人の流れと反対、つまり右へ歩き出した。300^{メートル}ほど行くと、横浜正金銀行^{しょうぎんぎん}と書いてある大きなビルの看板を見つけた。地獄で仏の心境でそのビルに飛び込んだ。日本人がいたことはいうまでもない。詳しく説明、協力というより助けを求めた。未知の地に一人でよくこまで来たと感じられ、銀行の人が車で支局まで送ってくれた。

やっと、私の上海特急は目的地に着いたのだった。支局はテンヤワンの騒ぎで出迎えどころではなかった。支局長は結束武二郎^{けつすけ}さん。盛んにタイプを打ちながらジョニーウォーカーをチビリチビリ^{けつすけ}やっているのが特別印象に残っている。税関に没収されたフィルム、無電機そのほか一切は領事館を通じ支局に届いた。

(新聞通信調査会報 第182号 1978年2月1日発行)

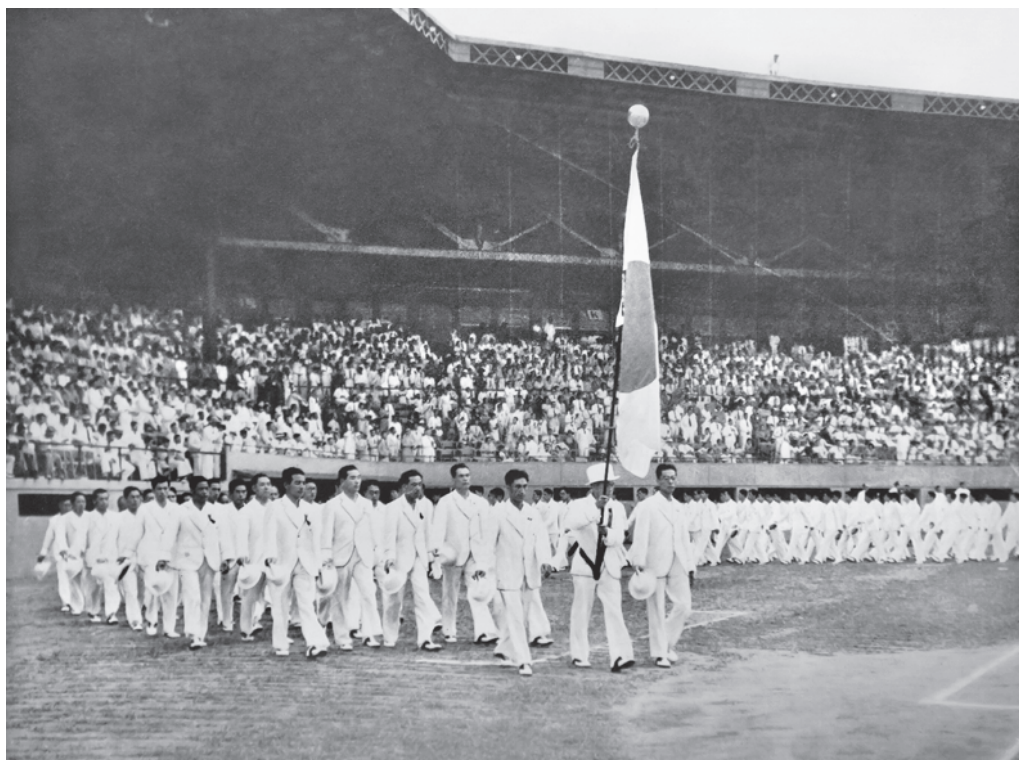
写真送稿で電通に勝つマニラの極東オリンピック

中田義次(元新聞聯合写真部、元同盟通信写真部長)

昭和9(1934)年アジア大会、つまり戦前の極東オリンピック大会¹⁸のことである。フィリピンのマニラで開催されることになり、わが国から陸上はもちろん野球も参加、大部隊となった。

選手団、役員、報道関係者など数百人の大集団。NHKからは松内アナが実況放送のため特派された。報道関係は朝日、毎日、電通から小原カメラマンほか記者2人、聯合は運動部の秋山、平尾、それに私の3人。小原君の方は当時すでに写真電送機を設置していたが、わが社にはまだなかった。従って勝負は分かっていた。ささやかな希望は当時、通信省が写真電送の業務を開始していたので、それを活用することであった。通信省の電送機は東京―大阪間だけだったと記憶している。

船は途中、香港に寄港、数時間停泊することになっていた。香港支局に聞いてみると、不定期ではあるが、香港―上海間に航空便が飛んでい



極東オリンピック大会で入場行進する日本選手団＝1934（昭和9）年5月12日、マニラ

る。しかしあまり信頼はできない。この他には船便以外に手段はない、という話だった。

無事マニラ港に到着。かねて連絡してあったマニラのサンスタジオを訪ね、オリンピック期間中、暗室の使用を重ねて申し入れ、了解を得た。開会式の模様を撮ってサンスタジオで現像。プリントは2枚ずつ。1部を香港発の航空便で上海に。残り全部をマニラ出航の客船に託し本社宛て送稿した。幸運にも上海向けに送った航空便が、その日香港を発、上海に飛んだ。上海に着いた原稿は翌日、上海―長崎間の定期連絡船で送った。

長崎には不働健治写真部長が本社から来て待機していた。原稿入手と同時に複写し、必要な枚数をプリント。契約社に対しては電話連絡。長崎から列車に乗り込んで、途中駅に待機していた各社に原稿を渡し続けながら本社に帰った。

電通はどうなったか、全く知る由もない。4、5日後、本社から感謝電報が飛び込んだ。「第一報大成功、健闘感謝」。オリンピックも終了し、再度「平安丸」で選手団とともに帰国した。

なぜ勝ったか、それは極めて簡単で、わが社が飛行便を活用したという違いだけである。電通の敗因は、電送機に全面的に依存したのが原因であったと思う。油断大敵、身をもって感じたことである。

〔新聞通信調査会報〕第319号 1989年6月1発行

報道写真の系譜

「報道写真」と銘打った書物の多くは、写真家やその所属団体の出版・展示活動を前面に出して、新聞・通信は埒外に置いてあるきらいがある。本稿では「新聞写真」の視点から、日本電報通信社（電通）、帝國通信社（帝通）、新聞聯合社（聯合）、同盟通信社（同盟）の各写真部の歩みを解説する。併せて、同盟から共同通信社に継承された写真資産について、主なものを紹介する。

新聞写真の始まり

明治の半ば、陸軍参謀本部測量局製図課員の堀健吉が国産の写真網目版を開発したことで、写真印刷が徐々に普及し始めた。では日本の新聞写真の始まりはいつであろうか？ 東京日日新聞（現毎日新聞）の元カメラマンで報道写真史の研究者であった故佐藤振寿氏は、幾つか条件を付けた上で、1904年としている（1980年代に「カメラ毎日」に連載した「新聞写真の軌跡」）。その条件とは「自社撮影の写真を、自社で輪転印刷し、新聞本紙に掲載すること」である。この年、報知が元日号で皇族写真を載せ、日露戦争で4月に東京日日が、9月に東京朝日が戦地の写真を掲載した。1871年に最初の日刊紙「横浜毎日新聞」が創刊されてから実に33年後のことである。このタイムラグは、当時の新聞印刷における写真製版技術が、まだ黎明期であったことによる。

1892年、東京朝日がフランスからマリノニ輪転印刷機を導入、翌年には大阪毎日も導入するなど他社も追隨した。1910年の

「新聞総覧」によると、東京と大阪の輪転機の合計は44台。これで160万部刷っていたという（「新聞写真の軌跡」）。

しかし巻き取り紙で連続高速印刷する輪転機では、線画（木版画）は刷れても、階調のある写真の網点印刷はできなかった。例えば1896年6月に発生し2万2千人が犠牲となった明治三陸津波で、写真特集を企画した東京朝日は、平版による枚葉刷りを外注し、別刷り付録として配った。他の各紙は、入手した写真を木版画に翻刻して本紙に掲載したが、博文館の雑誌「太陽」巻頭の鮮明な写真ルポのインパクトには及ぶべくもなかった。

新聞・通信社カメラマンの起こり

写真製版の仕掛けもなく技術者もない状態では、新聞社にカメラマンの用はなかった。輪転機に写真網目版を取り付ける技術が製版業者で開発されると、新聞社は高い金を払って製版を依頼した。その後、明治製版所や辻村製版所が、カメラマンを雇いニユースを撮らせて、それを製版し新聞社に売ったことを始めた。製版自体の価格が高かったため、写真代はただであったという。高額な製版代に音を上げた新聞社が、自社で製版設備と技術者を配置し、カメラマンの採用も始めた。東京朝日に、後に初代写真部長となる谷口徳次郎が、営業部庶務係兼写真係として入社したのが1907年9月であった。

通信社では、1910年10月、電通大阪支局が写真課を設置した。2年後の21年、帝通大阪支社にも写真部ができた。不動態治が請け負い、独立採算制で運営した。電通は、22年4月、東京・上野で開催した平和大博覧会と英国皇太子の来朝を契機に、本社内にも写真課を設

置し、安田禎文が責任者になった。

明治天皇崩御の写真取材

1912年7月30日、明治天皇が崩御した。その大喪の儀は9月13～15日と決定したが、深夜の屋外の行事とあって写真撮影は難題であった。新聞・通信各社と雑誌社は謹写団を組織し、写真界の第一人者、帝室技芸員の小川一真を主任技士として委嘱した。レンズは暗く、乾板の感光度は低い。人工光源も心もとない。連夜のテストで苦心を重ねた末、撮影は成功した。謹写団とは今でいう代表撮影で、成果はプールされた。小川が主任技士に選ばれたのは、新聞・通信社の撮影技術が、営業写真師に及ばなかったことを示している（新聞写真の軌跡）。このとき大阪毎日では3日連続で写真号外を発行した。写真号外や写真ページは読者に歓迎され、発行部数の増加に結び付いた。写真報道の重要性を新聞経営者は強く認識した。

その後も皇室の代替わり報道は、新聞・通信社の写真部にとって大きなスプリングボードになった。27年2月の大正天皇の大喪と、翌年11月の昭和天皇の即位の大典でも謹写団が結成されたが、新聞・通信各社は代表取材をこなせる力を付けていた。大典報道では大阪朝日、大阪毎日、電通がドイツのシーメンス社などに電送機を発注し、実用に供した。大阪毎日では日本電気の電送機も使い好成績を上げた。

ニュース写真を身近なものにした関東大震災

1923年9月1日に関東大震災が発生し、直後から広がった火災で、死者・行方不明者は10万5千人に及んだ。焼失を免れた新聞

社は都、東京日日、報知の3社だけ。電通も帝通も社屋が焼けた。

一枚の写真は、数百行の記事でも表現できない惨状を一目で伝えられる。写真の描写力、伝達力がいかに発揮されたのが関東大震災報道であった。これをきっかけとして、新聞写真は社会的に広く認知された。報知、朝日、毎日新聞だけでなく写真画報も発行し、大阪朝日の「大震災写真画報」は第1集から第3集まで各10万部を売り上げたという。電通と帝通は、中央紙だけでなく地方の新聞にも多様な写真を配信した。

被災した新聞社が復旧するまでに、小回りの利く絵葉書業者が大量の震災絵葉書売りさばいた。報知の撮影した宮城前広場の避難者の写真の背景を改ざんし、3万8千人が亡くなった「被服廠跡惨事の直前」に捏造した絵葉書も出回った。

震災時の電通と帝通

◆電通 「震災発生で取材体制を整えたが、火災が激しくなって写真機器を中央新聞前から小舟に積み込んだ。これは3日午後2時に汐留駅の川で無事発見された。機具、材料その他に大きな損傷が出なかった幸運もあって震災、火災の撮影と配信に努力し、全国の新聞社から非常な感謝を受けた。在留外人で震災の写真を求めるものはすべて電通写真課に來た。（略）このころから電通写真課の人名は、ようやく海外に広まっていった」（電通通信史）

10月4日、電通は東京日日新聞に次のような広告を出した。「弊社の写真通信 震災当日より猛火を犯し身命を賭して撮影した天柱砕け地維裂けたる凄絶の写真幾百種も揃えてあります。（略）ドシドシご用命を願ひます」。この「幾百種」の写真の原ネガ約270枚

が、歴史的な災害の記録として共同通信に残っている。

◆ 帝通 前述の不動健治が自伝『写真遍歴七十年』に経過を記している。「9月1日、災害の状況は夕方になって概況が分かり、東京へ行くことになった。カメラはキャビネ判のアンゴ、乾板を10ダース持ったが相当の重量である。夜行列車に乗り翌早朝、静岡でストップ。救援物資を積んだ連絡船が清水港から出航するのに便乗した。2日中に東京港へ着いても、朝鮮人暴動のデマのせいで接岸できず、上陸は3日夕刻となった。早速3万8千人の死者が出た本所の被服廠跡をはじめ市内の被災状況を撮りまくった。乾板を使い果たし、補給のため乗り継ぎながら北陸回りで東京―大阪間を2往復した。持ち込んだ乾板は計45ダース540枚だった」。不動はその働きぶりから本社に残留することを要請され、東京で写真部を開設し責任者になった。

帝通破産で不動が聯合写真部へ

1929年3月、帝通は破産宣告を受けた。しかし、独立採算制で写真部門を順調に運営していた不動は、かなり前から新たな写真通信社を設立中であつた。一方、26年5月に発足した聯合は、28年11月、昭和天皇の即位の大典を機に写真サービスを始めて、これを成功裏に終えた。さらに写真部を拡充するため、不動に合体を持ちかけた。不動は、請負制を条件に写真部を引き受けた。1年後、私営の限界を悟り、聯合の機構の下に入ることを決断し、岩永裕吉事務理事から写真部長の辞令を受けた。30年2月以降のことと思われる。

中田義次が浜口首相狙撃場面をスクープ

1930年11月14日朝、浜口雄幸首相が東京駅頭で右翼に銃撃され腹部に重傷を負った。同じホームに、帝通の破産で浪人中の中田義次カメラマンがいた。駐ソ大使として赴任するため、首相と同じ列車で西下する広田弘毅氏を撮影していた。異変に気付いた中田は機敏に反応して、階段を見下ろす場所に移動して、側近に抱えられ地下道へ向かう首相の姿を、1枚だけ残っていた乾板に収めた。それを、かつての上司の不動が部長を務める聯合写真部に持ち込んだ。中田の1枚は、血の気の失せた浜口を見事にとらえていた。混乱の中でうまく撮れなかった聯合には救いの神の大特ダネとなった。不動は高く評価し、翌春、中田を採用した。

中田は、浜口遭難の決定的場面を撮ったのは自分だけだと終生思っていたが、似たアングルの写真があつたことが筆者の調査で分かった(『メディア展望』695号12019年11月)「もう1枚あつた決定的ショット」(参照)。撮影者は不明だ。『通信社史』331ページの掲載分は中田の写真ではない。本書154ページに掲載したのが中田撮影の写真。

「電通アルバム」の発掘

1989年暮れ、電通本社の地下倉庫に眠っていた昭和初期の報道写真アルバムが見つかった。日々の配信写真を、光永星郎社長に見せるため作られた「社長供覧アルバム」計81冊である。26年から33年までの1万5千枚に上るニュース写真群は、時代の記録として大変貴重である。共同通信では「電通アルバム」と呼んでいる。

その内容は政治、経済、社会、外信のニュースはもちろん、家庭欄や文化、運動面用も網羅している。関東大震災を経て昭和に入り、



五・一五事件後の政局取材のため西園寺公望の邸内で待機するカメラマン。カメラはパルモス、グラフレックス、アンゴーなどが並ぶ=1932(昭和7)年5月21日、東京・神田駿河台

新聞写真が読者により一層身近になったことがうかがえる。現在と比べると、天皇をはじめとする皇室の動静や、軍関係の写真がかなり多い。29年8月、世界一周飛行の途中、霞ヶ浦飛行場に飛来して大きな話題となったドイツの飛行船「ツェッペリン伯号」を、電通は複葉機を飛ばして福島県沖で出迎えた。皇居と横浜港での空撮も含め、70枚余りが塊で残っている。31年の満州事変や、32年の五・一五事件など戦時体制に向かうききな臭さも出てきている。取材の拡大に伴い、電通の写真課員は、24年の12人から32年は28人に急増した。

同盟発足直後に二・二六事件

1936年、同盟発足から間もなく二・二六事件が発生した。発生から収束まで、反乱軍と鎮圧軍、市民の表情など一連の動きを記録した約180枚の原ネガが残った。現代史の記録として貴重な写真群である。

電通はまだ同盟に合流前であったが、写真部門は既に一緒に仕事をやっていたという。それが功を奏して、充実した成果を上げた。しかし、戒厳司令部の命令で、写真の発表は禁止された。7月に軍法会議の判決が公表された時点で、犠牲者や反乱軍将校らの顔写真、街の表情が解禁されたが、それ以外の反乱軍の写真は戦後まで日の目を見ることはなかったようだ。

感材とカメラ

戦前のフィルムや乾板の感度は、1940年ごろで、せいぜいISO40止まり、増感してもISO100に達しなかったと思われる。

カメラは、明治期は組み立て暗箱、大正、昭和はアンゴー、後にパルモスが使われた。暗箱以外はいずれもドイツ製である。通信社の写真配信は、プリントを大量に焼き増しして、東京・大阪市内は自転車やオートバイで配り、地方へは鉄道便で発送した。アンゴーはネガがキャビネ判と大きく、密着焼きで用が足りたため、通信社の標準機として多用された。だが戦地ではその大きさを持て余し、一回り小型のパルモスが使われ、サブカメラとして35^ミのライカやコンタックスも利用された。

戦争取材

1936年に発足して45年に幕を閉じた同盟通信社。その10年間のほとんどは戦争の取材に追われたといつてよい。

37年7月の盧溝橋事件が日中戦争に発展し、泥沼に入って行き、41年12月8日、真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入した。

同盟写真部はどれだけの人を割いたであろうか？ 37年12月1日

時点の社員名簿では、本社44人、大阪支社11人、外地は上海支社に荒川穆写真部長以下2人だけであった。このほかに映画部が22人。映画部を除くと60人に満たない。38年、北支総局が北京に開設された。「この北支総局の新設は、同盟の主力を挙げての北京移転の観があった。写真部は常駐映画部、前線要員を含めて常時二十余人を数えた」（『写真遍歴七十年』）。44年4月には、内地は本社61人、大阪支社13人、名古屋支社1人、福岡支社9人の計84人。外地は27人で、大陸の7カ所に14人、南方の7カ所に13人。別に応召者3人と政府機関への出向者が3人いて、総体は117人である。これには映画部を独立させた日本映画社（日映）は含まない。実に7年間で倍近く

に膨らんでいる。

前記の出向者とは、内閣情報部（後に情報局に改組）と、その傘下で国策グラフ雑誌「写真週報」の編集・発行を担う写真協会（後に日本写真公社に改組）へ駆り出された者たちである。

戦地への展開で殉職者も出た。『通信社史』696^頁に「中華事変および太平洋戦争中の殉職同盟通信社員（七十名）」を記載している。そのうちの10名が写真・映画関係者であった。内訳は特派員7人、陸軍報道班員1人、海軍報道班員2人。日中戦争時の38年から40年にかけて3人、44年から45年に7人が、南方や台湾沖などで殉職した。

送配信手段に電送機と航空機も

戦争報道をこなすため送配信手段も充実が図られた。1928年の昭和天皇の即位大典で実用化された電送機は、44年4月時点で東京、札幌、名古屋（受信のみ）、大阪、岡山、高知（受信のみ）、広島（受信のみ）、福岡、京城（現ソウル）、奉天、大連、新京（現長春）に設置済みで、ベルリン―東京、上海―東京、台北（発信のみ）―東京で電送できた。

同盟機による航空輸送も使われた。42年1月のマニラ占領、2月のシンガポール陥落はそれぞれ東京へ空輸して速報された。

空襲取材

44年、米軍の空襲が本格化して内地も戦場となった。東部軍は43年11月、在京の3紙と同盟の写真部、日映に命令して60人余のカメラマンで「国防写真隊」を結成、B29による空襲被害の状況を撮影

させた。ネガは軍に納め、許可を得ただけニュースとして使用することができた。国防写真隊は、大阪や京都、福岡など地方でも結成された。『通信社史』は「空襲の模様は細大漏らさず記録され、その写真は貴重な文献になるものであったが、終戦に次ぐ軍の解体とともに全部闇から闇に葬られる運命をたどったのである」(580頁)と総括していて、共同通信にもこれといった空襲写真は残っていない。一方、同盟から日本写真公社に出向していた内山林之助は同公社の国防写真隊(7名の隊長を務めた。内山らが撮った写真の一部260枚余りを、東京大空襲・戦災資料センターが所蔵している)。

45年3月18日、昭和天皇は10日の東京大空襲で被災した深川など下町を事前の発表なしに視察した。その場面を同盟の野間正二カメラマンが代表で撮影した。深川の富岡八幡宮境内を進む天皇の背景はがれきの重なる焼け野原。ヨコ長の写真は翌日の各紙一面に大きく掲載された。これを見て、戦争の終わりが近いのではと感じた読者が少なからずいたといわれる歴史的な写真である。この原ネガは残っていない。

写真の焼却処分と再出発

1945年8月15日の終戦を前に、同盟写真部は軍の命令により、戦時中の軍関係の写真一切を処分した。その結果、共同通信には戦時中の写真はほとんど残っていない。

シンガポールで英軍司令官パーシバルに降伏を迫る山下奉文中将の写真は戦争写真のハイライトの一つだが、小路春美らが撮った原ネガはおろかプリントすら残っていない。今あるのは、戦後に写真

集などの出版物を複写したネガである。南京入城や、コレヒドール要塞陥落なども同様である。戦争遂行に協力し、少なからぬ殉職者を出すなど犠牲を払った結果がこれであった。軍命令に従い処分を実行した中田義次写真部長は断腸の思いであったろう。後年、度々後悔の念を漏らしていた(『メディア展望』第684号(2018年12月)「同盟通信、戦時中の関係写真を全て処分」参照)。

国は敗れたが、カメラマンは休むことなく日々のニュースをカバーし、シャッターを押し続けた。同盟通信写真部はここぞという場面では代表取材を任された。

8月6日、広島に原爆が投下された。代表取材ではなかったが、大阪支社の佐伯敬カメラマンと中田左都男記者が撮影した写真は、18日に配信され、原爆の惨状を全国レベルで報道する初めての写真となった(『メディア展望』第657号(2016年9月)「新たな原爆カメラマンが浮上」参照)。

8月15日、ポツダム宣言受諾を告げる天皇の玉音放送の後、宮城前広場に額づく市民の姿を内山林之助らが撮影した。

8月30日、占領軍のマッカーサー元帥が厚木に降り立ち、日本本土に第一歩を記した。その姿を同盟写真部の武田明と宮谷長吉が代表撮影した。ムービーは日映の坂斎小一郎であった。

9月2日、東京湾上の戦艦ミズーリ号で降伏調印式が行われ、宮谷長吉が代表撮影し、ムービーは日映の牧島貞一が担当した。

9月27日、天皇がマッカーサー元帥をアメリカ大使公邸に訪問し初めて会見した。この歴史的な写真は米軍通信隊のジェターノ・フェーレイスが撮影した。翌28日午前、同盟写真部の巖俊緒がいち早くプリントを入手して直ちに配信、唯一の夕刊紙だった東京新聞

が掲載した。これを見た内務省が発行停止を命じ、新聞は回収された。29日の朝刊で各紙が大きく掲載し、再び内務省が発行停止を命じた。それに対し連合国軍総司令部（GHQ）が乗り出し、処分を撤回させ、新聞は午後には配布された。この写真を見た日本国民は、統治者がGHQであることを再認識した。これ以降GHQは検閲を強め、「ヒロシマ報道」も制限された（原爆被害の全体像を示す写真報道は占領の終了まで待たなければならなかった）。

10月31日、同盟は解散し、11月1日、新たに共同通信社と時事通信社が発足した。共同通信写真部が、同盟写真部の機器や写真資産を引き継いだ。

（沼田清）

●報道写真の系譜（年表）

1887年

- 陸軍参謀本部測量局の堀健吉が国産の写真網目版を開発

1892年 5月

- 帝国通信社設立
- 東京朝日がフランスからマリノニ輪転印刷機を導入。翌年には大阪毎日も導入

1904年 1月1日

- 報知が元日号に皇族写真を掲載。輪転印刷では初の写真版が実現

2月8日

- 日露戦争勃発。4月に東京日日、9月に東京朝日が戦地の写真を本紙に掲載

1906年 10月

- 日本電報通信社（電通）設立

1912年 9月

- 明治天皇の大喪。新聞、雑誌社で謹写団結成、小川一真の指導で夜間撮影に成功

1919年 秋

- 電通の安田禎文が大阪支局に写真課を新設。1922年には本社にも写真課を設置

1921年

- 帝通が大阪支社に写真部開設。不動健治が請け負い、独立採算式で運営

1923年 9月1日

- 関東大震災。電通は機材、資材に支障なく取材を全うした。帝通の不動は大阪から出張。震災写真の収益で基盤を作り、その後、東京に写真部を開設した

1926年 5月1日

- 日本新聞聯合社発足

1927年 2月

- 大正天皇の大喪。5通信社、7新聞社が謹写団を組織し、夜間撮影を成功させた

1928年 11月

- 昭和天皇の即位の大典。朝日、毎日、電通が電送機を導入し実用に供した。聯合は大典報道が写真サービスの開始となったが、成功裏に終えた

1929年 3月

- 帝通破産。すでに独立していた不動は聯合に移り、1930年、写真部長に就任

1930年 11月14日

- 中田義次が浜口首相狙撃事件の特ダネ写真を聯合に持ち込む

1936年 1月1日 ● 同盟通信社発足。6月、電通の通信部が合流
2月26日 ● 二・二六事件。写真は戒厳司令部の命令で7
月の判決確定まで発表禁止に

1937年 7月 ● 盧溝橋事件。日中戦争に発展

1938年 ● 同盟の内山林之助らが内閣情報部で「写真週
報」の発行に従事、後に写真協会へ出向

1941年 12月8日 ● 太平洋戦争勃発

1942年 2月15日 ● シンガポールで英軍が降伏。山下・パーシバ
ル会見を同盟の小路春美らが撮影

1945年 3月10日 ● 東京大空襲。18日、天皇の被災地視察を同盟
の野間正二が代表撮影

8月6日 ● 広島に原爆投下。同盟大阪支社の佐伯敬力メ
ラマンと中田左都男記者が撮影し、18日に配
信。全国的な初の写真報道となった。9日、
長崎に原爆投下

8月15日 ● 終戦の詔勅と玉音放送。同盟の内山が皇居前
広場に額づく市民を撮影。終戦前後、同盟写
真部は、軍の命令で戦中の軍関係の写真を焼
却処分

8月30日 ● マッカーサー元帥が厚木到着。同盟の武田明
と宮谷長吉、日本映画社の坂齋小一郎が代表
撮影

9月2日 ● ミズーリ号上で降伏調印式。同盟の宮谷と日
本映画社の牧島貞一が代表撮影
9月27日 ● 天皇がマッカーサー元帥を訪問。28日、同盟

写真部が写真をいち早く入手、配信。掲載し
た東京新聞（夕刊紙）を内務省が発行停止に。
29日、各紙が掲載し再び内務省が発禁処分を
したが、GHQが差し戻して全国的に掲載さ
れた

10月31日 ● 同盟解散。11月1日、共同通信社と時事通信
社発足。共同通信が同盟の写真部門を継承し、
機材と資料写真を引き継いだ

第3節 大陸に展開

西安事件スクープの経緯

（編集者注）「同盟・中国の会」は1988（昭和63）年2月5日、国際文化会館で松本重治^{しげはる}元同盟通信上海支社長（国際文化会館理事長に西安事件スクープ⁹³の経緯などを聞いた。参加者は元新聞聯合上海支局の吉田松治氏、元同盟華中総局華文部長の川崎正雄氏ら。

吉田 排日、抗日の本拠である上海に乗り込むについては、松本さんは相当の決心が必要であり、しかも新しい仕事に対する不安もあって、決死の覚悟だったのではないかと思う。上海へ出発の模様、上海最初の印象などお聞かせいただきたい。

松本 新聞聯合社に入社、即、上海支局長に任命され、いよいよ出発の日が来た。同行者は相談相手として、これも新入社の莊原達^{しょうばらとあ}君。昭和7（1932）年12月12日、長崎に向けて東京駅を出発した。高木八尺^{やさか}先生、

古野さん、福岡誠一君の見送りを受けたが、この他に当時私が教えていた中央大学の夜学生30人が来てくれ、駅頭で突然私のために万歳をした。万歳をされたのは生涯でこの時一回だけ。長崎の上野家に1泊。翌日「上海丸」に乗り込み日本を離れた。出発前の忙しさで少々疲れたのか、船中で発熱、莊原君に厄介をかけたが、船が呉淞^{ごしょう}を過ぎた頃から、楊子



南方視察中の松本重治＝1942（昭和17）年6月、ビルマ（現ミャンマー）のメイミョーで

江（長江）兩岸の大陸的風物を眺めていると、何とはなしに元気が出た。そうしてとにかく上海の楊樹浦^{ようじゅほ}埠頭に着いた。

埠頭には奥宮正澄、松尾松平、吉田松治君ら支局の連中が迎えてくれたが、皆初対面の人々であった。そのすぐ後、北四川路^{きたしせんろ}の中華料理「新雅」で2人の歓迎会が開かれた。第一印象で「この人たちとならやっていけそうだ」という感じがして、愉快に話をしたし、初めての広東料理も非常にうまかった。上海の第一夜はアスターハウスホテル（浦江飯店）でぐっすり寝た。翌日から関係筋の挨拶回り。新聞関係の人々の間では、記者経験がないので「外国人たちとめしを食うためにやって来たのだろ」と考える人が多かった。

2週間ばかりホテル暮らしの後、日本租界^{こんぞう}崑山花園^{かえん}のピアース・アパートメントに居を構えた。ここでは南京虫対策で苦労したが、ともかく翌年3月初めに家族（妻と子供2人）を迎えることができた。しかしこのアパートは北向きで日光のあたりが悪い。空気の良いフランス租界を物色中、ロイターのチャンセラー家にも近い臺拉斯脱路^{タラス脱路}に、芝生の庭のある家が見つかり転宅。1年半くらい住んだが、家族のための病院のことも考えて、再び虹口^{ホシコウ}サイドを探して、日本租界の施高塔路^{スコットロード}（Scott Road）に1934年末に移った。日本租界の末端で郊外に近く、空気が良く、家の間取りも悪くないし、庭もある一戸建て。何よりも福民病院が近いので落ち着いた。2年後すぐ近所に移って、約2年暮らしたが、施高塔路が後半の4年余りの上海生活の拠点となったわけである。北四川路の日本人学校にも近く、長男洋の通学にも便利だった。

川崎 西安事件のスクープは史上空前で、ジャーナリスト松本の名を世界的にしたものですが、同時に国民党と中国共産党との関係も転換させた最初の出来事という意味でも重大。このスクープの経緯とその後の中国に与えた影響についておうかがいたい。

松本 昭和11年12月、この頃には蒋介石による中国統一がいよいよ最終段階に入ったと上海で感ぜられた。つまり第6次剿匪^{そうび}（共産党などの討伐）は、中国側の記者の間でも、約1カ月で片付くだろうとの見解が多かったが、私は一種の杞憂^{きゆう}を持っていた。蒋介石が12月上旬、洛陽から西安に飛んだというニュースを中心に、情報を集めていた最中だが、余り手応えのある情報は得られなかった。たまたま大公報²⁴の主筆張秀鸞^{ちやうしゅうらん}さんが西安に旅行してきたとのうわさを聞いて、12月9日、電話で食事をしたと申し入れた。

「今忙しいが12日土なら時間ができそうだ」との返事。文路の「新月」で会う約束ができた。張さんなら切迫した情勢が分かるのではないかと3日間、首を長くしてこの日を待った。新月は静かな日本料亭で、冬は鶉鍋^{うす}が呼びびものであった。

当日少し早目の6時すぎ新月に行き、鶉鍋を注文して待つことにした。間もなく張さんが現れ気軽に上座にすわり、卓をはさんで対座した。まずお礼を申し上げると「お互いに新聞記者でしょう。今晚は大いに話し合いましょう」と打ちとけて鶉鍋をつつきながら、川越・張群会談^{ちやうぐん}など、日中関係がいろんな意味で切迫していることなどから、いよいよ中心課題に入ろうとすると、松本さん、南京支局から至急電話です」との女中の知らせに失礼して、階下の電話室に入った。

「南京支局の芦田です。奇怪なことに今日午後から南京と潼関^{とうかん}の電話連絡が切れています。蔣院長は目下西安にいるはずですが、何かが起こったらしく、南京側は甚だ狼狽^{ろうたい}気味です」。続報を頼んで一応切る。時に午後8時すぎ。座敷に帰って張さんに、南京からの至急電話のニュースを伝え、「張さん、何か異変が起ったのではないでしうか」「そうですか」と落ち着いて答えた張さんは、沈痛な面持ちだった。ニュースをどう判断するか、私は数分間じっと張さんの顔を見守った。

その時また同盟南京支局から第二報。私は小走りに電話口に急いだ。

「武官にただしたが、蔣介石は昨日、潼関から西安に赴いたらしい、との情報一つだけで、これも確報ではない。そして潼関の臨時行営からは南京の軍政部や蔣院長秘書室へも、いまだ何の連絡もない」との話。この話をそのまま張さんに伝えると、「松本さん、思い当たることがある訳でないが、あるいはとんでもないことが起こったのかもしれない。仮に蔣院長が今日西安にいるとして、その後南京に連絡がないのは変なことになりそうですね。せつかくのごちそうの途中ですが、少し調べたいから失礼させていただきます」と、すぐ辞去したいという。

私も同様、奇怪なニュースの確認には急を要するので「では残念ながら今夕はお開きにしましょう。私もすぐ同盟支社に帰ります。また後ほどお互いに連絡したいと思います」。張さんも「今夜はずっと社にいるつもりです」ということで、張さんを大公報まで送り、支社に急いだ。

9時すぎ支社に戻り、すぐ下条君（支社次長兼発信部長）に出社を促した。下条君の出社前に、このニュースの背後にあるものを確認しようと、取材の順序を考えた。日本側のニュースソースは駄目だろう。陸海軍駐在武官、大使館にも何もないだろう。とすれば中国側を片っ端からやるほかない、と決めた。まず蔣方震（原注）が数日前、ドイツから帰国したことを知っていたので、蔣さん宅に電話をかけた。中国人ボーイが先生は留守だという。「太々（奥様）と話したい」と言うと、1、2分して電話に出てくれた。流暢な日本語だ。「私と主人は数日前に帰ったばかりですが、主人は蔣院長に報告するため、西安に行っています。昨日か今日着いているはずですよ。何か重要なニュースでもあるのですか」「イヤ、よく分かりませんが、今日の午後から潼関と南京との連絡が絶えています。何か事件が起きたのではないかと思って」「今のところ私は何も知らない。何か分かったら電話してください」

次に喬輔三（原注2）の自宅へ電話。喬さんも留守で、夫人が電話に出た。「喬先生に至急電話したいのですが、ご主人は今どこにおられますか」「主人は夕刻から孔祥熙（原注3）公館に行っております」と公館の電話を教えてもらう。すぐ公館に電話すると、運よく喬君自身が電話に出た。「ちょっと奇怪なニュースが南京支局から来た。西安に赴かれた蔣院長の身辺に何かあったのでないか」

「おお、ありだよ！ 重大事件だよ。南京から孔部長宛ての電話によると、今日払暁、張学良指揮の下に、学良部隊と揚虎城の部隊が兵乱を起こし、西安郊外の華清池温泉で蔣院長を監禁してしまったのだ。張学良から孔先生宛ての通電が今到着、目下解説中。通電内容が分かれば、兵乱の目的、性格が分かるだろう。30分ほどしたらまた連絡してくれ」。

そこへ下条君が駆け付けてきた。10時少し前、第一報を指示。「蔣介石消息不明」とした。大北電信公司は外国向け発信禁止。そこで同盟の非合法無線電信室の二瓶邦雄君に連絡。「徹夜で頑張ります」と言うので東京への連絡は大丈夫となった。待ち遠しい30分がすぎた。

再び孔公館を呼び出すと、喬君が電話を待っていてくれた。「解説を終わったところだ。要領は①内戦を中止すること②各党各派が参加するように南京政府を改組すること③七君子その他の政治犯を釈放すること④言論の自由を保障すること―等で8項目、これで大体分かるだろう。とにかくとても忙しい」

私はガチャンと電話器をおいて「下条君、大体分かった。全部確報だ。2人手分けしてやろう」と鉛筆を握りしめた。時計は11時半をさしている。10本ばかりの電報を書いて、無電室に送り終わったのが午前2時。これは世界的スクープになりそうだな、と2人とも自然に微笑まざるを得なかった。帰宅して、遅くなった理由を妻に話し、良かったわねと、ねぎらいの言葉を聞きながら床に入ったが、記者の醍醐味を満喫しつつ、

しばし眠れなかった。

西安事件のスクープ経緯はこんなところだが、翌朝9時出社して、最初に飛び込んできた電報は、岩永、古野さんからの「特ダネ万歳」の祝電だった。やはり世界的スクープとなった。

〔南船北馬〕第8号 1988年10月発行

（原注）

- （1） 蔣方震 浙江省出身。1907（明治40）年、日本の陸軍士官学校卒業後、ドイツに留学。35年、蔣介石に軍事委員会高等顧問に任命される。
- （2） 喬輔三 山西省出身。同じ山西省出身の孔祥熙の秘書。
- （3） 孔祥熙 米エール大で修士号。北伐で蔣介石を支持し、29年に国民政府中執行委員、財政部長、38年行政委員長。

学卒浪人から聯合北京支局入社

大星石松（元新聞聯合北京、天津支局）

北京の秋は素晴らしい。空は高く青々と風さわやかに。世界で最も美しい秋の一つとたたえられるこの秋空の下、昭和6（1931）年9月のことでした。自費留学中の私は既に持ち金を使い果たし、北京駐在満鉄勤務の東京外語の先輩に就職口をお願いし、二日置き、三日置きにその門をたたくというみじめな毎日を送っていた。

その頃の北京は日本人が横行濶歩する12年以後の北京風情とは大違いで、居留民はわずか二、三千人。城内どこを歩いてもめったに日本人に出会うこともない、静かな落ち着いたところでした。またそれだからこ

そ仕事を探すのは容易なことではない。2カ月前からその先輩の紹介で日本人菓子店の女子小学生的の家庭教師をやっていたが、それも公寓（アパート）の払いに充てるのが精一杯という情けない懷具合の日々でした。

私は東京外語の4年間をただスポーツや遊び、酒の明け暮れで学業は怠け放題。せっかく希望した中国語も中途半端。これではならじと一念発起して昭和6年の大不況の東京を脱出してきた学卒浪人で、5月、北京到着後、城内北部の大仏寺街の京兆公寓という学生向きの安宿に落ち着き、心を入れ替えて中国語の学習にいささか励んでいた。下宿代は2食付き月12元、日本円1円が2元に当たるので、100円持参の私には大変安くてありがたかった。中国語の勉強には発音に厳しい老満州旗人に出向いてもらったが、お礼は月3元くらいで足りた。予定よりも早々に持ち金がなくなったのは、無駄使いの悪習のせいというよりほかない。

学生時代の私は恥ずかしながら行状は不埒、勉学は怠けの毎日。従って時局とか時事ニュースには関心が薄かった。この年の9月18日の柳条溝事件も、知ったのは2、3日後でした。それも旧満州出身留學生の馬君が急きよ帰国することになり、同宿の学生5、6人が集まって開いた送別の小宴に私も出席。そこで馬君兄妹が学業を中途放棄して抗戦に挺身する決意を披歴したので初めて事件を知り、かつことの重大さに驚いた始末でした。

北京と私、私と九・一八事件（満州事変の中国側呼称）は切っても切れない関係にある。九・一八事件がなければ、その後30年にわたる私の通信社生活はなかったし、そのとき北京にいなかったら、今の私はない。事件を知って間もなく、先輩を訪ねたところ、新聞聯合という日本の通信社が中国語のできる青年を探しているので、君を推薦しておいたからす

ぐ行けというわけで、通信社が何をするところか、皆目分らないままに、東城総布胡同の北京支局に支局長亀谷利一氏を訪ねた。内容は忘れたが、多少の面接質問があったと思うが、とにかく即決採用になった。事件後仕事は急増したが人手不足でよほど困っていたらしい。ありがたかった。生活のめどが付いた。

私の仕事はいわゆるガリ版書き。月給は部屋付きで60元。食費は3食で15元。仕事は翌日から開始。公寓の2食付き12元より少々高いが、部屋は広く板張りで、掃除は中国人ボーイの受持ちで清潔、食事は中国人料理人が作るのどうまい。夜は必ず老酒ラオチウが添えてあり、公寓住まいとは雲泥の相違。

肝心の仕事の方はどうか。前記のように時局に関心の薄い生き方をしてきたので、当時は特に地名人名には苦勞したが、幸い英文版担当の松村老先輩や中文版担当の張さんが親切に指導してくれたのと、中学時代は真面目に国語、漢文を勉強したおかげか、仕事にはわれながら早く慣れたようだ。お二人も英・中文版の材料の日文版が遅れたり、間違いがあったりしては困る。教える方も熱心だが、こちらも一生懸命だった。

仕事は夕方には終わり、老酒付きの夕食が始まる。亀谷支局長が得意の漫談調で、杯を手には若い頃の仕事の話、うまくいった話、しくじった話等々、面白おかしく話の花を咲かせる。こちらは常に聞き役だが、飲む方はもちろん負けずにいただく。夕食の後には自分の時間、多少の金を懐ふちにしての前門外34の散歩は楽しかった。その亀谷さんも逝って既に十数年になる。

当時の北京支局はオペレーターの佐々木太四郎さんと支局長の家族2人を加えて、日本人は6人だったが、その年も押し詰まったころだと思う。入江啓四郎さんが、私同様、支局雇いのような形で、ガリ版書きとして入社した。この入江さんの勉強ぶりには全く驚かされた。仕事の時

間以外は自分で決めた時間割に従って、専ら中国語、ロシア語、英語の学習。特に夜は酒好きの彼は高粱酒コリアンをチビチビ飲みながら、夜遅くまで机に向かうという勉強一筋の毎日でした。こちらはそのままどころかうっかり近寄ると二つ、三つ年上の彼からお説教されそうなので、そういう時はひたすら敬遠することにした。従って臨時の仕事が急に起こっても時間割は変えられない。動員されるのは遊び好きの私と勉強好きの入江さん、思えば面白い組み合わせだった。真面目で勉強一途の彼は戦後、学者、大学教授として彼らしい立派な業績を残したが、その人も今はいない。

入江さんの入社から2、3カ月たった頃、古野支配人が本社から来京された。温顔に始終微笑を浮べ、話しぶりも穏やかで大変印象深かった。北京にいい若い者2人はぜいたくだ、どっちか1人天津に行けとのこと。入江さんは北京で語学の勉強があるから嫌と言う。そうなれば天津行きは私ということになる。という訳で私の天津支局勤務が決まった。この古野さんの面接、と言ってもそれらしいことは何もなかったが、これで今まで北京支局の臨時雇いみたいな形だったのが、本社から正式認知されたことになったわけだ。

その後、天津から本社、次いで旧満州。昭和10年の春、長春(当時は新京)から松本支社長35の上海へ。11年1月、同盟通信社成立。6月、電通信部合併と同時に新設された東亜部に上海から参加。翌12年9月、盧溝橋事件の直後また上海へ。以後17年3月、華文部創設のため本社へ転勤するまでの上海、南京勤務を含め、大陸生活は通算10年に及んだ。その10年は私の生涯のうち最も変化に富んだ時期と言えよう。それもこれもすべて北京からスタートしたものだ。自費留学と支局勤務を合わせても、わずか1年足らずではあったが、北京の最もよいときに、夢多き若者が若者らしく日夜を過ごした追憶を、今も私は大切にしている。こと

に毎年秋がくると、あの高く青々と澄み渡った北京の秋空が思い出されて仕方がない。

〔「南船北馬」第3号 1983年1月15日発行〕

束の間だった上海支局長

加藤万寿男ますお（元新聞聯合上海支局長）

1929（昭和4）年といえば半世紀も前のこと。中国へは上海を含めて、その後何度も行っているが、いずれも1カ月前後で多少とも長期滞在したのは、この昭和4年だけである。しかもその年は、私にとっては実に多事多端たじたんな年であったが、不思議にその年の出来事は鮮明に記憶している。

やぶから棒に上海に行け

聯合になって3年の1929年の1月のある日、夜勤と宿直で夕方出社したところ、古野伊之助さんから「芳沢謙吉公使が明日、日支交渉の全権として上海に行くから、君に同行してもらうことにする」とやぶから棒に言い渡された。

当時の外信部は中国ニュースの窓口にもなっていたので、日支交渉の中心課題である南京、漢口、済南の三つの事件とその背景については無知識ではなかったが、私はデスクばかりやっていて取材の経験はほとん

どない。国際の頃、岩永さんから「君たちはいずれ外国へ出てもらうから、取材の経験を積んでおかなくては」と大使館回りというのをやらされたことがあって、経験といえどそれくらいである。しかし社命とあればと、行く覚悟はとっさに決めた。だが待てよ、明日は泊まり明けで、福岡誠一君と初場所の相撲を見に行く約束がある。これは明日断るほかない。その頃、私は三枝治市郎、福岡の3人交代で夜勤宿直をやらされ、3日に一度の泊まりだった。

私は明るる日の昼すぎまで平常通り働き、銀座で買い物をして家に帰ったのは夕方近かった。その間、長崎までの汽車の切符、長崎から上海までの乗船手続きなどは、社でやっておいしてくれた。あのころ中国へは、行けと言われれば、すぐにも行けた。旅券もビザも不要。私は既に結婚していて、1歳にもならない女の子があった。むろん女房は寝耳に水だが、別にあきれた様子もなく、社命だからと観念したものと見える。夕飯だけは家ですまして、夜行列車の寝台にもぐり込んだ。

「上海丸」と「長崎丸」という当時としてはスマートな汽船が、神戸―長崎―上海間を往復していて、長崎からの船は夜の出帆だったと思う。早速、芳沢全権の部屋へ伺いインタビュとなったが、芳沢さんは私をしんまえ新前と見てとったのか、それともこの人の癖なのか、「僕がクジュ（口授）するから書きたまえ」とコウジュツとは言わなかった。芳沢さんという人は一語一語ゆつくりと話す人で、それが立派な文章になっていることと有名だということを後になって知った。

ところがインタビュの途中、私は船酔いがひどくなって、「ちょっと失礼させてください」と自室に引き下がった。休憩がよほど長かったようであった。全権の秘書がやって来て「まだか」と催促された。無理を押し出掛けて、全権の口述の続きをどうにか終えた。それから昇目の電報用紙にカタカナで書き入れる作業、これがなかなか手間取った。

やっと発信を終えるまでに、相当時間をくった。これが速成特派員初手の仕事だった。

当時の聯合上海支局は虹口地区の老靶子路にあつて、支局長が波多博、記者は奥宮正澄君、池田、梶原といった英文係、2名の中国人の華文係、吉田松治君、菊地久太郎君などの無線関係者その他である。ほかに前の年から上海へ派遣された塚本義隆、白尾干城、岡本一男の3君は上海で受けたロイター電を日本向けに取捨選択して東京本社へ転電する仕事で、オフィスもロイター支局の中に置いていた。聯合は既に東方通信社と事実上合併していたのだが、聯合はロイターとの契約に縛られて、聯合の名では中国のニュースを送り込めないのです、聯合の上海支局はもう一つ東方の看板も掲げていたようだった。私は日支交渉の特派員ということ、そのことだけの仕事に専念した。

交渉は上海と南京の両地で交互に行われ、従つて両地間を汽車でよく往復した。双方の初顔合わせは南京で行われ、電通は交渉の題目を詳細に羅列、これら各項目について、双方代表者が逐一レビューしたことなど相当派手な電報を飛ばしたらしい。これに反し私の打電は芳沢、王正廷両全権、その他日本側随員の堀内謙介氏(後の駐米大使)以下と中国側随員の顔つなぎなどあつて、お茶を飲んで歓談したという誠にあつさりした内容だった。たちまち本社の外信デスクから電報が来た。電通はかくかく報じているが、君の報道は甚だあつさり過ぎる。どうしたのかと叱ってきた。私は折り返し「自分の報道を信頼してくれ」と打電した。新前特派員のくせに、相当な心臓だなと後になって思った。

その日のことだったか、後の話だったかはつきりしないが、芳沢さんと王正廷の双方の酒量のこと話題になつて、一方が「あなたはハイリヤン(海量=酒豪)だ」と言う、一方が「いやあなたはヤンリヤン(洋量=同じく酒豪のこと)だ」と言い合つたという話を聞いた。膝詰め談判だけが交渉

ではない。こうしたたわいもない歓談と並行して行われるのが交渉であつて、芳沢さんは特に対支交渉ではベテラン中のベテラン。王正廷に至つては1920年のワシントン会議以来、顧維鈞とともに中国外交の大立者で、この交渉は両国の千両役者の大芝居でもあつた。

私が王さんに名刺を差し出したときのことだから、あるいはこの日か、いずれにしても交渉初期のことに違いない。「おお、君は男爵か」とむろん冗談で言ったのだが、以来、私のニックネームは王正廷命名による「バロン」になつてしまつた。終戦後、私は万の略字に変えたが、本名は萬寿山の萬であつた。中国では通りのよい名前らしい。松方三郎先生のごときはそれよりずっと後のことだが、私への手紙の上書きに加藤萬寿男爵殿といったずらをしてよこしたりしたものだ。

南京、漢口、濟南の三つの事件というのは、南京では革命軍が帝國領事館を襲撃して破壊、略奪、さらに居留民を陵辱したと言われる事件。漢口では支那人群衆が日本人居留地へ侵入、暴行したという事件。濟南では日支両国兵の衝突事件で、いずれも1927、28年に起きた事件の解決が当面の問題であるが、ここ数年來、排英、排日、排日貨運動が激化して、上海のイギリス系怡和紡績も日本の豊田紡、内外綿その他の紡績会社も争議が暴動化するなど、国民革命、民族運動が盛り上つて、その余波は各方面に及びつつあつた。

混沌とのんびりした上海

蔣介石政権は28年10月、国民政府組織法といったものを発令して、蔣介石は主席に就任、中国統一を完成したと言われたものだ。中国の鼻息が荒くなりつつあつた時期である。もっとも蔣介石の中国統一で、青天白日旗が全土に翻つたと言われる半面、同じ年の6月、張作霖の爆死事

件が満州で起こっている。錯綜した中国でもある。

私の初めて接した上海は、国民革命とか民族運動の胎動などと言われている半面、これまで通りの列強の植民地、国際都市の様相が依然濃厚で、一口に言えば混沌とのんびりした都会だった。軍靴の響きもなかったし、各国の兵隊の動きなどもほとんど見られなかった。

聯合の常宿は大和ホテルというのだったが、そこにはしばらくいただけで、満鉄の駐在員の大塚君―彼は中国共産党の研究者でもあった―とどうして知り合ったのか記憶がないが、彼の世話で辰巳屋という満鉄の常宿へ移り、ここが気に入ってずっとこの宿にいた。辰巳屋は黄浦江の船着場に近く、早朝から船荷の運搬に当たる苦力の「エーホー、エーホー」の掛け声を目覚まし合図のように聴いたものである。この宿ではマンガローを安く手に入れてくれて、毎朝のように食べた。

朝日の尾崎秀実君、満日の大谷信彦君とは特に親しくなった。2人ともなかなかの料理通で、よく支那料理に案内してくれた。上海名物といわれる生の川エビを2人ともおいしそうに食べるのには驚いた。美食家であり大食漢でもあったこの2人は、真面目な中国研究家で、中国問題には見識を持っていた。とくに尾崎君は日支交渉の協力者だったが、大谷君とは郷里が同じ名古屋の熱田。私の小学校の同級生の何人かが、大谷君と中学が同級だと分かり非常に親しくなった。虹口地区の新雅という店へ飲茶を食べによく行ったものだ。南京路には気の利いたフランス料理のレストランがあり、広東、四川、北京とバラエティーに富んだ支那料理が豊富に安直に食べられて、まさに料理天国だった。複雑な魅力に富んだ上海には、割と早く同化できて、ブロークンな上海土語を操って黄包车（人力車）をかなり自在に乗り回したものだ。多くの人がそうだったろうが、私は上海の生活が楽しかった。

フランス租界の豊田紡公館が芳沢全権をはじめ堀内参事官など随員の

宿舍で、取材の関係でフランス租界にはよく行った。洋徑浜のロイター支局にもよく顔を出した。中国人の記者にも知り合いがたくさんできた。申報記者の顧君と、ロイターの記者でアメリカの大学出身の趙君とは特に親しくした。趙君は王正廷の信任が厚く、王正廷のところは木戸御免であった。

電通が特に競争相手だったことは前にも触れたが、電通の支局長はアメリカの伍長のあだ名をもった神子島梧郎君、その下に下条雄三君がいた。日支交渉では電通は毎日と協力し、こちらは朝日と組んだ関係から尾崎君と接触することが多かったが、支局長の辻君とも記者の森山喬君とも親しくしていた。

南京では薄汚い宝来館というのが唯一の宿屋で、各社ともここに泊まった。南京の支局長は支那育ちの佐々木健児君、彼は当時二十四、五歳で非常に早熟、威張るというのではないが鼻っ柱が強かった。里見甫君も満鉄の南京駐在員だった。泰然としていて、私は彼の仕事をしている姿を見かけたことがない。後年、国通幹部の三人男と言われた佐々木、里見、大谷の3君が同じころ南京、上海で親しい交友があったのも不思議な縁だと思う。南京は鴨が良く、安く買えたので、波多支局長から今度南京から帰るときには鴨を買ってくるように頼まれたことがある。上海ドルの1ドルで5、6羽買えたと思う。上海へ持ち帰り、波多邸で鴨すきに舌鼓を打ったものだ。

グロスター公と英巡洋艦に

4月半ばのことだったと思う。英国王から天皇陛下に贈呈するガーター勲章の使節として第3皇子のグロスター公が巡洋艦サフォーク号で日本に向かっていた。私は、朝、毎、電通の各社がサフォーク号に乗艦

許可を得て報道に当たるため特派員を派遣、既に上海を通過し香港、シンガポール、さてはペナン辺りまで向かっているという情報をキャッチした。私は波多支局長の了解を得て「聯合はこうした中で何もしないでよいか」と本社へ打電した。すると私にすぐ香港へ出発しろと言ってきた。

すぐ行けと言われても、もう後手である。思案の末、ロイター上海支局から本社を通じて英外務省と海軍省へ働き掛けてもらうほかに手がないうという結論に達した。ロイターの支局長はターナーと言ったと思うが、彼に事情を説明して懇請した。幸いに記者のコックス君とは親しかったので、彼も力添えをしてくれた。このコックス君、後に東京特派員となり、スパイ嫌疑で収監されて自殺した。私がワシントンにいたときの出来事ではあるが。彼の上海時代、上海倶楽部などという日本人があまり寄りつかなかったクラブへ招いてくれたのも彼で、良い友であった。サフォーク号に乗艦ができるかどうかの返事は香港で聞くことにして、上海を出発した。東京から上海へ来た時と同じ伝である。

先発している各社の特派員というのは、朝日は思い出せないが、毎日、英文毎日の編集長毛利八十太郎君（この人は国際通信にいた）という英文の大家、電通は上海支局長の神子島梧郎君。ところが、香港へ着いて驚いたことに電通、聯合両社の香港通信員を同じ人物が兼ねていた。秘密が保たれていたのだらうかと心配だった。

幸い私には「ロイター特派員として乗艦を許可する」という返事が届いていた。そして秘密も保たれていた。早速香港政庁と連絡をとって、もうもろの手続きを完了した。私は香港での歓迎行事にもすべて招待を受けたが、朝、毎、電通は羨望というよりとげとげしい空気まで醸し出して、香港政庁の招待までボイコットした。

香港では夏服やら、軍艦の中で必要だとテールコート（燕尾服）まであ

つらえる仕儀となったが、一流の仕立屋だったので、2、3日で器用に仕立ててくれた。サフォーク号には20人近い士官がいたが、毎夜のディナーには正装を着用したので、私もそれに準じて燕尾服を着なければならなかった。エチケットのやかましい国柄だ。

5月初旬、香港を抜錨、横浜まで5、6日の航海である。グロスター公殿下との会見をはじめ、毎日2回記事を送った。初めはローマ字で送っていたが、まもなく英文に切り替えた。一応ロイター特派員ということになっているが、それは船の中だけの肩書で、すべて聯合電として取り扱われた。記事にするネタがないのに苦勞したが、私は20人の士官の顔と名前を懸命に覚えて、彼らから何かとネタを引き出した。私は大尉待遇ということで、独立の部屋と従者までつけてくれた。

聯合が国内通信をやり出したのは創立2年目の1927年、それからやっと2年のことで聯合としては国内通信の存在を示したい時期であった。そうした機運に乗って、私のスクープは、大いに喜んでもらえた。

1月に唐突に東京を出発して以来、まる4カ月ぶりの帰京である。しかもイギリスの軍艦に乗って帰り、友好国から陛下への使節を迎える歓迎の渦の中を横浜に上陸するという夢のような話だった。

燕尾服の悶着が特賞に

ガーター勲章贈呈という日英関係の行事が新聞に大きく扱われた時代で、世の中はまだ平和だった。新緑の美しい季節に私はグロスター公一行の日光、京都、奈良の観光旅行に社会部記者と同行。それが済むと上海へ再赴任するように命ぜられた。こんどは家族同伴、上海にとっしり腰を据えるように言われた。出発に先立って、古野さんから「波多博」さんには支局長を勇退してもらい、君をその後任とする。しかしこのこ

とは岩永さんか私のどちらかが上海に出掛けていつて話をつけるから、それまでは一切口外してはならない」とやかましく言われた。

私はもう一つ、社の会計と難問をかかえていた。香港出張の会計報告の中に燕尾服その他付属品一式の代金を計上していたが、会計の石部幸式さんは私に、それを払ってから上海に行けといってきかない。私は何も好んでこうしたものを調製したのではない、仕事の必要上やむなく作った品で、今は私には必要でなくなったから社で引き取ってくれと言いつ張った。結局、古野さんの裁定で特賞を出すから、その中から払えということで落着。家族を伴って上海へ出発したのは6月の初めだったと思う。

今度の上海赴任は前と違って、途中名古屋へ立ち寄り老父の顔も見なし、芦屋ではアメリカの大学時代の友人の家に泊りして、神戸から船に乗った。上海では前に厄介になっていた辰巳屋にひとまず落ち着いた。今度は家財道具を持っているし、それに私は当時われわれの間でそう呼んでいた「支那屋」——中国問題の専門家——になる覚悟で乗り込んだので、中国関係の書物や中国語の参考書などを相当量持って行った。

早速、家探しを始めたが適当なのが見つからない。軒だけ好みに合った家があつて、そのうちに空くというので待つことにした。その間、英字新聞で新公園の近くの住宅街に英国人の家庭が下宿人を探しているという広告を見た。当たってみたら、若夫婦と亭主の母堂の家庭で、一番よい部屋を提供してくれ、食事も家族と一緒にのものを食べてもらおうという。家を持ていろいろ煩わしいことに忙殺され、社の仕事が妨げられたり、それに女房にはまず上海の生活に慣れてもらうことだと、大きな荷物は辰巳屋の倉庫に預けたまま、この家に下宿することにあつさり決めた。使用人は男のコックと女中、それに小娘の阿媽（アママ乳母）。果たして良い家庭でたちまち親しくなった。

西欧人が経済支配

この家へ移ってから一カ月ほどたったころと思うが、この家のイギリス人老婦人から、娘が嫁いでいる家がフランス租界にあるが、是非お見せしたいと誘いを受けた。直ちに応諾してある日曜日、一緒に出掛けた。なるほど驚くほど大きな屋敷で、こういうのをマンションというのである。娘の主人はポルトガル人の実業家。何よりたまげたことは、一ダース近い子供たち。みんな小さいが、一人一人阿媽に伴われて、大きな階段からパーラーへゆっくり下りてきて勢ぞろいしたことだ。いちいち紹介され、にぎやかなお茶が始まった。搾りたての牛乳はどうかと言われ、ついでに牛も見ないかというので、外へ出て見ると立派な牧舎に牛が何頭かいた。むろんマフィンの類も自家製のもの。

仏租界にはこうしたマンションの持ち主がたくさんいて豊かな生活を営んでいる。これに反してついその前年まで、各租界の公園には「犬と支那人入るべからず」の立て札があつたものだ。

中国政府は治外法権の撤廃を宣言したものの、植民地は現実には上海にまだ残っていた。上海の経済を支配していたのは、イギリス人を中心とする西欧人だった。このような実情の一端をごく自然な形で見ることできた一日であつた。上海では見るもの、聞くもの、読むもののすべてが興味深かった。私は上海と中国に大きな好奇心、好学心を抱いた。

束の間の支局長

こうした中で波多さんは薄々何かあると感じていたのであろう。私の着任以来、何かにつけて東京で自分のことを何か聞かなかったかと尋ねられた。私は何も聞いておりませんと答えるほかなかった。こうした状

態が2カ月余り続いただろうか。ある日突然、本社から波多さんに電報が来て、支局長を私に引き継ぐようにと言ってきた。むろん波多さんは突然の指令に驚かれたと思うが、私としても大いに当惑した。岩永さんも古野さんもやって来ないで、電報一本で処理されたからである。

波多さんは東方通信社が小さな存在であったにしろ、上海で創立されて以来の関係者で、1920年に本社を上海から東京へ移し、再出発してからも首脳³²の一人。古い同文書院³²出で、上海とはつながりが深く、上海の名士だった。その波多さんの面子^{めんつ}丸つぶれという事態だ。また私が上海へ来るに至ったきっかけも波多さんの進言によるものとかで、蔣介石新政権の要人にはアメリカの大学出が多く、英語の分かる記者がアプロチするのが好都合だというのだったらしい。そのことは別として、聯合と東方の上層部には合併前後から複雑な問題があったようだ。むろん私どものあずかり知るところではないが、社長の伊達源一郎氏、主幹の座間勝平氏、そして波多さんの旧東方首脳者は合併後間もなく相前後して退社されることになった。

ところでもう一つ悪い事態が重なった。フランス租界の三井物産のコートでテニスをした酷暑の日の翌日から午後になると高熱が出る日が続いて、私は腸チフスと診断され、即日、草島病院というのに入院した。波多さんと引き継ぎをしてから3週間ほどのことだ。支局では波多さんに対する同情が湧いている上に、30歳の若造で、経験未熟の私に対する不信感といったものが漂っていたように思われる。

私は病床にいて外界と遮断されているので、何かと事情が分からないし、何一つ手を打つわけにもいかない。健康を早く取り戻して仕事ができるようになりたいと、ひたすらその日を待つのみだった。そのうちに、わが幼児は百日咳^{ひゃくちせき}にかかり、女房はせっかくなじんだイギリス人の下宿先をついに引き払って病院の一室を借りることになった。一家をあげて

の病院生活となった。医師からやかましく注意されていたが、私はこっそり歩行の練習まで始めて、一日も早く出社したいと願っていた。

ちょうどその頃、東京から福岡誠一君が上海へ派遣されて、病院を訪ねてくれた。退院できるようになったら、上海を引き揚げて東京に帰ってこいと伝えにきたのだ。これは私にとっては慰めどころか、一番悲しいニュースだった。私は前述のように「支那屋」になる決心までしてやってきたものであつて、上海ですっと仕事を続けたかった。しかし本社の意向がそうであるなら、いずれ帰京せねばならぬことは分かっていたが、私は大いに悩んだ。そして日本へ帰って、健康に自信ができたなら、社を辞めようと思えるに至った。女房にも話した。何ということなしに、社が嫌になった。ひとり窮地に追い込まれて、人生の寂寞^{せきま}といったことを感じた。結局私の上海支局長は短命に終わり、後は先輩の結束武^{けつそく}二郎さんが就任された。

上海を去る時、朝日の尾崎秀実君―説明の必要もないが後年ゾルゲのスパイ事件で死刑となった―とは家族ぐるみ親しくしていたので、餞別^{せんべつ}に小さなコーヒー茶わんとデミタス用の銀のさじを半ダースいただいた。支那街で買った象牙の箸とともに今も愛用している。

日本へ帰ったのは10月半ばだったと思う。幸い女房の母親が千葉県山武郡の山奥へ移り住んでいたもので、そこでしばらく休養させてもらうことにした。秋の日を浴びて、健康づくりに励んだ。幼児も千葉の山村にいる間に、ようやく立て歩いて歩けるようになった。そうした日々が続いていたある日のこと、社から電報が届いた。ロンドン軍縮会議へ派遣するからすぐ帰京せよという文面だった。全く予期もしなかったことで、こうまで親切に自分のことを考えてもらったのかと感激した。ひそかに胸に温めていた社を辞める考えは、これで吹っ飛んでしまった。岩永さんに随伴、若槻全権一行の乗船「サイベリア丸」で太平洋を渡り、途

中ワシントンに立ち寄り、さらに大西洋を越えてロンドンへの長途の旅に就いたのは12月早々であった。全く変転の激しい1年だった。

〔南船北馬〕第2号 1982年5月15日発行

上海でロイター電を転送

塚本義隆（ざいりゅう）（元新聞聯合上海支局）

昭和2（1927）年7月から丸2年間、私は新聞聯合社の特派員として上海で勤務した。当時の上海支局（支局長・波多博氏）は共同租界の老靶子路にあつて、支局員は奥宮正澄君ら6、7人であつた。

私の事務所はバンドと愛多亜路のクロスした角にあつた大北電信公司（グレートノーザン・テレグラフ）というデンマークの電信会社のビルの中2階の一角にあり、支局の一般業務にはタッチしないで、ケーブル電報で毎日数千語のニュースがロンドンからロイター上海支局に送られてくる中から、二、三千語ほど日本向けのものを選んで、新聞聯合の本社に転送するのが私の仕事であつた。

たまたま昭和2年の8月に上海で極東オリンピックが¹⁸開かれた。競技場から競技の模様や記録が支局員から私の事務所¹⁸に送られてくる。それを独特の英文暗号にして、大北電信のケーブルで新聞聯合長崎支局に打電した。当時上海と日本の間にはケーブルが3回線あつて、うち2回線は大北電信の所有で、他の1回線が日本電信局の上海―佐世保間のものであつた。大北電信のケーブルは上海―長崎間をわずか5分という高能

率のものだが、日本の海底線は、カタカナ電報が1時間以上かかることを知っていたので、私は英文による大北電信線を使ったのである。

電通は極東オリンピックの記事記録を日本電信局経由のカタカナ電報で打電していた。両社の送信競争に大差のついたのは当然である。事務所での相棒は結束武二郎先輩。私が英文の暗号を組む役、結束さんは競技場からの市内専用電話を受け、組まれた英文暗号をタイプした。長崎での受信と暗号解読は山口巖君の担当。長崎―東京間は新聞予約電話で連絡したが、その間に下関支局が中継に当たり、そこには船木重光君がおり、大阪支社には高橋勇君が頑張っていた。

当時私は上海市東部の西華徳路に住んでいたが、仕事の開始は午前5時だから起床は4時。4時半には雇いの人力車で支局別館の事務室に駆けつけていた。時差の関係からロイター電が多量に着信するのは夜半だからである。この事務所と一緒に働いたのは鈴木俊久、白尾干城、岡本一男の諸君であつた。

昭和2年は中国各地の軍閥間の戦乱が終息へ向かった頃で、蒋介石が北伐軍総司令として広東から武漢を経て南京に入城し、南京政府を樹立した直後である。私の着任間もない頃、蒋介石南京政府主席と宋美齡夫人は日本の新聞記者を南京に招待した。私も上海から出向き、元気だった蔣夫妻を囲んで乾杯した情景は今もはっきり覚えている。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

国際通信入社1カ月で聯合発足

白尾干城（元新聞聯合上海支局）

大学での社員募集広告に「英語に堪能で外国勤務可能な人」というたい文句に釣られて入ったのが国際通信社で、大正15（1926）年4月のこと。一緒に入ったのが岩本清、浜州一の両君で、入社後はスケルトンと呼ばれる骨ばかりの英語を毎日読まされての実地訓練に励んだが、わずか1カ月で「国際」は「日本新聞聯合社」と看板を書き替え、内信部も新設して、いわゆる「ナショナル・ニュース・エージェンシー」として新発足することとなった。

東方通信社も同時に合併したので、中国関係通信も聯合で取り扱うようになったものの、外国通信は電通がUPと組んで、AP、ロイターと提携している聯合と大いに競り合ったので、われわれ外信部員は昼夜ねじり鉢巻きで各社への速報に力を入れた。毎日、朝刊や夕刊が来る度に、鵜の目鷹の目で外電を通読し、勝って当たり前、負ければ早速、関係特派員や通信社に訓電が飛ぶという毎日の繰り返しであった。

外信部の仕事にもようやく慣れた昭和2年11月に、私は上海支局勤務を命ぜられた。仕事はロイター本社から同社の上海支局に来る極東向けの電報を選別して、日本に必要なものだけを聯合本社へ転送する役だった。この仕事には既に塚本義隆^{ぎりゅう}氏と岡本一男君が当たっており、私は本社転勤の鈴木俊久君の後任として赴任したのであった。当時の上海は至って平穩で、共同租界の新公園の側にある聯合の宿舍から、バンドの大北電信^{たいほく}グレートノーザン・テレグラフ社内にある事務室に3交代で通って、いつも1人で中国人のボーイを使って転電の仕事を続けたものであ

る。

その頃は就職1年半ばかりの独身時代だったので、余暇も思いのままに費やすことができ、非番の昼間は日本人倶楽部^{くらぶ}で玉突きや弓道の練習、競技に過ごし、弓の優勝杯を手にしたこともある。夜は当時流行のダンスに興味を覚え、岡本、亀谷両君とホール通いに熱が入り過ぎて、懐中払底のため唯^{ただ}の一度ではあったが、質屋ののれんをくぐるといふ窮余の一策を講じたこともあった。

身軽なため宿舍も2年足らずの間に3カ所も替えた。最初の宿舍からメンズハウスという独身者のアパートへ。次いで英語の勉強にもと考え、フランス租界の英国人の貸間へと転じたが、あまり役に立たなかった。最後は森館という日本下宿に移り、ここで転勤となり、4年6月、本社外信部へ復帰したのであった。

当時の上海支局長は波多博氏で、支局員に奥宮正澄、亀谷利一、吉田松治氏らがいたが、波多、奥宮、亀谷3氏は既に他界され、今昔の感に堪えない。

（「南船北馬」創刊号 1981年11月発行）

汪^{わう}政権の成立から崩壊まで見届け

川崎正雄（元聯合上海支局、元同盟上海総局）

三十数年の新聞記者生活では、青年時代から中年にかけての前後8年半を過ごした上海に一番深い印象を持っている。最初の3年間は新聞聯

合上海支局で文字通りの駆け出し記者。後の5年半は名目的には同盟通信上海総局勤務であったが、実際の仕事は当時南京に成立していた維新政府³⁰の中華聯合通訊社³¹(原注Ⅱ汪兆銘政權成立とともに同政權の中央通信社として引き継がれた上海分社の、主として編集上の面倒をみることであった。この間、松本重治^{しげはる}、松方三郎、結束武二郎^{けつそく}、岩本清、佐々木健児の諸先輩からいろいろご指導をいただいたことは、まだ昨日のような記憶である。

昭和6(1931)年8月、聯合北京支局から上海支局に転勤となったが、翌月には満州事件が勃発し、翌7年1月には上海の日本海軍陸戦隊と蒋介石軍の衝突(第一次上海事変⁷⁹)となった。北四川路^{きたしせんろ}にある陸戦隊本部で取材に当たったが、本部屋上に敵の迫撃砲弾が命中し、本部がぐらつと揺れたので青くなったことを、今でもよく覚えていいる。迫撃砲弾は古物のため破裂しなかったから命拾いしたのである。

事変後、日中関係はさっぱり好転しなかったが、中国人記者との情報交換は比較的順調であったと思う。その頃の中国人記者中、数名については、今でも時々顔を思い浮かべることがある。

9年6月、上海から本社社会部に移ったが、社会部在勤中も11年12月の西安事件、12年7月の盧溝橋事件^{ろこうきょう}では中国への出張を命じられた。西安事件では中国全土が混乱するとの想定のもとに漢口行きを指示されたが、船に乗って長江をさかのぼり漢口に着くと、蒋介石は既に張学良^{ちやうがく}を伴って南京に帰ってしまった、まずは一件落着となつてがっかりしたものである。これに反し盧溝橋事件では出張の時期が事件発生後間もなくであったために、かなり生々しい場面に出くわした。中国関係記者としては誠に機会に恵まれたことに感謝している。

盧溝橋事件の出張から本社帰還後、東亜部で2年余り過ごしたとき、当時、中華聯合通信の実質的な最高責任者になったばかりの大平安孝氏

から、同社上海分社を受け持てと口がかがつてきた。実はその少し前にも北京から新設の新華通信社を手伝わないかと言ってきたが、同じ中国語の通信をやるなら、幾分事情を知ったところの方がよいのではないかと思つて上海を選んだ。出発したのは14年9月だったと思う。

中華聯合通信上海分社には30人近くの中国人社員がいたが、この中には最初の上海在勤時代に付き合っていた中国人記者がいたので、運営は割合、楽であった。もっともその大半は現実になうまく妥協していく中国人の渡世術に助けられたということであろう。

そしてこの間、不幸にも日華事変は全面的に拡大し続けたが、汪兆銘(汪精衛^{わうせいゑい})政權の成立から崩壊直前までの動きを観察できたことは忘れ難い記者冥利^{みょうり}となった。

(「南船北馬」創刊号 1981年11月発行)

聯合、同盟で中国生活14年

菊地久太郎(元聯合通信上海支局)

昭和3(1928)年7月、黄浦江^{かうほくわう}の匯山碼頭^{かいざんまとう}で会計の今井修二さんの出迎えを受けて「上海丸」を下船しました。苦力^{クワリ}の怒号と喧噪^{けんそう}、えらい所に来たものだと思います。

当時の私の職場は聯合上海支局で、老靶子路^{らうたしじろ}の3階建ての古い洋館、波多博さんが支局長で総勢10人。塚本義隆^{むらもとよしか}さん、白尾干城^{しろおし}さん、岡本一男さんの3人は外電担当として愛多亜路^{あいだあろ}の事務所でロイターの転電を主

にしていた。

上海支局に勤めて3年後、結束武二郎支局長のとき、昭和5年10月、250^{ワツ}送信機が再び活動を始めたころ、福州総領事館の囑託として上海を離れました。福州在勤4年、その間満州事変、第1次上海事変が勃発しました。しかし当時の福州は対日関係が穏やかで何事もなく、升井芳平さん製作の小型トランクの受信機で東京からのローマ字放送を受信し、関係方面に提供して少しはお役に立ったと思っています。やがて福建事件が勃発、応援に駆け付けた吉田松治さんの携行した小型送信機で上海と連絡、松本重治支社長から「貴電好評続報頼む」との激励電に奮じたものでした。

9年10月、再び上海に戻ることに、それ以来聯合、同盟と上海暮らしました。12年7月、支那事変勃発とともに新たに天津—上海線を設け、上海経由で戦況を刻々本社へ転電しました。12年8月、戦火が上海に燃え移り、陸戦隊の近くにあったチェリー・テレスの通信所で「戦争、上海で始まる」の第一報を打って、虹口^{ホンコウ}のやや安全と思われたホテルに引き揚げたことが思い出に残っています。

それからは前線へ前線へと揚子江沿岸各地に従軍、その間、吉川松さんとともに最前線から第9師団南京城突入の第一報を打電できたことは忘れられません。上海では総局の通信施設の整備に当たり、中国の青年たちとともに仕事できたことも思い出です。17年10月、岩本清総局長から「菊地君、内地も見ておけよ」と本社転勤を命ぜられて帰国しました。3年から17年まで14年の長い中国生活に終止符を打ち、その間結婚して2児を得ました。中国在勤中、よい友人多数に恵まれ、よく飲み、よく遊んだことが思い出されます。

（「南船北馬」創刊号 1981年11月発行）

上海は国際宣伝戦の坩堝^{るつぽ}

堀口瑞典^{よのり}（元新聞聯合上海支社英文部長）

昭和10（1935）年の晩春、私は岩永裕吉専務理事に大げさな肩書をもらって東京から上海へ向かった。その肩書というのは「聯合通信社上海支社英文部長」という仰々しいもので、入社してわずか半年足らずの26歳の若輩には、不相応のように思った。それだけに私は責任を感じて赴任したのである。

当時の上海支社英文部は「部」というものの、部員は私を含めて3人であった。また聯合はこのミニ英文部でさえも賄う財政的余裕がなく、その運営資金をプレス・ユニオンという組織に頼っていた。プレス・ユニオンは、3年前（昭和7年）に起きた第1次上海事変の最中、中国側が流したデマや事実を歪曲した捏造新聞記事のため、上海在住の欧米人の間に反日感情が沸き上がったので、それに対処するために日本の官民有志が出資して、日本側の情報を欧米系の新聞やその他の報道機関に提供して、少しでも対日非難を和らげるためにつくられた、いわゆるPR機関であった。その後プレス・ユニオンは聯合にある程度の経費を保証して、英文通信の発行を委託していた。そういうことで、松本重治支社長はプレス・ユニオンの専務理事を兼ねていた。

上海に到着した私は、まず中央郵便局近くの四川路^{しせんろ}に面した新亜飯店に荷物を置いてから、早速共同租界とフランス租界との境になっていた愛多亜路^{たいあろ}の大北電信（グレートノーザン・テレグラフ）公司ビルの4階にあった支社を訪ねた。そこには、松本さんをはじめ、発信部長^{しやほんちやう}莊原達さん、華文部長奥宮正澄さんらが机を並べて忙しそうに仕事をしておられた。

少し離れた一角には英文部の牧内正男さんと、梶原国生さんが威勢よくタイプライターを打っていたのが印象的だった。

翌日、私は松本さんに連れられて、スポンサーに当たるプレス・ユニオン賛助会員に着任の挨拶に出掛けた。このお披露目巡りで総領事館に立ち寄ったところ、2年ほど前に日本が国際連盟を脱退した時に松岡洋右^{すけ}首席代表の随員として同行した本野清一書記官に会った。総領事館で情報を担当していた本野さんは、家族を東京に残して上海に単身赴任していた。

話をしているうちに、本野さんはフランス租界で借りた広いアパートで一人暮らしをしているが、寂しいので、よかつたら落ち着くまでの間でも泊まりに来ないかと誘ってくれた。私は二つ返事で有り難く応じた。というのは、泊まった新亜飯店は、開店して間もないモダンなホテルではあったが、何しろ泊まり客の大多数が中国人であったため、ホテルは中国人向きに経営されていた。ベッドにはマットレスがなく、板の上にせんべい布団が一枚敷かれているだけで、また夜通し麻雀^{マージャン}の牌をかき回す音や、男女が大声で話しているのが聞こえてきて、私は閉口していた時であったからだ。

そういう訳で、私は上海の昼の世界と夜の世界への入門の手ほどきは、本野さんから受けることになった。新築の高層アパートでベランダと浴室付きの部屋を与えられ、私はそれからしばらくの間、極めて優雅な生活を送ることができた。下宿代はきちんと取られたものの、食事から身の回りの世話を楊^{ヤン}というボーイ兼コックが見てくれたし、洗濯と掃除は楊の妻君が丁寧にやってくれた。

本野さんは、持病の糖尿のため酒は一切口にしなかったが、大変な健康^{けん}啖^{たん}家で、また美食家でもあった。楊が作った中華と西洋料理は家庭料理とはいえ、凝^{けん}っていておいしかった。しかし、本野さんは公務が許す限

りに月に数回、夕食を外でとることにしていて、その際は私を誘ってくれた。食通の彼は、料理がうまい小さな店をよく知っていた。食べ物に関する彼の知識は国際色豊かなもので、中華からフランス、イタリア、ロシア、イギリス料理でうまいものは何かを的確につかんでいて、その要点を教えてくれた。これは後日非常に参考になった。

2人で外食するときは割り勘にしていたが、禁酒の本野さんと酒飲みの私とで料理屋の勘定を折半すると、いつも本野さんの歩が悪かったのが気の毒だった。食後、消化を助ける意図もあって、時折デルモンテというナイトクラブに足を向けた。本野さんはジュースかジンジャーエールで渴きを癒やし、私は水割りを飲みながら白系ロシア人のホステスとダンスを楽しんだり、よもやま話をしたりして時を過ごした。酒好きの私にとっては、上海での酒の安さは天の賜物であった。当時スコッチウイスキー一本の小売値は1米ドル（日本円にして2円50銭）で、割高のナイトクラブ辺りで数杯飲んでも、そう懐には響かなかった。

当時の上海は激しい国際宣伝戦の坩堝でもあった。中国、英、独、仏の各国通信社は、長年にわたって確固たる地盤を築いており、聯合の英文通信がその間に割り込むのは容易ではなかった。しかも、英字紙は中国系、英国系、米国系に分かれており、その編集方針では自国の利権擁護を優先させていた。通信社では、ドイツのトランセアンはナチス勃興の波に乗ってますます羽振りがよくなり、新しく開発された高速ヘル式無線受信装置を駆使してフランスのアバス^{アバス}に迫れば、アバスは負けじと配信量を増やし、ヨーロッパからのニュース、特に外交問題に関する記事では、どっしりと構えていた老舗、英国のロイターを質と速さの点で追い抜く気配を見せていた。

中華電訊社は、アメリカで教育を受けた優秀な英文記者を使って通信を発行していた。

聯合は、東京からモールス符号で送られてきた邦文ニュースと、現取材材の記事、または南京支局から送られてきた記事を英訳して、1日数回配信していた。この各通信社によって配信された原稿は、莫大^{ばくだい}な量に達し、新聞社のデスクは取捨選択に苦勞していた。

各通信社は当然自社のクレジット付きで通信が新聞に掲載されることを狙っていた。ただ聯合は、この点で大きなハンディを抱えていた。ロイターとの契約で、聯合は自社の発行する通信をロイターに提供する義務を負わされていた。ロイターは聯合から得たニュースを、あたかも自社取材の記事のごとく、上海を含めた全世界に配っていた。そのため上海では聯合のニュースが一言一句変わらずにロイターのクレジットで英字新聞に載ることが多かった。ロイターが、このようにして他人のふんどしで相撲をとる行為は、言うまでもなく報道倫理に背いていたし、そのことを承知で平気でロイターがやっていたのは、イギリス人の海賊根性の表れとしか思いようがなかった。

しかし聯合は、当時のロイターとの力関係から、悔しくてもニュースの「盗用」に対して抗議する立場ではなかった。とは言うものの、記者としては、自分の書いた記事が、そっくりそのまま他社のクレジットで新聞読者の前に出されることは残念至極であった。

夏が近づいて、水が欲しくなったある日、私はうかつにも水道の蛇口から水を飲んでしまった。それから数時間後、猛烈な下痢に襲われ、トイレに数回駆け込んだ。早速、福民病院で診察してもらったところ、その頃流行していた長江赤痢の疑いありとの診断であった。しかし、細菌検査をしてみないと、はっきり分からないとのことだったので、取りあえず薬をもらって帰宅した。その頃はまだ抗生物質が発見されておらず、与えられた薬は通常の下痢止めの一種の解毒剤クレオソート錠だった。

医者の指示通りそれを飲んで、下痢はいっこう止まらず、ますます

トイレの厄介になるはめになった。それに熱が出て、どんどん衰弱していくのが感じられた。翌朝、ふらふらしながら浴室に行ったところ、鏡に映った自分の顔を見て驚いた。目がくぼみ、その周りが黒ずんで皮膚も青ざめていた。

ようやくのことで床に戻ってうたた寝をしていたら、楊が茶を持って現れた。楊は私の様子を見るや「マスター、早く治さないと命に関わりますよ」と心配そうに言った。そして、「下痢には大蒜^{おおびろ}（ニンニク）が一番よく効きますよ。試してみませんか」と中国伝来の治療法を勧めてくれた。私が「頼む」と言うと、楊は台所から細切れにした大蒜を茶匙^{ちゃし}に山盛りにして持ってきた。それを飲むのは苦勞だったが、何とかして飲み込んだ。それから2時間ほどたって、体が急に温まり、油汗が一斉に全身から噴き出した。同時に腹痛が弱まり、便通の回数も減った。この荒療治を2日ほど続けたところ、下痢は完全に止まり、食欲も出てきた。数日後には完全に回復し、出勤できるようになった。

しかし困ったことには、多量の油汗で、大蒜の臭いが寝室から寝具にまで染み込み、楊が一所懸命になってその臭いを取ろうとしたがどうしても駄目だった。また、本野さんもアパートに漂う強烈な大蒜の臭いに悩まされていた。とうとう衣類から枕、マットレス、敷布等を焼く以外にすべはないということになった。一口の水が結局えらい高いものになっていた。

〔「南船北馬」第2号 1982年5月発行〕

汪兆銘狙撃現場を撮影

久我豊雄（元新聞聯合上海支社）

初めての外地勤務で上海へ渡ったのはもう50年前になるが、近ごろはやりのハイジャックや国際的なテロ事件のせい、日本人がやたらと狙われた当時の上海というよりは、全国的な抗日機運の盛り上がった頃の上海の駆け出し時代を思い出すことが多い。

ちょうど閩東軍が「北支工作」を振りかざして露骨な策動を始めたころで、中国側でも、汪兆銘が対日軟弱外交のやり玉に挙げられ、お膝元の南京で狙撃されたり、外交部次長の唐有壬が上海で暗殺されたりした。共産党が仕掛けたワナとか、国民党内部のあつれきとか、反蔣運動の苦肉の策といった、さまざまな説が乱れ飛んだが、全国的な抗日救国運動の高まりのなかで、日本人居留民の不安は日増しに高まっていた。海軍の水兵が抗日テロ団に殺傷された頃は、まだそれほどでもなかったが、街を歩いている一般の日本人がやみくもに狙い撃ちされるようになると、不安は恐怖に変わった。

犯行はいつも夕方、それも人通りの多い繁華街で起こった。特に、共同租界から北へ延びる北四川路の一角、日本人がよく通るところが危ないといので、付近の飲み屋などはぼったり客足が途絶えた。通行中の怪しい中国人の身体検査が行われ、手にした本の中味をくり抜いて、中にピストルを忍ばせた証拠物件なども見かけたが、犯人はいつも素早く横町へ逃げ込んで、捕まらなかった。

死体の解剖に立ち会ったこともあるが、頭の皮をはいで、前髪がベロリと顔面に垂れ下がった姿や、頭の鉢を上半分取り外して、中の脳髓を

二つに割ると、後頭部から弾道に沿って両側が真っ赤に充血し、額のところで弾が止まっていたところなど、まだ生々しく眼底に残っている。

それでも、今日は大丈夫だろうと空元気を出して、飲みに行ったこともあるが、ビクビクもので飲んでもうまくない。そこであるとき、知恵のあるのが河岸を変えて東の外れの楊樹浦で飲もうと言いだした。適当なところを探しあぐねて、やっと着いてみると、店には誰もいない。帰ろうとすると、ようやく姿を現した女給から、今近所で日本人がやられたと聞いたときはぞっとした。一足違いで命拾いしたうえ、すぐ社へ電話を入れたのは、けがの功名とでも言えようか。

汪兆銘が狙撃されたとき、たまたま僕は六中全会（1935年に開かれた中国国民党中央執行委員会第六次全体会議）取材のため南京支局へ応援に来ていた。初めての出張ということで、上海でカメラを買って込んで、手ほどきを受けた。だが、いざとなるとさすがに気が引けて、他の記者のように、カメラを肩に掛けるだけの度胸がなく、ズボンの後ろポケットに忍ばせた。そのおかげで、会場の中央前部へ入る時、他の記者はカメラを取り上げられたのに、僕は知らぬ顔をしていた。

記念撮影の直後、汪兆銘が狙撃されると、辺りは大混乱に陥った。記者団は少し離れた所から撮影を見守っていたが、最初の銃声で夢中でカメラを手にした僕は、手当たり次第に撮りまくった。とうとう中国側に捕まって、倉庫のような大きな部屋へ連行された。そこには、各社の記者がすでに大勢押し込められていたが、誰も写真を撮っている様子はない。急に胸を締め付けられるような不安に襲われた。果たして写っているかどうか、心配になったのである。

どんないきさつだったか忘れたが、高い窓越しにやっと連絡がとれた奥宮支局長に修羅場の様子を伝えた後も、そればかりが気になって、支局へ帰ってから、記事を書きながらひやひやし通しだった。現像され

た写真は、とにかく写ってはいたが、何枚かは痛恨の二重写しだった。だが、とにかく僕の撮った一枚の写真が―あまりパツとした出来栄ではなかったが―他の写真とともに朝日新聞に載ったのは、後にも先にもこのときだけである。

西安事件で監禁された蒋介石が、南京へ生還した時、お祭り騒ぎの上海の興奮を取材に、写真部のA君と南京路へ出掛けた。夜の街は人で埋まって、異様な雰囲気だった。その群衆が大きな波のうねりのように、後から後から押されるように動いていた。脚立の上でカメラを構えたA君の足元で、マグネシウムをたいた僕はギョツとなった。目の色を変えた群衆が、突然僕たちを目掛けて殺到してきた。カメラを抱えたA君と、無我夢中で逃げた。何度か捕まりそうになりながら、永安公司辺りまで逃げ延び、辛うじてそばのホテルへ飛び込んだ。エレベーターのボタンを押しながら、追っ手の気配が遠のいたので振り返ると、入り口のドアのところまでひしめき合っている。気がつく、彼らは回転ドアの両側から一気になだれ込もうとしたため、ドアが動かないのである。だが、ドアのガラス越しに見える群衆の殺気だった顔を見ると、エレベーターなど待ってられず、そばの階段を駆け上がった。

やっこのことでホテルの一室にたどり着いたときは、心身ともにクタクタだった。そこから社へ電話を入れ、その晩は恐ろしくて一晚泊だったが、外套をつかまれて一つ二つ殴られたというA君も、今はすでに亡い。

〔南船北馬〕第5号 1985年9月発行

魯迅も危うく拷問に

川崎正雄（元同盟通信中文総局華文部長）

三十数年前の新聞記者生活中、何があったかを回想していたら、最初に昭和7（1932）年1月末に勃発した上海事変当時のことが思い出された。これは僕が新聞記者になりたての若い頃の事件であっただけに、記憶がいまだに鮮明であるが、この第1次上海事変に起こった一連の事件の中で、今でも目の前にほうふつとしているのは次の光景である。おめでたい新春にはふさわしくない出来事の数々ではあるが、アジアにきな臭いにおいが漂う今日この頃の情勢を思うにつけても、消そうとして消し得ない記憶である。

第1次上海事変の起きた当夜、僕はすぐ北四川路の外れにある日本海軍の陸戦隊本部に詰め掛けた。本部の参謀室は石段を上った2階にあり、その下はトラックを入れるガレージになっていた。北四川路の外れ一帯には、広東系を中心にかなり多数の中国人が住んでいたが、殺気立った陸戦隊員は、これら中国人の住家をしらみつぶしに搜索して、居残っていた男の中国人を続々と陸戦隊に引き立て、後ろ手に縛り上げてガレージに荷物のように放り込んだ。尋問する余裕も何もあったものではない。瞬く間にいっぱいとなったので、今度はそれを引き出して、一人一人銃剣で刺殺した。これを見ていても、全くうんざりするし、参謀室の応接間に逃避していてもうめき声は陰惨を極めた。

これらの中国人の大部分は、戦争の勃発も知らずに居残った人々で、陸戦隊が見るようにスパイと思われる人はごく少数であったろう。殺された人々は三、四百人には達したとみられるが、この死体を黄浦江に捨



魯迅

てるため、陸戦隊のトラックは深夜の街をとばして行った。

事件の発生した翌日、僕は中国人多数が北四川路日本人小学校に収容されているというので駆け付けた。2階の教室には200人程度の中国人がいたであろうか。1人の陸戦隊員が、後ろ手に縛り上げた中国人を裸にして、荒縄で殴りつけているところだった。目的は白状しろということであろうが、やたらに拷問をかけるだけで、白状もくそもあったものではない。

ふと見ると、八字ひげをはやした中国服の立派な紳士が膝を組んで、冷ややかにこの状況を眺めていた。魯迅ではないか。僕は魯迅も同一の運命になるのかと瞬間ひやりとした。ところが幸い間もなく、内山完造さんが魯迅を捜して訪ねて来た。当時南京の国民政府から迫害された魯迅は、内山老などの庇護で北四川路外れの隠れ屋にいたのである。事變の勃発で魯迅が連行されたとの報道を得た内山さんは、方々を走り回って、ようやく魯迅を見つけたのである。内山さんは陸戦隊員に三拝九拝、身元を保証して魯迅を引き取ったので、僕らもほっとした気持ちであった。魯迅に対する内山さんの国境を越えた友情は、われわれにはのぼのとした温かさを感じさせるが、残りの人々はどうなったであろうか、考

えると今でもぞっとする。

陸戦隊のすぐ裏には北停車場から楊樹浦^{ようじゅ}行きの鉄道が走っており、この鉄道を隔てた向こうには十九路軍^{じゅうくろぐん}が日本の陸戦隊と対峙^{たいじ}していたので、この鉄道の踏切が処刑場に当てられていた。この処刑場に5、6名の青年が連行され、そのうち一人だけは刑場の隅の方にいたが、一斉射撃を受けたとき、偶然にも弾はこの青年を縛っていた革のバンドに命中した。自由を得た青年は、とっさに柵を越えて十九路軍側に走り去った。刑場から逃げ去った例はないこともないが、僕は人間の運命の不思議さとともに、この青年は恐らく徹底的な排日になるだろうと、当時漠然と考えていたことを今でも思い出す。

僕はその後の新聞記者生活で何回か従軍したが、いつもこの時受けた戦争の非人道性が強く精神的に作用していた。

〔新聞通信調査会報〕第25号 1965年1月1日発行

第4節 電通、聯合が一体に

直通電話開通で青森へ

福井輝三(元日本電報通信)

大正8(1919)年12月25日、日本電報通信社社員として通信部に勤務していた私は、近くに迫った正月をどのようにして迎えようかなどと、いろいろ思いを巡らしていた。ところが、突然、光永星郎^{ほしお}社長から青森へ出張の命を受けた。その翌日、東京―青森間に直通電話が開通するので、それまで青森や北海道の新聞社に電報で送っていたニュースを電話送りに切り替えるためであった。

命を受けた私は、函館勤務の命を受けた同僚の小野正雄君とともに、同夜10時上野駅発の東北本線で青森に向かった。上野―青森間は、今では特急「みちのく」なら9時間で行けるところだが、その当時は急行で17時間半を費やして、翌日の午後3時半に青森に着いた。小野君はその足で函館に渡ったが、私は東奥日報社^{とうおう}のお世話で安方町^{やすかた}にあった鉄道のボーイの合宿所の2階に設けられた仮事務所に陣取った。

私の仕事は電話で東京の本社からニュースを速記で受け取り、それをカーボン入りの原稿用紙に翻訳して、1部を地元の東奥日報に送り、1部を青函連絡船に託して函館にいる小野君のもとに送ることであった。

東京本社からの受信は連絡船の便数から割り出して朝5時と午後3時、午後10時の3回と指定されたが、仮事務所に取り付けられた電話は「デイルヴィル式」という市内通話しかできない性能の低いもので、東京からのニュースを受け取るには本局まで出向かなければならなかった。そこで毎日3回、本局まで受信に出かけたのだが、朝5時に受信するためには4時ごろに起床して宿舎を出なければならぬ。人通りのほとんどない朝5時前には、1層ほどの積雪を踏み分けて往復するのだ。

本局の電話機は集配人の控所のすぐそばの壁に取り付けられてあったので、私がニュースを受けていると、休息中の集配人が、私の周りを取り囲み、それまで見たこともない速記での受信をもの珍しく眺め、受信が終わって原稿作りのため事務所に戻ろうとすると、親切な集配の人々が「あんたの事務所にはまだ火の気もないのでしよう。それよりここでお仕事をしなさいよ」と、山のように炭火をおこしている集配人の詰め所に連れて行き、その隅に机と椅子を据えてくれる。

私はその人たちの好意に甘えて、集配人の詰所で原稿作りをしたが、集配人たちは、私の後ろから原稿をのぞき込んで、新聞よりも速いニュースにしきりに耳打ちなどして感激しているのがあった。私が青森で初^{しよ}端に本社から電話ニュースを取ったのは、帝国ホテルの火事であった。

このようにしてニュースの提供方法は、地元で大歓迎されたのだが、赴任前から軽い風邪気味であった上に、朝晩の寒行^{かんぎよう}仕事、その無理がたたってか、急に高熱の流行性感冒にやられてしまった。

驚いたのは東京本社である。早速、本社から青森県知事に電話がかかり「看護よろしく頼む」というわけで、手厚い手当てを受け、大急ぎで応援を派遣してくれた。1月半ば、本社に帰ると、元氣も取り戻したが、今度は大阪で感冒が流行して人手が不足した、というので、私が派遣される。これが私の関西の地に足跡をのこした初めである。青森での苦勞は、昭和41年11月に東奥日報社発行の『東奥日報と大正時代』に詳しく記載されている。

〔新聞通信調査会報〕第148号 1975年4月1日発行

カメラマンは「ボンタキ3年」

喜多原星朗（元日本電報通信、元同盟通信）

木挽町8丁目（現在の銀座7丁目）で生まれたのが大正8（1919）年の春まだ浅き2月であった。生家は三筋写真館。当時銀座周辺には2軒の

写真館があった。その1軒である。写真館は順調に営業を続けたが、大正12年9月、関東大震災で全焼。一度は再起を図ったが、昭和4年には写真業もついに断念するに及んだ。

昭和8（1933）年9月、私は、父が歩んで果たせなかった写真の道へ入った。父は写真館であったが、私の選んだのは新聞写真である。最初に入ったのが日本電報通信社（電通）。当時、わが国でトップクラスの新聞通信社ということで選んだ。父が写真館を営んでいた関係で、私は少年時代から写真いじりが好きで、ご多分に漏れず、写真の第一歩はベス単（ベスト判単玉レンズ付きカメラ）が始まりである。

新聞カメラマンの夢を託して写真部の門をたたいたのだが、入社早々の仕事は、なんと水洗い専門。この水洗いがその後五十余年、写真の道へ入って一番つらくもあり、懐かしいものとなった。ニュース写真としてプリントされたキャビネ判の写真は、常時300×400枚はある。置一帖以上もある大きな水槽に水を満たし、手でかき回して水洗いする。真冬の水道の冷たさは、少年の骨身にこたえた。仕事はそれに写真説明のガリ版刷りである

外回りの仕事が「持ち回り」である。聞き慣れない「持ち回り」とは、当時通信社が新聞記事と写真を、加盟している各新聞社、朝、毎、読、その他大小二十余社へ配信する仕事である。その日のニュース写真が出来上がり次第、まだ水のしたたるぬれたままのものを、キャプションをガリ版刷りした原稿用紙にくるみ、都内の新聞社へ自転車で配信した。

「持ち回り」は入社後誰もが経験すること、大学出であろうが、中学出であろうが、一度はこれをやらされた。この「持ち回り」にも、熾^し烈な戦いがあった。一分一秒を争う締め切り時間に間に合うか否かも、これにかかっている。先に着いている競争相手社の自転車が新聞社の前にあると、タイヤに針を刺しパンクさせるなどのあくどい妨害もし合っ

た。

「ボンタキ」というのは、現在はほとんど死語のようになっていたが、新聞写真が始まった明治末年から昭和10年の初めごろまでは、新聞カメラマンの間では通用語だった。「ボン」というのは、マグネシウムが発火するときの音、「タキ」というのは閃光器でマグネシウムを発火させる人間の動作である。いうなれば、マグネシウムを発火させる人間のことで、広義には新聞カメラマンの助手のことである。そして、多くのカメラマンたちは、多かれ少なかれ、ほとんどボンタキの経験者だった。

大正時代から昭和初期ごろまでは、アマチュアがいきなり新聞カメラマンになった例は少ない。そうした機会があっても、ボンタキの修業は必須であった。それについて朝日新聞OBの有名な写真家島田謹介氏は次のように語っている。「私は大正4年の春、朝日の写真部へ客員ということで入社しました。当時の写真部は全員で4名。入社早々、初めての仕事はボンタキでした。その後芝浦に工場争議があつて、女工たちの炊き出しを撮影しようというのです。ところが、現場へ着いていきなりボンタキと言われても、その要領が全く分からない。そのため素手でマグネシウムをたいたため、右手にひどい火傷をしてしまったことを覚えています」

当時、ボンタキ助手は必ず、仕事へ行くときは火傷防止に雑巾のような厚い布を持参するのが常識。広い場所ですく場合は水にひたして使うくらい、火勢の強いもので、私なども後年その後遺症で右手のつけ根に火傷の跡が10年くらい残っていた。

私が同盟にいた昭和12年ごろのある日、東京駅の取材に同僚の三好君がボンタキに行き、入社早々の宮崎泰昌君(後に読売の写真部長になった)が見習いで同行した。現場に着いていざ取材という段になり、カメラマン氏がシャッターを切ったが、三好君のフラッシュが発火しない。怒っ

たカメラマン氏が「バックヤロー」の一喝。三好君ますます慌てて何度も引き金を引いたが火が出ない。頭にきた三好君、あろうことか、閃光器を自分の顔に向けて、カシャリと一発、ボカーンと爆発。次の瞬間、目を射る閃光。途端に顔面全体が火傷でベロンと焼けたのだ。驚いたのは見習いの宮崎君。社へ帰つての第一声が「私にはボンタキはできません」の一言だった。「ボンタキ3年」という言葉がある。すなわち、ボンタキを3年経験すれば、一人前の新聞カメラマンになれるということである。

50年前のたわ言、と言つてしまえばそれまでだが、現代のようにメカが発達し、あらゆるカメラが全自動焦点やらストロボ内蔵など、アマチュアカメラマンと言うより、初心者から子供たちまで、押せば写るカメラの普及など、私たちは夢にも思わなかった。

(「南船北馬」第6号 1986年9月発行)

上田碩三さんのこと

菊江栄一(元日本電報通信通信部)

私が電通に入社したのは昭和9(1934)年の秋だった。学生時代から記者志望だったが、大学を卒業した8年はどこを受けてもみんなだめ翌9年秋の電通通信部の採用試験にやっと受かったという次第。一緒に合格したのは、石坂晃一、松田誠実、それに私の3人だった。

当時の電通は、日本電報通信社の略称で、略称をそのまま本称とした

のは、戦後の4代目社長吉田秀雄さんのときだった。このときの電通は、通信部が電通から切り離された後の純然たるアドバタイザー・エージェンシー（広告代理店）だった。

私が入社した当時の社長は初代の光永星郎^{ほしお}、通信部長が常務取締役の上田碩三^{しんぞう}、編集長が監査役の中根栄^{なかね}の諸氏だった。今日流^{こんにちりゅう}の新聞社組織に当てはめると、上田さんは編集担当重役、中根さんは編集局長といったところか。私と一緒に通信部に入った石坂君は日銀記者クラブ詰、松邑君は警視庁記者クラブ詰だったと思う。私だけが内勤で、それも次から次と送られてくる判読しにくい生原稿を整理して、電報、電話で送信するという地味で、しんどい職場だった。私のすぐそばに中根さんが控えていて、電話の送り方がまずいなどと、よく怒鳴られた。早く外勤に回して欲しかったなああと、何度か思い悩んだことだった。

夜になると、出先の記者がぞろぞろ社に上がってくる。それから原稿を書く者もいるが、一杯飲みに入る連中もいる。日銀詰になったばかりの石坂君、ある夜、社に上がってくると、大柄な体に似合った大きなステッキ（原注Ⅱ当時の新聞記者のアクセサリーでもあった）をこれみよがしに振



上田碩三

りながら、「よおー、やっとなるか」などと、原稿整理でつかしている私の肩をたたきながら、「今夜は結城^{ゆうき}（豊太郎）総裁の招待でね」とか何とか、すこぶるいい気なものだ。「何だ、この野郎、日銀帳尻ぐらしいしか送ってこないくせに、大きな顔しやがって」と口には出さぬものの、内心すこぶる面白くなかった。松邑君とはあまり接触はなかったが、石坂君とは戦後もずっと親しく付き合った。だが今や両君とも亡くなり、同期3人のうち私だけが生き残っている。

光永社長は、カイゼルひげをはやしたいかつい風貌だったが、眼鏡の奥の目が優しかった。上田さんは、端正な瘦^{うすく}軀で眼光鋭く、万事てきぱき処理する人のようだった。うるさ型は中根さんで、鼻下に白ひげを短く刈り込んだ赤ら顔で、しょっちゅう私の身辺をにらみつけているような気がした。これが入社当初の私の三首脳への印象だったが、今にして思えば、いちばん強く印象に残っているのは上田さんで、時を経るごとに敬慕の念を禁じ得ない。駆け出しの頃の私は全く気付かぬことだったが、戦後、上田さん逝去後のある日、電通時代の私の先輩記者から、上田さんが私のことについていろいろ気を使ってくれたことを聞かされ、胸にじんとくるものを感じたことだった。

私の所属する通信部の最高上司だった上田さんは、酒を飲まない（あるいは飲めない）人だった。たしか月給65円で採用された私だったが、まだ新米の安給料の分際で、あちこち酒を飲むことを覚えた。交詢^{こうしゆん}社前の焼鳥屋台「鳥繁^{とりしげ}」で、飲み仲間と一杯15銭か20銭のコップ酒でメートルを上げたり、時には先輩に連れられて銀座のバーにも行ったりした。シラムレン、ルパン、ブーケ、サイセリア、ラインゴールドなど、一度ならず足を運んだことのある一流のバーの名が思い浮かぶ。

電通3階の通信部の一隅にデスクを構えていたUP特派員のマーシャルという老記者が、私に「夜のバタフライ」ならぬ「バーフライ」という

ニックネームをつけたのもこの頃だ。とてもじゃないが、こんなオーバーなあだ名をつけやがって、と癪に障った。酒を飲まない上田さんが、こんな私のニックネームを聞いたら、さぞ苦々しく思ったことだろう、と気に病んだほどだった。

昭和11年6月、いわゆる電聯合併によって発足した新通信社同盟（原注Ⅱ同年1月、旧聯合は同盟通信社と改称、これに電通通信部が合体）の社屋は、旧聯合社屋での短い一時期を経て、これまでと同じ西銀座の電通ビルだった。初代同盟社長は岩永裕吉、編集局長上田碩三、経済局長古野伊之助、外報局長堀義貴の諸氏。私の職場は、電通時代のそれを少し広げたような外報局発信部。初代部長がモスクワ帰りの萩野伊八、2代目が北京帰りの山上正義、3代目がロンドン帰りの福岡誠一の諸氏だった。いずれもそうそうたる顔触れだったが、それでも私は、あまた内勤の電報係かと嫌になった。

その頃、上田さんが私にこう言ったことがある。「君は外勤を希望しているが、いずれは外に出る機会はある。今の仕事を嫌がってはならない。記事を読む力、記事を選別する力、記事を送信する工夫、それが必ず役立つときが来る。この力や工夫を、しっかり身に付けておくことだ」と。同盟に移ってから2年半、昭和14年1月、やっと私は特派員として戦火渦巻く広東へ赴任する機会を得た。現地から本社へ記事を送信する度に、上田さんのこの忠告が、私の記事の中に脈々と生き続けた。

私が特派員として中国各地に在勤したのは、南支総局（広東）、中支総局（上海）を通じ6年半。それから国通（満州国通信社）本社へ出向、敗戦。抑留と1年半の通算8年近くを経て21年秋に帰国した。南支各地での従軍記者の経験、上海での現地経済の勉強、満州での抑留生活など、数々の苦楽の思い出は尽きない。

上田さんは、明治42（1909）年、東京高商（現一橋大学）を出るとすぐ

に電通に入社した生え抜きの電通マンである。終始通信部を根城として、電通の通信網を整備し、特に外信網の開拓に努めて、電通を国際的な通信社にのし上げた功労者だったと言える。大正8年のパリ平和会議、同10年のワシントン軍縮会議、昭和5年のロンドン軍縮会議など、歴史的な数々の国際会議に特派員として活躍した大記者でもあった。

昭和18年5月、私が広東から上海へ転任した折、休暇をもらって一時帰国したことがある。当時、同盟の編集局長だった上田さんは、私ともう一人の帰国特派員のために、困難な食糧事情の中を袋に入れた米を持参して、銀座裏の小料理屋で歓迎の宴を張ってくれた。往年の「大特派員」上田さんが、その足元にも及ばぬ私たち「小特派員」の労をねぎらってくれたのである。

上田さんは、終戦直前の20年7月、同盟の常務理事から3代目の電通社長に就任したが、22年5月、公職追放令で辞任している。その上田さんが、同盟解散後帰国した私を現在の中日新聞に推挙してくれた。21年の暮れ近く、上田さんは銀座西にあった当時の中部日本新聞東京総局に直接私を連れて行って、総局長の山室次郎専務に紹介、入社の手を助けてくれた。

私は戦後の日本経済が勉強しなかったし、そのためには中日の名古屋本社より東京総局（後に東京支社、東京本社）へ入りがかったが、希望通り東京総局経済部に勤務、日銀の金融記者クラブで仕事ができるようになった。これは全く上田さんのおかげだった、と深く肝に銘じている。その上田さんが、公職追放を受けて間もない24年1月、親友のUP副社長マイルズ・ボーン氏と千葉県浦安沖で鴨猟中に遭難、不慮の死を遂げた。尊敬するこの大先輩の死は、私にとって痛恨の極みと言うほかはない。

上田さんの没後、電通通信部の生き残り組で組織された「淡水会」と

いうのがある。上田さんの命日に当たる1月30日に、毎年「淡水会」のメンバーが一堂に会して、故上田先生のご冥福を祈り、同時に僚友盃を交わして親睦を深めようというのである。「淡水会」の初代会長は横田実さんだったが、同氏亡き後、現在は田村源治さんが2代目会長。だが、その「淡水会」員も年経るごとに減ってゆく。昭和10年春、電通通信部の最後の採用試験を受けて入ってきたのが10人ほどだったと思うが、その大半がすでに故人である。現在生き残っている会員も、昭和10年組でもとくに古稀を過ぎていることになる。もう90の坂を越したと思われる会長「タムゲン」さんをはじめ、今やみんな年寄りの集まりである。酒を飲まない上田さんの遺影の前に、どんちゃん騒ぎをやった当初の頃のにぎやかさはもはやない。あの頃の会場は、銀座三越裏の小料理屋「こうらく」だった。

1 昨年(昭和10年)の1月、私がこの会合に出席したときの会場は、内幸町の日本プレスクラブだったが、参加者は田村さんをはじめ二、三十人ぐらいだったろうか。静かに上田さんをしのび、華やかなりしころの電通通信部時代を語り合ったことだった。(1986年6月23日)

(「南船北馬」第6号 1986年9月発行)

戦争取材で中国各地を転々

山田実(元日本電報通信青島支局)

私は、昭和10(1935)年に日本電報通信社青島支局^{チンタウ}に入社しました。

当時の青島支局は、支局長が伴野韶光氏で編集長が竹中三郎氏でしたが、竹中さんが病氣のため、上海から臨時応援に坂田寛蔵氏⁴が来ていました。ニュース翻訳が福成秋雄、経済通信⁴の電話送稿が福田貴志子の諸氏でした。

無線による本社からのローマ字の電報を受信するのが私の主な仕事でした。早朝、上海からは二瓶邦雄氏が独特の符号による外経ニュースを送ってくるのですが、慣れるまで随分難渋しました。

11年の正月は済南で迎え、二・二六事件を同地で体験しました。その日の朝、青島と交信しただけで、上海からの電報を受けようと、ダイヤルを回しても何も入りません。10時ごろに聯合通信の二井林和夫氏(岩井と改名)が訪ねてきて、聯合もニュースが入らないのを知りました。総領事館も本省からの連絡は全然ないことが分かりました。午後2時になって上海からやっと流れ、事件の発生、経過がせきを切ったように入ってきました。

この年1月、同盟通信が設立され、海外向けの短波無線放送は同盟一社のみと限定されました。

事件後、電聯の合併は急速に進み、同盟済南支局は戸塚支局長、無電は二井林氏、翻訳は田島氏(原注)戦後世界日報を経てサンケイとなり、私は青島支局へ戻りました。伴野支局長、竹中編集長、無電は坂本末松、勝下虎彦の両氏と私。翻訳福成氏、外電速報福田嬢でした。

12年の正月は青島でした。7月7日に盧溝橋^{ろこうきょう}事件が突発、北京から緊急の第一報を受けたのは、忘れ得ないことの一つでした。

海軍の渡洋爆撃を受けた南京支局から中村農夫^{なみの}支局長、無電の磯田老稲津写真部員が、陸路済南経由で引き揚げてきて東京へ向かったのに次いで、済南支局も青島に引き揚げ、館陶路^{かんたうじ}の支局2階は男ばかりの生活が始まりました。缶詰ばかりの毎日で9月上旬、邦人最後の引き揚げで

大連に向け青島を後にしました。私は脚氣がひどく東京へ帰りました。13年の正月は東京でした。連日、北京、上海からの電報を受けては東亜部へ運びました。連絡に細波孝、大滝鹿次両氏。企画部に属して部長は吉田松治氏でした。

2月、脚氣も治ったので北支総局へ転勤。3月に姫路の第10師団に従軍のため津浦線を南下、済南を経由し徐州手前の棗莊へ行きました。前線支局の記者は斎藤正躬氏、写真は相沢義信氏、無電は阿部孫一氏でしたが私が代わったのです。3月、4月と戦線は台兒莊の攻防をめぐって膠着状態。李宗仁、白崇禧將軍が大運河の線に頑張って24サンチ要塞砲を撃つて来るのです。ものすごい威力で、死傷者が続出しました。

ここで、徐州へ向けての電波謀略戦が始まりました。北支軍報道部の天本中佐が総指揮。斎藤さんに対してニュースの応援要請がありました。お役に立つならと、私は早速、ローマ字放送を連日受信して軍に渡ししました。この頃には、カタカナ漢字混じりの文にして受信できるようになっていましたので、兵隊さんにはすぐ役に立ったようです。間もなく斎藤記者に代わって依岡健一郎氏が来襲しました。

7月に天津駐屯軍の第27師団が北支から船で南京に上陸しました。本間雅晴中将指揮の覆面部隊で大学出が多いのでインテリ部隊とも言われました。この部隊に従軍したのは依岡記者、映画は浅井達三氏、写真は木村さんでした。

14年の正月は漢口野戦支局でした。3月に南昌攻略戦。漢口からは前田雄二記者を中心に、映画は梧堂照夫氏、写真は森武二郎氏。無電が私で1班を編成。南昌北西の武寧を攻略する第6師団に従軍。この後、廬山の残敵掃蕩戦は千葉愛雄記者でした。

北京へは5月に帰ったが、月末に北海公園でノモンハン事件の発生をラジオで知りました。国通(満州国通信社)へ応援部隊を急派することに

なり斎藤正躬記者、相沢写真部員と私が行くことになり、新京―ハイラル―満州里を回って北京へ帰りました。6月に入り、第2次ノモンハン事件が発生し私だけ新京へ。ハイラル―ハルハ河近くの戦場で2カ月を過ごし、ソ連が総攻撃を開始する2日前にハイラルへ。そして北京へ帰りました。

15年の正月は北京でした。この年の10月、仏印進駐で私は早速ハノイ行を志望し、赴任途中、広東総局で16年の正月を迎えました。1月中旬、海南島に寄港して海防經由でハノイに着きました。

(「南船北馬」創刊号 1981年11月発行)

満州事変発生の一報を受ける

坂田東助(元日本電報通信京城支局)

私が邦文速記者として京城(現ソウル)へ渡ったのは昭和2(1927)年2月である。勤務先はシンガー・ミシン会社京城中央店という外国商社。初めて80円の月給をもらった。日本のように税金とか組合費とか一切引かれず、正味の80円である。うれしかった。半分の40円を親元へ送り、残りの40円で生活することにした。当時下宿代は4畳半で3食付き25円から30円くらいだから、40円あれば十分生活していた。よき時代だった。

その代わり仕事は厳しかった。その日の仕事は必ずその日のうちに片付ける。日本のように10時のお茶、3時の小憩なんてものは一切なし。

そして夕方5時の退庁ベルが鳴ると、あたかも潮が引くようにさっと引き揚げる。日本では残業していると、残業までして頑張っていると見られるが、向こうではかえって残業するのは本人の努力が足りないからとマイナスに見られる。しかし納得のいかない点は、少しでも外人の意に添わない、逆らうような態度を見せると即座にクビ、あすから出社に及ばずと簡単に首を切る。それが新入社員だけでなく、十何年勤めた古参社員でもみな同じ。こういう場面を再三見ているので、ここは長いところではない、何とか転進を図らねばと思っていた矢先、チャンスが到来した。

6年8月、下関―釜山間に海底電話線が敷かれ、それまで新聞ニュースは電報で送られてきたものが、電話で送られるようになり、必然的に電話速記者が入用になった。この機会を逃がしてなるかと、勇躍、電通（日本電報通信社）京城支局に入社した。

支局は、明治町の通りに面した普通の民家を改造した2階建て。下が通信部、2階は商通部と支局長の私室。当時の支局長は斎豊三郎（いづみ）という古武士の風格をした温厚な方で、随分かわいがられた。私の仕事は午前中に5通話、午後に7通話の予約電話を取る。1通話3分間、あるいは2通話6分間のうちに政治、経済、社会、スポーツ、手当たり次第に交換手が「時間です」と言うまで、ぶっ続けに読んでくる。一語も聞き漏らすまいと書き取ることは、並大抵の技ではない。2、3度聞き返すものなら、「何をまたもたしとるか。書けないなら代われ、代われ」と言われるけれど、1人しかいないから代わりようがない。全神経を耳にして書くので疲れることおびただしい。とにかく早く慣れることだと思って、歯を食いしばって一生懸命頑張った。10日もすると、だんだん要領も分かってスムーズに書けるようになった。

それに意地の悪い読み手ばかりではなく、中には非常に親切に、こ

は書きにくいと思われる所は調子を落とし、ここは大丈夫と思う所はピッチを上げるといふふうに緩急自在に読んでくれるので非常に助かった。

電話で取った原稿はすぐ反訳する（原注Ⅱ速記文字を普通の仮名交じり文に書き直すこと）。それを他の人がガリに切って謄写版にかける。刷り上がったものを契約新聞社（同Ⅱ当時、京城市内には京城日報、東亜日報、朝鮮日報、中央日報の4社があった）のボーイが待っていて、すぐ自分の新聞社に持ち帰る。夕刊締め切り前に入った重要ニュースは、ガリを切る前に複写して電話で新聞社に吹き込む。字の上手下手は言っておられない。分かりますればいいので、とにかくスピード第一。当時京城には新聞聯合の支局もあって、電通、聯合が猛烈な分秒を争う競争をしたものである。

さて、9月18日、この日は私が電通に入って初めて宿直した夜である。午後10時ごろ、その日の仕事も終わって、さあ寝るとするかと床に入って、ところどころとまどろんだかと思ったら、リン、リンと電話のベルしかも普段の聞き慣れたベルの音と違ってあたかも急を告げるようなベルの音に、今頃何かと受話器を取ると、交換手が奉天からですと言う。すわ事件と思う間もなく、「おい、京城か。これをすぐ本社へ送ってくれ」と吹き込んで来たのが、満州事変発生（まんしゅうじへん）の歴史的な第一報で、「本日午後10時30分、奉天駐屯のわが鉄道守備隊と北大營（ほくたいえい）の東北陸軍第一旅団の兵が衝突、目下激戦中」との超ビッグニュースである。

さあ大変と支局長をたたき起こして報告、すぐ本社へ至急電話で送った。その後、続々と後報が入るので、電話にかじりつき、取ったものはそのままオウム返しに本社に流す。支局長は社員を非常呼集して、新聞社へ急報する。総督、総監に流す。一時は戦場のような騒ぎで、電話送稿の記事が続々と打ち返されてきて、斎支局長と奉天の大西支局長が喜びの交歓をしたことを覚えている。

翌朝、本社の中根編集長から「けさの東京紙は電通一辺倒、昨夜の奮闘を深謝する」という感謝電をもらって支局長以下支局員一同冷酒で乾杯し、大いに面目を施したものである。

その頃は今のような専用線がなくて、ニュースの送受信にはもっぱら電話局の電話線に頼っていたので、交換手の女性と仲良くしておくことが、電話速記者の常識。かりそめにも交換手を怒らせたり、侮辱するような言動をすると、必ず江戸の仇を長崎で討たれることになる。その点は私も十分気をつけていた。

例えば、もう少しで終わりそうだと思われるとき、交換手が「時間です、時間です」とせき立てる。切られてしまうと、次の予約まで尻切れトンボになるので、もう5秒、もう3秒と頼むと待ってくれる。やっと終わって「別稿」と先方の声がかかると、「ありがとう」と必ず礼を言うことを忘れてはいかん。普段仲良くしておくと、こういう無理も聞いてもらえるが、交換手につっけんどんにしておくと、時間が来たらピシャリと切られてしまう。切られても「時間が来たら切ったまでです」と言われれば、文句の言いようがない。あの頃はよく速記者と交換手は、その日の勤務が終わって、お互いに夜勤の場合、暇なときは電話で喋喋ちやうなんな、喋喋と恋を語り、やがてそれが実を結んでゴールインという例は珍しくなかった。

11年に電通と聯合が合併して同盟通信社ができた。支局も手狭になったので、明治町から京城日報社の3階の来青閣というホールに引っ越した。支局も支社に昇格し、部制が敷かれて編集、通信、地方の3部制となった。支社長には浅野豊、編集部長は古津四郎、通信部長は坂田東助、地方部長は鈴木一となったが、当時の支社長も編集部長も地方部長もみな故人となり、生存者は私のみとなった。通信施設も大幅に改善増強され、東京を起点に朝鮮半島を縦断し奉天、新京、大連を結ぶ大陸専用電

話線が開設。同時に電送写真の設備も整えられた。

こうなると、朝から晩まで専用線を使うことができる。ニュース量も電話と同報無線の2本立てになったので、それに対応するために速記者も大幅に増員しなければならぬ。韓内だけでは足りず本土の支社局からも回してもらうけれど、どこでもいい人物は出たがらない。やってくるのは一癖も二癖もありそうな一匹狼ばかり。電話を取るときは取るけれども、自分の持ち時間を済ますとさっさと消えてしまう。一時は速記者だけで10人近くいたが、玉石混交で、使い分けるのにほんとに苦労した。

そのうちに太平洋戦争が始まって戦局が苛烈になると、速記者で応召する者が続出、補充することが困難となった。緒戦の頃は景気のよい戦勝ニュースが流れてきたが、18年の後期から19年になると、玉砕、転進という体裁のよい敗戦の報ばかり。ガダルカナル奮戦記とか、ミッドウェー海戦記とか、アッツ、キスカの玉砕記という長尺ものが続々と流れてくるので、そういう読みもの本位の記事の反訳は後回し、専らバツグ便に委ね、専用線では速報ものに全力投球した。その後、私は全州支局長として転出。支局づくりに専念している最中に、20年4月、40歳の私にも赤紙到来。

8月15日、終戦。10月に入ってやっとお役ご免となり、急いで京城に戻れば、同盟は解散寸前で復職の余地なく自然離職の形となった。やむなく私は家族が集結している修養団の宿舎で妻子と対面、お互いに無事を喜び合った。

（「新聞通信調査会報」第398号 1996年1月1日発行）

満州里で中国軍に捕まる

大西秀治（元日本電報通信北京支局）

戦前、中国本土に10年、満州に15年、戦後ソ連で5年、合計30年の生活を中ソ両国で送った。昭和4（1929）年7月のソ支戦争、13年7月の張鼓峰の日ソ衝突¹⁰⁶、14年5月のノモンハン事件に私は記者として報道に当たった。終戦後満州からソ連に抑留された私たち新聞・通信記者は時々これらの事件の報道が、ソ連にとって不利であったことをソ連当局から責められたが、「われわれは、常に公正な立場から事実を報道するのが任務で、ソ連のように主義、主張を通すため、一方的な報道はしない」と抗弁したものである。考えてみると、当時は軍当局の記事統制や禁止事項があって、真実の報道も制限されており、ソ連側の言うことも全部否定するわけにはゆかない。まして捕虜の身であるわれわれの弁明などソ連当局は全然受け入れなかった。

私は大正13年12月、電通（日本電報通信社）記者に採用されてから終戦までの約21年間、電通・国通（満州国通信社）の記者生活中、幾たびも死線を突破したが、昭和4年7月から9月に至る丸々2カ月、満州里特派員として、ソ支戦争の報道に当たった時のことは、今でも忘れられない。

4年7月11日、当時、東北4省を統治していた張学良は、満州各地に発生した学生運動を抑え切れず、また政権内に対立している新旧両派の紛争を統制、妥協することができず、（今日の中共の状況は当時の満州の状況によく似ている）動揺している人心を対外問題に向けようと考えた。そして、ソ連との共同経営であった東支鉄道―満州里・ポグラニチナヤ間、ハルビン・長春間―を自己の権力下に回収してしまった。このためソ支

国境は7月14日封鎖され、同17日、ソ連は対支国交断絶を宣言し、ソ支両軍は国境各地で戦闘状態に入った。

北京で発行している新聞はいずれも張学良軍の不利、敗退、ソ連軍の満州里侵入を報道した。ソ支戦争は国際的大ニュースとなり、電通北京支局記者だった私に、本社からハルビン、満州里に特派を命じてきた（原注）当時の電通支局長は横田実氏）。

満州里に到着してみると、ソ支両軍は対峙^{たいじ}しているだけで交戦してはいないし、市街も案外平靜であった。私は市内各所を撮影して回った。ところが、いつの間にか足は郊外におよび、支那駐屯軍の兵営も写してしまった。そして満州里の実況第一報を東京と北京に送るつもりであったが、ついに支那軍に見つかり逮捕されてしまった。

ソ支両国の関係悪化で、両国当事者は日本人を非常に警戒していた。支那兵は、私をソ連のスパイぐらいに思ったのだろう。兵営内の営倉に入れてしまった。営倉の外で支那兵たちが話しているのを聞くと、軍法会議にかけるかもしれない様子である。私は、中国語が分かるだけに気がでなかった。

しかし、私を取り調べのため営倉に入ってきた法務官は―後で分かったことだが、非常な親日家であった―丁重な態度で質問した。私は、北京からきた日本の通信記者であることを説明し「写真も早く北京に送って満州里は厳として中国軍が守備しており、市街も平穏であることを中国人に報道したいのだ」と弁明これ努めた。ところが、満州里駐屯軍司令官は、これを聞いて「早くそのことを報道してくれ」と私に頼み、打って変わって、ビールの歓待まで受け、さっそく釈放されて、日本ホテルに帰ったのである。

もし、私が中国語を話せなかったら、あるいは軍法会議にかけられ、抑留されたに違いない。

ソ支紛争は、その後7月25日、日英米仏伊独6カ国で「東支鉄道はソ支両国共同管理にする」ことをソ支両国政府に勧告し、27日、中国側がこれを承認し、次いでソ連も承認。9月1日には「東支鉄道問題に関するソ支交渉」の協定が成立して、両国国境に平和がよみがえったのである。

13年7月12日、張鼓峰の日ソ両軍の衝突は、日本軍苦戦の結果、8月12日、現状維持のまま停戦協定が成立した。また同14年5月11日発生したノモンハン事件は、拡大して5月28日、東支隊の全滅、6月27日、ボイル湖上の空中戦となり、8月24日、外蒙国境ハルハ河畔の日ソ両軍の大衝突で、まさに一大決戦になるかにみえたが、両国軍首脳の大勢判断で、9月15日、停戦協定が成立した。

このように中国とソ連、あるいは日本とソ連は、国境で過去幾度となく軍事衝突はあった。しかし一大決戦になることはなかった。それは①国境が不明確であること②国境があまりにも長いこと③国境付近には雑多な民族が入り乱れて居住していること―などのためである。ときに軍隊が誤って国境を越えることから衝突が起こることもあるが、その半面、これが大衝突に発展することを食い止める原因にもなっていると言える。

〔新聞通信調査会報〕第53号 1967年5月1日発行

